

茨城県教育財団文化財調査報告第58集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19

長 峰 遺 跡
(下)

平成 2 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨 城 県 教 育 財 団

茨城県教育財団文化財調査報告第58集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19

竈
長 峰 遺 跡
(下)

平成 2 年 3 月

住宅・都市整備公団つくば開発局
財団法人 茨城県教育財団

目 次

— 下 卷 —

第5節 土坑と出土遺物	444
第6節 溝と出土遺物	483
第7節 掘立柱建物跡と出土遺物	497
第8節 中世の遺構と出土遺物	499
1 堀・溝	499
2 塚	514
第9節 遺構外出土遺物	521
第10節 土器以外の出土遺物	527
1 土製品	527
2 石器・石製品	531
3 古銭	534
4 金属製品	534
第4章 まとめ	536
第1節 弥生時代の住居跡と遺物	536
第2節 古墳時代の住居跡と出土遺物	543
1 土器について	543
2 集落について	553
第3節 古墳と出土遺物	561
1 古墳の形態と分布	561
2 墳丘と規模	561
3 周溝・ブリッジ	562
4 埋葬施設	563
5 出土遺物と築造時期について	563
6 埴輪と工人達	564
第4節 中世城郭遺構について	566
第5節 土坑と溝について	572
1 土坑	572
2 溝	573
終章 むすび	574

挿 図 目 次

<p>第356図 土坑実測図-1444</p> <p>第357図 土坑実測図-2445</p> <p>第358図 土坑実測図-3446</p> <p>第359図 土坑実測図-4447</p> <p>第360図 土坑実測図-5448</p> <p>第361図 土坑実測図-6449</p> <p>第362図 土坑実測図-7450</p> <p>第363図 土坑実測図-8451</p> <p>第364図 土坑実測図-9452</p> <p>第365図 土坑実測図-10453</p> <p>第366図 土坑実測図-11454</p> <p>第367図 土坑実測図-12455</p> <p>第368図 土坑実測図-13456</p> <p>第369図 土坑実測図-14457</p> <p>第370図 土坑実測図-15458</p> <p>第371図 土坑実測図-16459</p> <p>第372図 土坑実測図-17460</p> <p>第373図 土坑実測図-18461</p> <p>第374図 土坑実測図-19462</p> <p>第375図 土坑出土遺物 実測・拓影図-1467</p> <p>第376図 土坑出土遺物 実測・拓影図-2468</p> <p>第377図 粘土貼り土坑 実測図-1470</p> <p>第378図 粘土貼り土坑 実測図-2471</p> <p>第379図 粘土貼り土坑 実測図-3472</p>	<p>第380図 粘土貼り土坑出土遺物 実測・拓影図474</p> <p>第381図 壁溝を有する土坑 実測図-1475</p> <p>第382図 壁溝を有する土坑 実測図-2476</p> <p>第383図 壁溝を有する土坑 実測図-3477</p> <p>第384図 壁溝を有する土坑出土遺物 実測・拓影図478</p> <p>第385図 地下式坑実測図480</p> <p>第386図 粘土貼り土坑・ 壁溝を有する土坑・ 地下式坑位置図482</p> <p>第387図 第2・3・4号溝実測図483</p> <p>第388図 第5・6・7号溝実測図484</p> <p>第389図 第8・9号溝実測図485</p> <p>第390図 第11・12号溝実測図486</p> <p>第391図 第14・15・16号溝実測図487</p> <p>第392図 第18・23・27号溝実測図488</p> <p>第393図 第17・19・20・21・22・ 24・25・26号溝実測図488~490</p> <p>第394図 第28・36号溝実測図491</p> <p>第395図 第29号溝実測図492</p> <p>第396図 第29号溝出土遺物実測図493</p> <p>第397図 第29号溝出土遺物実測図494</p> <p>第398図 溝と土地区の関係 位置図496</p> <p>第399図 第1号掘立柱建物跡実測図498</p>
--	--

第400図	堀・塚・溝位置図	504	第414図	遺構外出土遺物 実測図-2	522
第401図	第1・2号堀・第34号溝 実測図 1	505~506	第415図	遺構外出土遺物 実測図-3	523
第402図	第1・2号堀・第34号溝 実測図 2	507~508	第416図	遺構外出土遺物 実測・拓影図-4	524
第403図	第3・4・5・6号堀 実測図	509~510	第417図	時期別住居跡規模・方位方向 (弥生時代)	528
第404図	第7号堀実測図	511	第418図	弥生時代住居跡分布図	542
第405図	長峰城跡周辺地形図	512	第419図	土器分類図(1)	545
第406図	龍山上遺物実測図	513	第420図	土器分類図(2)	546
第407図	第1号塚実測図-1	515	第421図	土器分類図(3)	548
第408図	第1号塚実測図-2	516	第422図	土器分類図(4)	549
第409図	第1号塚出土遺物 実測図	517	第423図	土器分類図(5)	550
第410図	第2号塚実測図 1	518	第424図	土器分類図(6)	552
第411図	第2号塚実測図-2	519	第425図	古墳時代住居跡 分布図	559~560
第412図	第2号塚出土遺物 実測・拓影図	520	第426図	古墳の規模別分布図	562
第413図	遺構外出土遺物 実測・拓影図-1	521	第427図	城郭遺構全体図	570
			第428図	長峰城跡周辺地形図	571

表 目 次

表9	土坑一覧表	462~467	表14	石器・石製品一覧表	531~534
表10	粘土貼り土坑一覧表	473	表15	古銭一覧表	534
表11	壁溝を有する土坑一覧表	478	表16	鉄製品一覧表	534~535
表12	溝一覧表	495	表17	住居跡内出土主要土器一覧表	541
表13	土製品一覧表	527~531			

写 真 目 次

- P L 3 第1·2·3号住居跡
- P L 4 第4号住居跡 第4·5号住居跡遺物出土状況
- P L 5 第5·6号住居跡 第6号住居跡遺物出土状況
- P L 6 第7·8号住居跡 第7号住居跡遺物出土状況
- P L 7 第9号住居跡 第9·10号住居跡遺物出土状況
- P L 8 第10·11号住居跡 第12号住居跡遺物出土状況
- P L 9 第12·13号住居跡 第13号住居跡遺物出土状況
- P L 10 第14号住居跡 第14·15号住居跡遺物出土状況
- P L 11 第15·16号住居跡 第16号住居跡遺物出土状況
- P L 12 第17号住居跡 第17·18号住居跡遺物出土状況
- P L 13 第18·19号住居跡 第19号住居跡遺物出土状況
- P L 14 第20·21·22号住居跡
- P L 15 第23·24号住居跡 第24号住居跡遺物出土状況
- P L 16 第25·26·27号住居跡
- P L 17 第28·29号住居跡 第30号住居跡遺物出土状況
- P L 18 第30·32号住居跡 第31号住居跡遺物出土状況
- P L 19 第33号住居跡 第33·34号住居跡遺物出土状況
- P L 20 第35号住居跡 第35·36号住居跡遺物出土状況
- P L 21 第36·37号住居跡 第37号住居跡遺物出土状況
- P L 22 第38·39号住居跡 第39号住居跡遺物出土状況
- P L 23 第40号住居跡 遺物出土状況
- P L 24 第41号住居跡 第42号住居跡遺物出土状況
- P L 25 第42·43号住居跡 第43号住居跡遺物出土状況
- P L 26 第44号住居跡 第45号住居跡遺物出土状況
- P L 27 第45号住居跡 第46号住居跡遺物出土状況
- P L 28 第46·47号住居跡 第46号住居跡遺物出土状況
- P L 29 第48号住居跡 第48·49号住居跡遺物出土状況
- P L 30 第49·50号住居跡 第51号住居跡遺物出土状況
- P L 31 第51·52号住居跡 第51号住居跡遺物出土状況
- P L 32 第53·54·55号住居跡
- P L 33 第56号住居跡・遺物出土状況
- P L 34 第58号住居跡 第58·59号住居跡遺物出土状況
- P L 35 第59·61·62号住居跡
- P L 36 第63·64·65号住居跡
- P L 37 第66·67号住居跡 第68号住居跡遺物出土状況

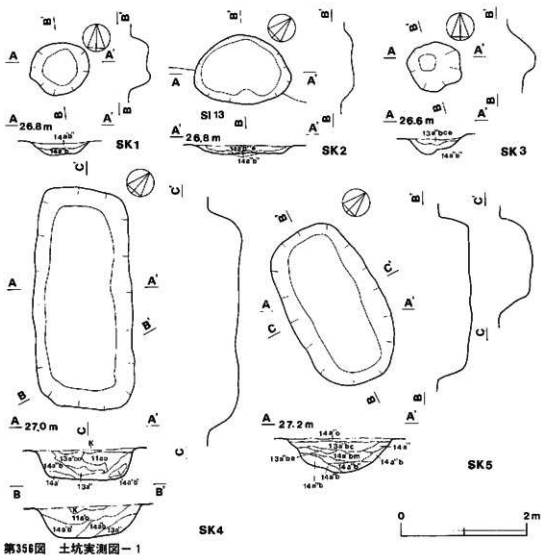
- P L 38 第68·69号住居跡 第69号住居跡遺物出土狀況
- P L 39 第70·71号住居跡 第71号住居跡遺物出土狀況
- P L 40 第72号住居跡 第72·73号住居跡遺物出土狀況
- P L 41 第73·74号住居跡 第75号住居跡遺物出土狀況
- P L 42 第75号住居跡 第76号住居跡遺物出土狀況
- P L 43 第76·77号住居跡 第77号住居跡貯藏穴内遺物出土狀況
- P L 44 第78·79号住居跡 第80号住居跡遺物出土狀況
- P L 45 第80·81号住居跡 第82号住居跡遺物出土狀況
- P L 46 第82·83·84号住居跡
- P L 47 第85号住居跡遺物出土狀況
- P L 48 第85·86号住居跡 第86号住居跡遺物出土狀況（炭化材）
- P L 49 第88·90号住居跡 第88号住居跡遺物出土狀況
- P L 50 第90号住居跡 第90·91号住居跡遺物出土狀況
- P L 51 第91号住居跡 第91·92号住居跡遺物出土狀況
- P L 52 第92·93·94号住居跡
- P L 53 第95·96号住居跡 第95号住居跡貯藏穴内遺物出土狀況
- P L 54 第97·98号住居跡 第97号住居跡貯藏穴内遺物出土狀況
- P L 55 第99号住居跡 第100号住居跡遺物出土狀況
- P L 56 第100·101号住居跡 第101号住居跡遺物出土狀況
- P L 57 第102号住居跡・遺物出土狀況
- P L 58 第103·104·125号住居跡 第104号住居跡遺物出土狀況
- P L 59 第105号住居跡・貯藏穴内遺物出土狀況
- P L 60 第106·107号住居跡 第108号住居跡遺物出土狀況（炭化材）
- P L 61 第108·110号住居跡 第111号住居跡遺物出土狀況
- P L 62 第111号住居跡 第111·112号住居跡遺物出土狀況
- P L 63 第112·113号住居跡 第113号住居跡遺物出土狀況
- P L 64 第114号住居跡・遺物出土狀況
- P L 65 第115号住居跡 第116号住居跡遺物出土狀況
- P L 66 第116·117号住居跡 第116号住居跡遺物出土狀況
- P L 67 第118号住居跡 第118·119号住居跡遺物出土狀況
- P L 68 第119·120号住居跡 第120号住居跡遺物出土狀況
- P L 69 第121号住居跡 第122号住居跡遺物出土狀況
- P L 70 第122号住居跡・遺物出土狀況
- P L 71 第123号住居跡遺物出土狀況
- P L 72 第123号住居跡 第123·124号住居跡遺物出土狀況
- P L 73 第124号住居跡・遺物出土狀況

- P L 74 第1号古墳
- P L 75 第1号古墳・遺物出土状況
- P L 76 第2号古墳
- P L 77 第2号古墳
- P L 78 第3号古墳
- P L 79 第3号古墳・遺物出土状況
- P L 80 第3号遺物出土状況
- P L 81 第4号古墳 第3・5号古墳遺物出土状況
- P L 82 第6・7・8号古墳
- P L 83 第8・9・10号古墳
- P L 84 第12・13号古墳 第12号古墳遺物出土状況
- P L 85 第11号古墳 第12号古墳遺物出土状況
- P L 86 第14・15・16・17号古墳
- P L 87 第17号古墳
- P L 88 第17号古墳・遺物出土状況
- P L 89 第18・19号古墳 第17号古墳遺物出土状況
- P L 90 第20・21・22号古墳
- P L 91 第23・24・25号古墳
- P L 92 第25号古墳埋葬施設
- P L 93 第26・27号古墳・第1埋葬施設
- P L 94 第27号古墳・第2埋葬施設
- P L 95 第28号古墳 第29号古墳・埋葬施設
- P L 96 第29号古墳埋葬施設
- P L 97 第30・31・32号古墳
- P L 98 第33号古墳遺物出土状況
- P L 99 第33号古墳・遺物出土状況
- P L 100 第35・36号古墳 第33号古墳遺物出土状況
- P L 101 第2・3・4・5・9・11・12・14号土坑
- P L 102 第16・17・24・32・26・28・29・38・33号土坑 第25号土坑・遺物出土状況
- P L 103 第34・35・36・39・40・41・42・44・45・46・47・48・49号土坑
- P L 104 第56・60・65・69・70・71・73・74号土坑
- P L 105 第75・76・77・79・80・81・82・83・85・89・86号土坑
- P L 106 第87・88・89・91・92・93・94・95号土坑
- P L 107 第96・97・98・100・102・103・135・104・105・107号土坑
- P L 108 第111・112・113・117・118・119・120・121・122・123号土坑
- P L 109 第125・126・127・128・129・130・131・133・136号土坑
- P L 110 第138・139・140・141・142・143・144・145・146・147号土坑
- P L 111 第148・149・150・153・154・155・156・157・158号土坑
- P L 112 第161・162・163・164・165・166・169・171号土坑
- P L 113 第173・175・176・177・178・179・180・185号土坑
- P L 114 第6・13・21・72・84・109号土坑
- P L 115 第110・114・115・124・137・151・167号土坑
- P L 116 第167・168・170・174・182・183号土坑
- P L 117 第11・14・17号溝

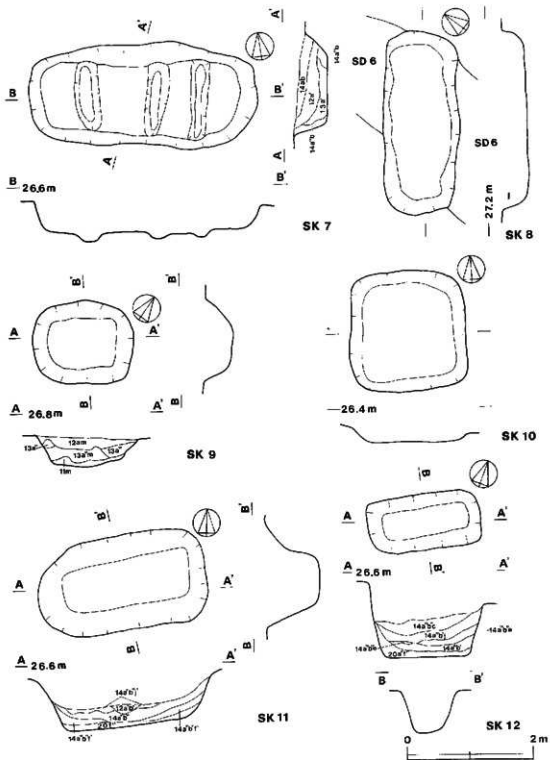
- P L 118 第19·20·22·25·26号溝
- P L 119 第29·34·36号溝
- P L 120 墓全景
- P L 121 第1号塚
- P L 122 第2号塚・土橋・木橋跡
- P L 123 第2号塚・窟穴・段差
- P L 124 第2号塚
- P L 125 第3号塚
- P L 126 第4・5号塚
- P L 127 第3・4・5・6号塚
- P L 128 第7号塚 長峰城跡周辺
- P L 129 第1号塚
- P L 130 第2号塚 第1号掘立柱建物跡
- P L 131 出土土器 (1)
- P L 132 出土土器 (2)
- P L 133 出土土器 (3)
- P L 134 出土土器 (4)
- P L 135 出土土器 (5)
- P L 136 出土土器 (6)
- P L 137 出土土器 (7)
- P L 138 出土土器 (8)
- P L 139 出土土器 (9)
- P L 140 出土土器 00
- P L 141 出土土器 01
- P L 142 出土土器 02
- P L 143 出土土器 03
- P L 144 出土土器 04
- P L 145 出土土器 05
- P L 146 出土土器 06
- P L 147 出土土器 07
- P L 148 出土土器 08
- P L 149 出土土器 09
- P L 150 出土土器 00
- P L 151 出土土器 01
- P L 152 出土土器 02
- P L 153 円筒埴輪 (1)
- P L 154 円筒埴輪 (2)
- P L 155 円筒埴輪 (3)
- P L 156 円筒埴輪 (4)
- P L 157 円筒埴輪 (5)
- P L 158 円筒埴輪 (6)
- P L 159 円筒埴輪 (7)
- P L 160 形象埴輪 (1)
- P L 161 形象埴輪 (2)
- P L 162 形象埴輪 (3)
- P L 163 土製品 (1)
- P L 164 土製品 (2)
- P L 165 土製品 (3)
- P L 166 石器・石製品 (1)
- P L 167 石製品 (2)
- P L 168 石製品 (3)
- P L 169 石製品 (4)
- P L 170 金属製品 (1)
- P L 171 金属製品 (2)
- P L 172 金属製品 (3)

第5節 土坑と出土遺物

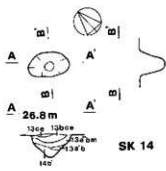
本節では、調査した土坑185基のうち、整理の段階で遺構と判断し難い4基と古墳の埋葬施設3基については除外し、178基のうち143基の土坑については土坑一覧表にまとめ、粘土貼り土坑21基、底面に堅溝のある土坑12基、地下式坑2基については別項として一覧表に整理した。なお、地下式坑については文章でも解説した。



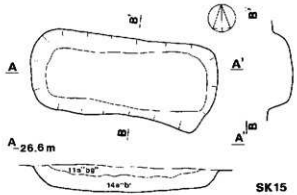
第356図 土坑実測図-1



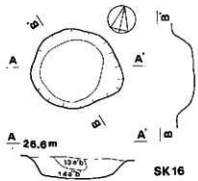
第357图 土坑实测图—2



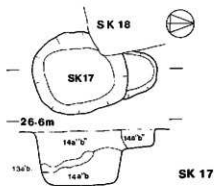
SK 14



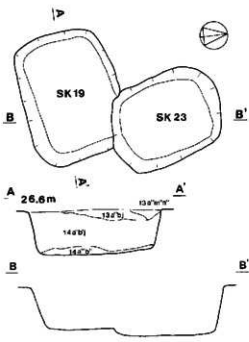
SK 15



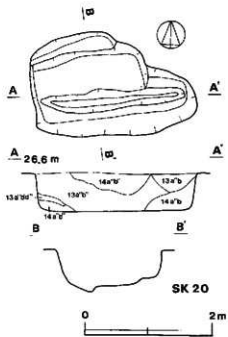
SK 16



SK 17



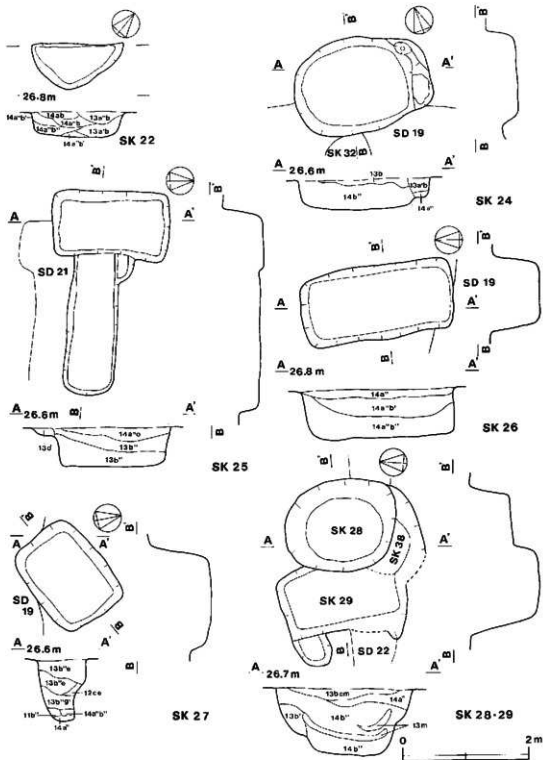
SK 19·23



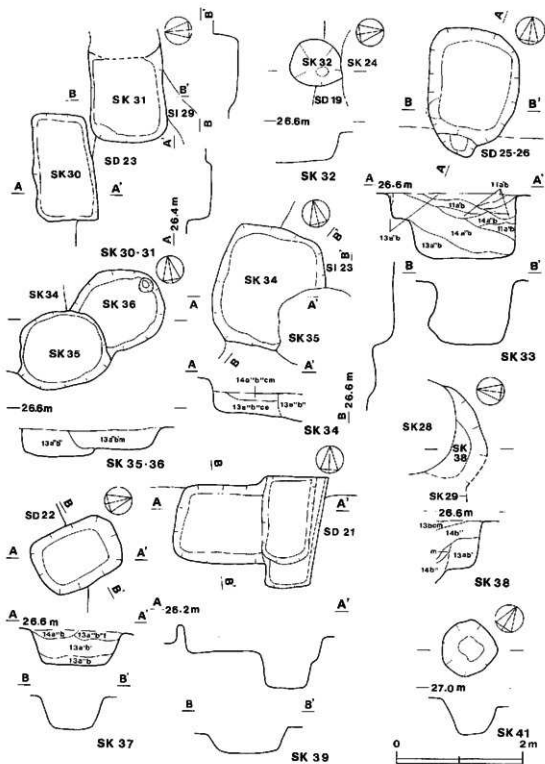
SK 20



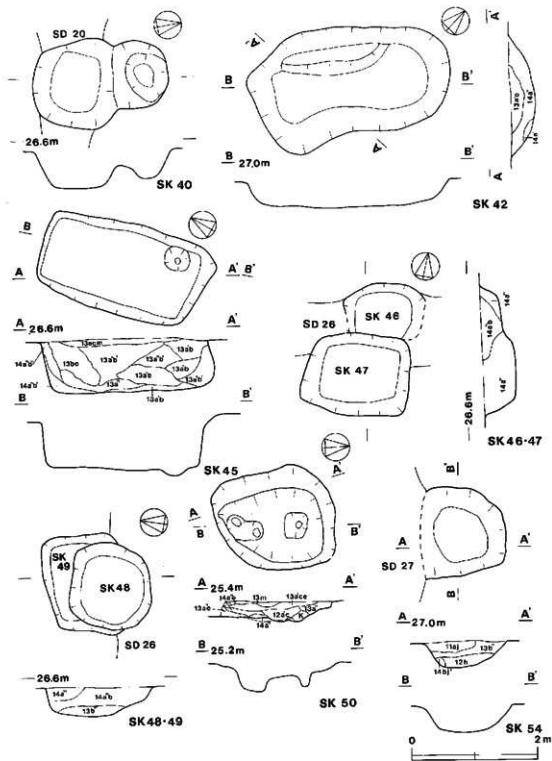
第358图 土坑实测图-3



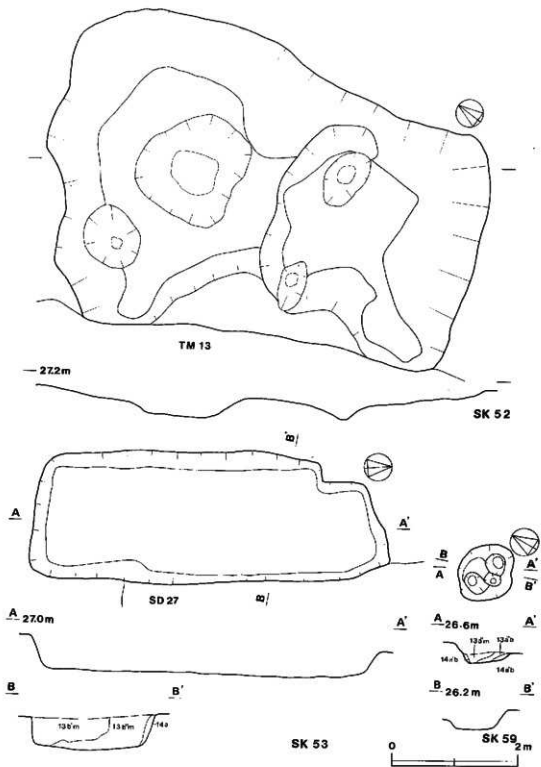
第359图 土坑夹测图-4



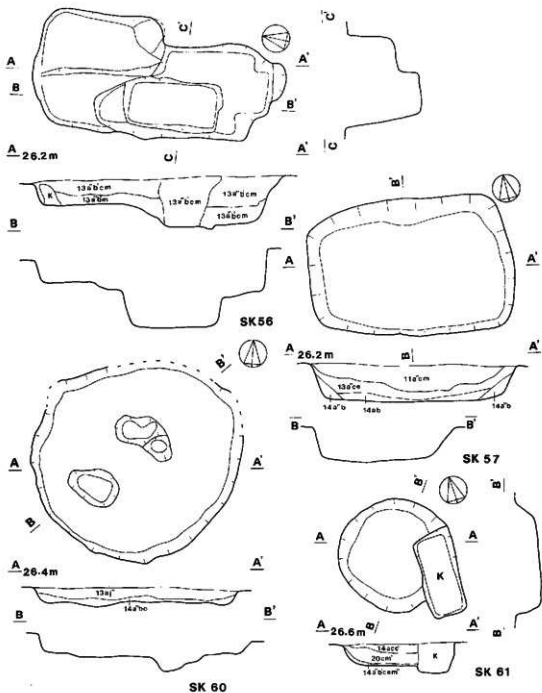
第360图 土坑实测图-5



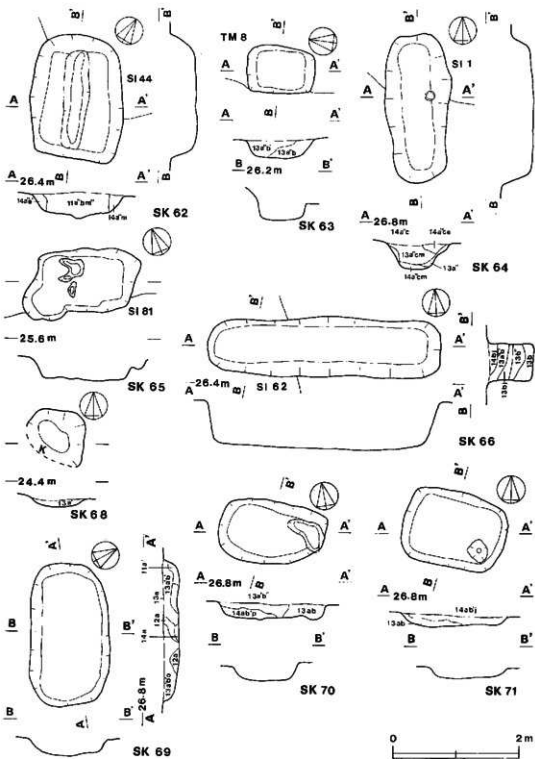
第381图 土坑实测图-6



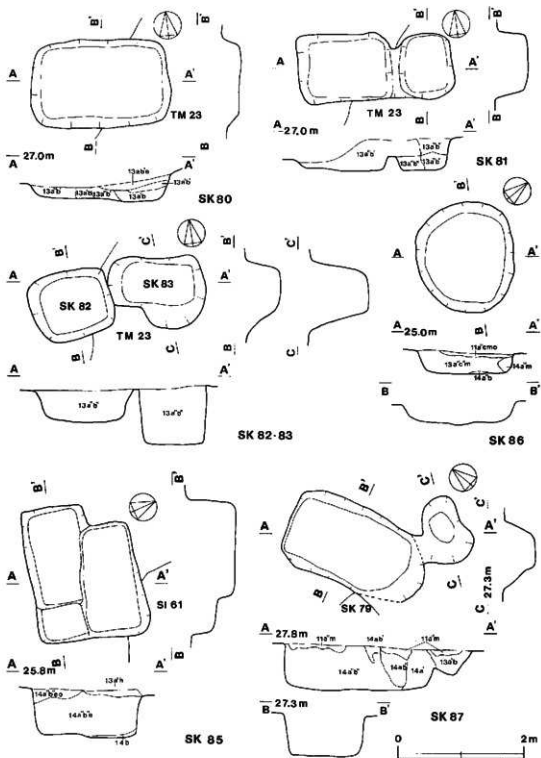
第362图 土坑实测图-7



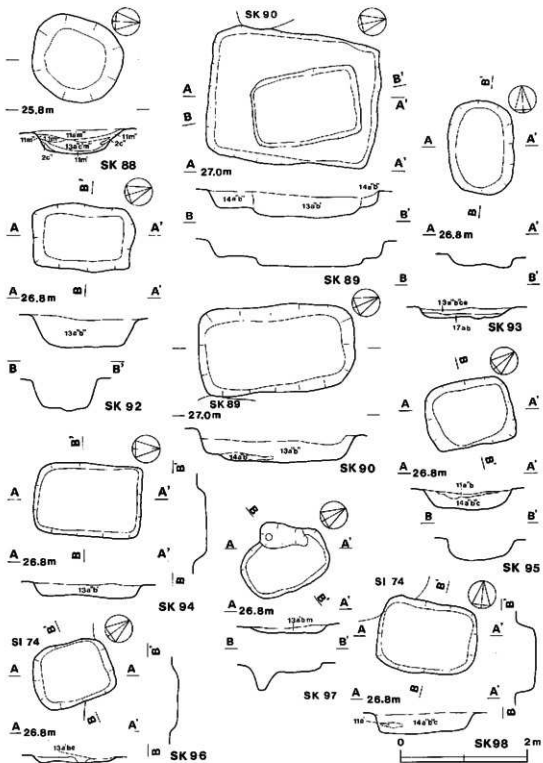
第363图 土坑实测图—B



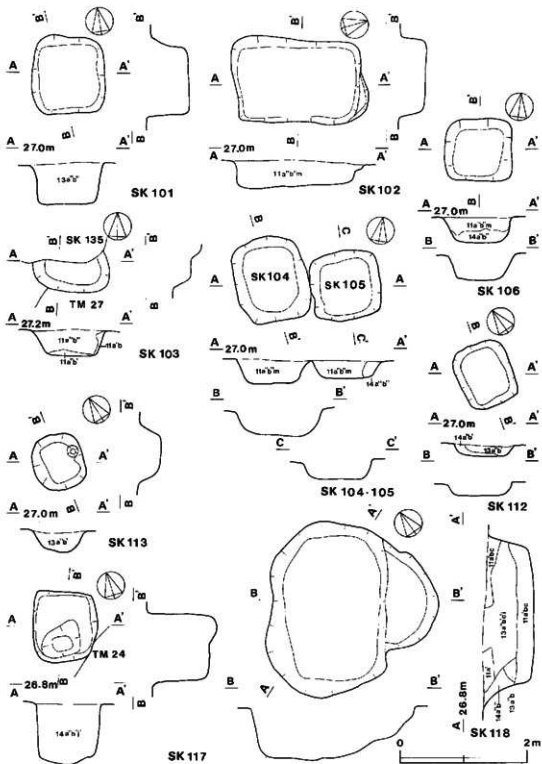
第364图 土坑实测图—9



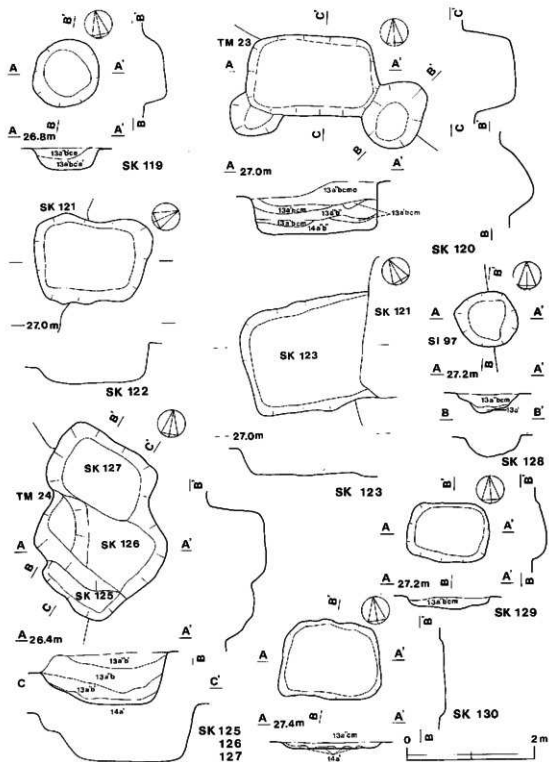
第366图 土坑实测图-11



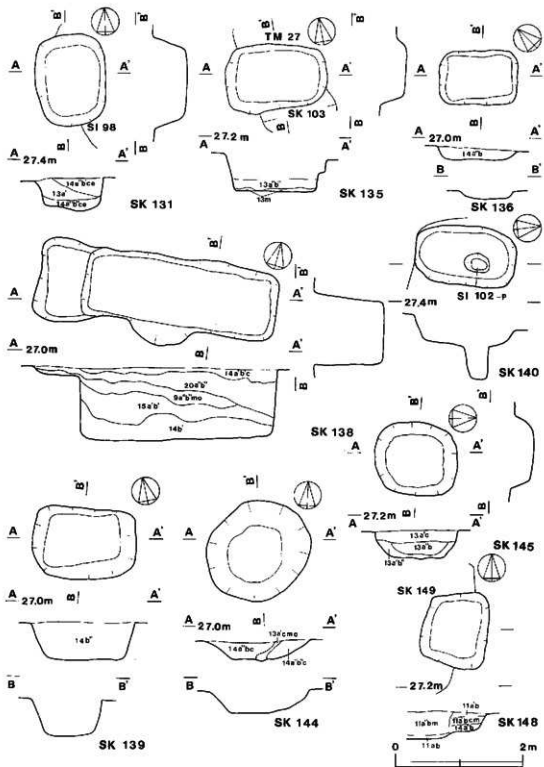
第367图 土坑实测图-12



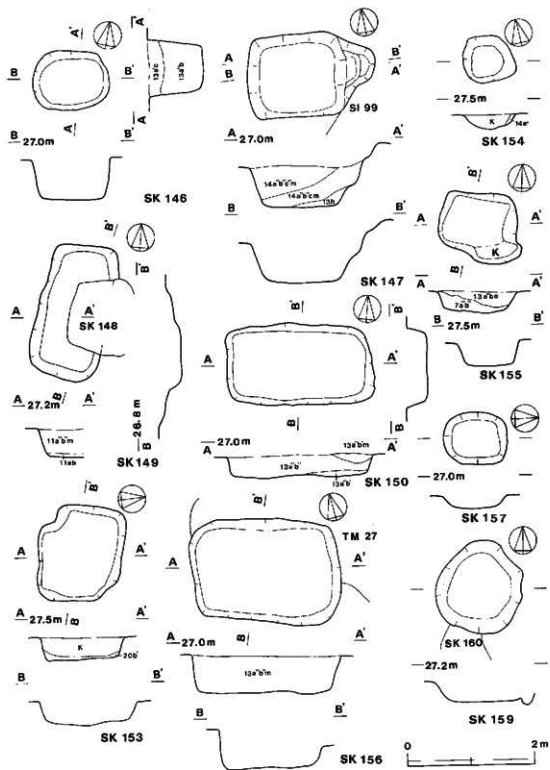
第368图 土坑实测图—13



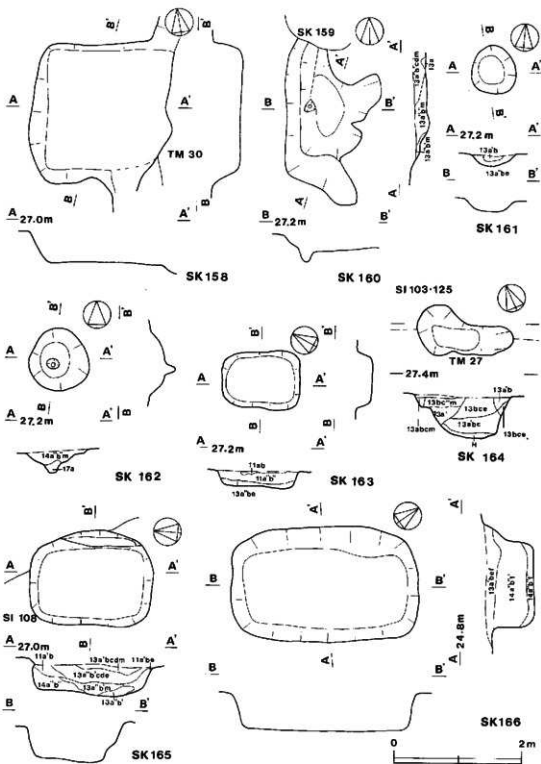
第368图 土坑测图-14



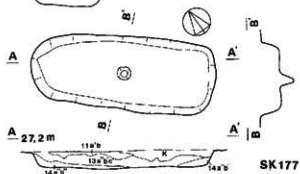
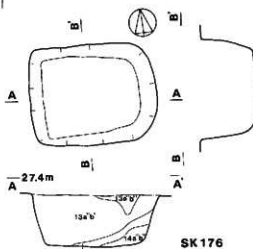
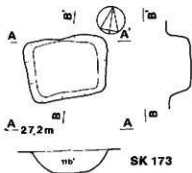
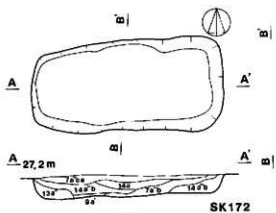
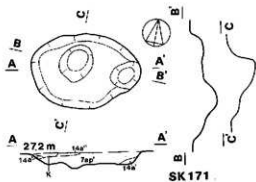
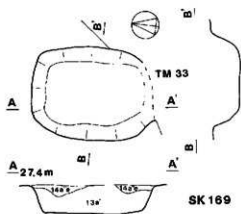
第370图 土坑实测图-15



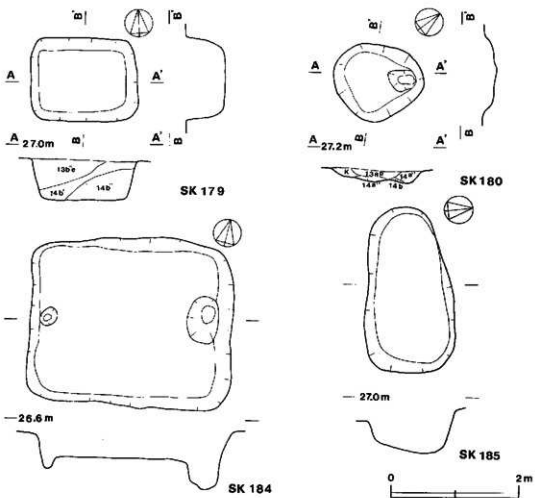
第371图 土坑实测图—16



第372图 土坑实测图-17



第373图 土坑实测图—18



第374図 土坑実測図-19

表9 土坑一覽表

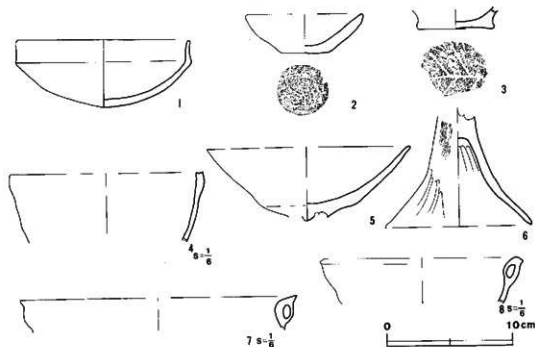
土坑番号	位置	長軸(短軸)方向	平面形	規模		空間	底層	出土遺物	備考	図録番号
				長軸(m)×短軸(m)	深さ(cm)					
1	A7a	N-0°	不整形円形	0.96×0.80	25~30	II	3		TM4と蓋板	第356図
2	A3e	N-47° R	不整形円形	1.55×1.10	2a	III	1		TM4・S13と蓋板	〃
3	A3c	N-64°-W	不整形円形	0.87×0.72	30	III	3		TM4と蓋板	〃
4	B4b	N-37°-W	長方形	3.52×1.93	4a	III	3			〃
5	B4i	N-76°-W	長方形	3.56×1.54	5a	II	1			〃
7	C6g	N-88°-W	隅丸長方形	3.70×1.58	45~35	II	6	1層2	底層に3条の掘り込み	第357図
8	B4h	N-55° E	長方形	2.93×1.13	40	I	1		SD6と蓋板	〃

上杭 番号	位置	方位(面)方角	平面形状	規模		並開	高可	出土遺物	備考	図取番号
				式幅(30×30cm) 式幅(30×30cm) 式幅(30×30cm)	深さ(m)					
9	A3c	N-52°-E	兩人長方形	1.60×1.27	43~47	II	3		TM5と重復 跡から炭化材、骨等取	第357図
10	D6b	N-80°-E	方形	1.94×1.82	17	II	1	竈跡5	TM1と重復 跡から炭化物	#
11	D7b	N-75°-E	長方形	2.70×1.50	68	II	1		TM16と重復	#
12	D9c	N-80°-E	長方形	1.82×0.90	69	II	1		TM16と重復	#
14	F3c	N-52°-W	不整形長方形	0.85×0.40	40	I	1			第358図
15	F7a	N-81°-W	長方形	2.97×1.33	35	II	1			#
16	E7a	N-89°-E	不整形円形	1.47×1.23	30	II	1	土師1、竈跡2		#
17	F7e	N-2°-E	長方形	1.95×1.00	85	I	1		SK18と重復	#
19	F7f	N-77°-E	長方形	2.06×1.50	68	I	1		SK23と重復	#
20	F7b	N-2°-W	不整形円形	2.58×1.65	55~63	I	6		竈跡に近い溝	#
22	F7j	N-53°-E	長方形(想定)	1.45×0.70	49	I	1		TM17と重復	第359図
23	F7f	N-26°-W	長方形	1.90×1.37	79	I	1		SK19と重復	第358図
24	F8d	N-80°-E	兩人長方形	2.17×1.55	25~50	I	3		SD19と重復	第359図
25	F6k	N-85°-W	長方形	3.30×1.87	45~60	I	6		S102と重復	#
26	F7c	N-2°-W	長方形	2.42×1.22	75	I	1		SD19と重復	#
27	F7c	N-61°-E	長方形	1.53×1.34	65~100	I	6		SD19と重復	#
28	F7d	N-17°-W	楕円形	1.78×1.46	110	I	1	土師3、石1	SD22と重復 下層中に灰	#
29	F7d	N-18°-E	長方形	1.90×0.98	40~65	I	6		SD22と重復	#
30	F7h	N-89°-E	長方形	1.70×0.97		I	3		S129・SF23と重復	第360図
31	F7h	N-89°-E	方形	1.35×1.18		I	1		SF29・SD23と重復	#
32	F7f	N-32°-E	不整形円形	0.85×0.70		II	2	銅線5	SD19と重復	#
33	F7d	N-14°-E	長方形	2.03×1.30	100	I	1	土師1、埴輪1	石×灰石	#
34	F8d	N-25°-E	長方形	1.95×1.73	35	I	1		S123・SK35と重復	#
35	F8c	N-6°	楕円形	1.39×1.21	53	I	1		S123・SK34・36と重復	#
36	F8d	N-79°-W	方形	1.33×1.20		I	1		S123・SK35と重復	#
37	F8c	N-26°-W	長方形	1.36×1.00	53	I	1	石1	SD22と重復	#
38	F7d	N-3°-W	兩人長方形	1.50×0.64	75	I	1		SD22・SK28・29と重復	#
39	F8a	N-88°-W	長方形	2.30×1.77	35~85	I	6		SD21と重復	#
40	F7b	N-7°-E	長方形	2.15×1.35	60	I	1		SF20と重復	第361図
42	C4b	N-4°-W	長方形	3.40×2.90	50	I	1	土師6		第360図

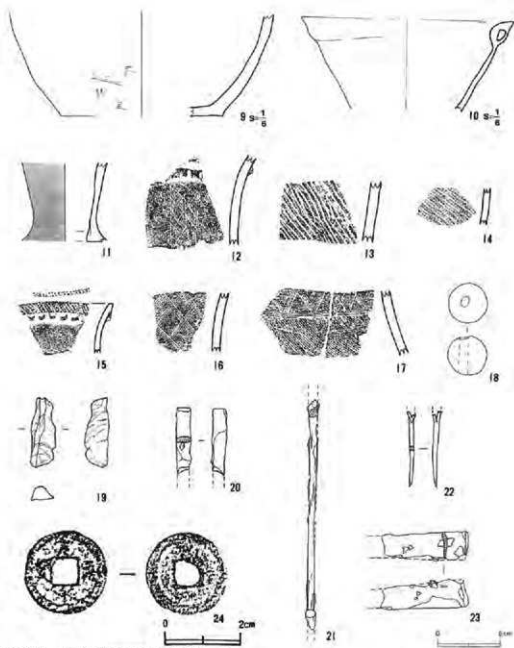
土坑番号	位置	長短(型)方向	平面形状	規模		壁面	底面	出土遺物	備考	区画番号
				長短(型)方向	深さ(m)					
42	C4 _h	N-42'-W	楕円形	3.17×1.63	40	III	2	土器2		第361区
45	F7 _e	N-34'-W	長方形	2.77×1.53	80	I	1	土庫16, 地輪1, 陶器1	壁は、ややオーバーハング	#
46	F7 _d	N-79'-E	長方形	1.22×0.85		I	1		SK47・SK26と土庫	#
47	F7 _d	N-82'-E	長方形	1.65×1.33		I	1		SK46・SK26と土庫	#
48	F7 _e	-	円形	1.36×1.30		I	1	陶器1, 古銭1	SD25・SK49と土庫	#
49	F7 _d	N 65' E	長方形	1.61×0.45		I	1		SD26・SK48と土庫	#
50	C11 _e	N-2'-E	楕円形	1.87×1.59	16~37	I	3.5	弥生3, 土師3, 陶器18	TM3と土庫	#
52	C6 _h	N 14' W	楕円形	7.96×4.38	23~55	III	3	土師2, 地輪2	TM13と土庫	第362区
53	C6 _b	N-7'-E	長方形	5.39×2.13	50	I	1	土1	SD27と土庫	#
54	C6 _h	-	円形	1.40×1.37	33	I・II	2	弥生1, 土師1, 地輪1	SD27と土庫	第361区
56	B5 _b	N-13'-W	長方形	3.97×1.92	13.7	I	6			第363区
57	B5 _e	N-84'-W	長方形	3.27×2.18	55	I	1	土師12		#
59	B5 _h	-	不定形	0.87×0.87	25	III	3	土師1	SI34と土庫	第362区
60	A2 _j	-	円形	3.37×3.06	33~50	I	3	弥生7, 土師4, 灰片1	灰土, 小ビット多, 灰土時代か	第363区
61	A3 _b	-	円形	1.94×1.80	38	I	1	弥生6	炭化物有 現代の穴か	#
62	A3 _c	N-20'-W	長方形	2.09×1.45	40	II	1		SI43と土庫。現代の穴か。壁中に細い溝。壁面に炭化材	第364区
63	A4 _l	N-3'-W	長方形	1.05×0.76	30	I	1		TM8と土庫 現代の穴か	#
64	A2 _d	N-2'-W	長方形	2.37×1.00	49	I	1	弥生4, 土師2, 土師1, 土師2の碎片1	SI1と土庫 古墳時代後期の基壇か	#
65	H11 _e	N-70'-W	長方形	1.66×1.02	37	V	3		SI81と土庫。現代の穴か	#
66	C10 _b	N 85' W	長方形	3.76×0.95	75	I	1		SI62と土庫	#
68	B12 _e	-	円形	0.97×0.82	15	III	2		SI47と土庫。現代の穴か	#
69	C11 _e	N 76' W	楕円長方形	2.27×1.22	28	I	1	土師5	TM25と土庫	#
70	C11 _e	N-82'-W	楕円長方形	1.65×1.00	26	I	3	弥生1, 土師2	TM25と土庫	#
71	C11 _e	N-87'-E	楕円長方形	1.67×1.25	15	II	3		TM25と土庫	#
73B	D11 _a	N-15'-E	楕円長方形	1.17×1.10	85	II	6		SI93と土庫	第365区
74	C11 _e	N-64'-W	楕円長方形	2.43×1.50	66	I	1	弥生1, 土師20, 石1	TM25と土庫	#
75	C11 _e	N 10' E	楕円長方形	1.95×1.30	30	I	3		TM25と土庫	#
76	C10 _e	N-8'-E	長方形	1.97×1.43	73	I	1	弥生7, 土師4, 灰片2	TM23・SK77と土庫	#
77	C10 _e	N-85'-W	長方形	1.10×0.73	83	I	1		TM23・SK76と土庫	#
78	C10 _e	N-8'-E	楕円長方形	2.63×2.38	88	I	1	弥生1, 土師21, 石5	TM23と土庫 中川の基壇か	#

I 坑番号	位置	発掘(作)方向	平面形	規模		壁面	底面	出土遺物	備考	図説番号
				長さ(m) ×幅(m)	厚さ(cm)					
122	C10b	N 19° E	隅丸長方形	1.80×1.25	65	I	1		SK121と重復	第369図
123	C10b	N-58°-W	方形	1.95×1.75	42	I	1	弥生1, 土器1, 須石1, 石1	SK121と重復	#
125	C11c	N 61° W	隅丸長方形	1.28×0.34	45	I	1		TM24, SK125と重復	#
126	C11c	N-63°-W	隅丸長方形	2.60×1.10	56~75	I	3	弥生3, 土師11	TM24, SK125・127と重復	#
127	C12c	N-71°-W	楕円形	1.65×1.10	82	I	1		TM24, SK126と重復	#
128	C16j	N-88°-W	隅丸方形	1.00×0.90	32	I	3	土師3, 土玉1	SI97と重復	#
129	C16j	N-82°-W	長方形	1.30×0.95	20	I	3		SI97と重復	#
130	D10a	N-80° W	長方形	1.58×1.27	6	I	3			#
131	D10b	N-3°-E	隅丸長方形	1.47×1.10	120	II	1	弥生1, 土師3, 須石1	SI98と重復	第370図
135	D12c	N 11° E	長方形	1.62×1.00	40	I	1		TM27, SK103と重復	#
136	D11c	N-42°-W	長方形	1.25×0.85	8	I	1			#
138	D11c	N-82°-E	長方形	3.80×1.45	110	I	1			#
139	D11d	N-10° E	長方形	1.65×1.15	73	I	1			#
140	D10d	N-4°-E	隅丸長方形	1.57×1.00	23	I	1		SI102, TM27と重復	#
144	D9c	N 6°-W	隅丸長方形	1.72×1.47	76	II	1			#
145	D10d	N-2°-W	隅丸方形	1.30×1.18	23	I	1			#
146	D10f	N-84°-E	隅丸長方形	1.20×0.95	65	I	1			第371図
147	D10a	N-88° W	長方形	2.03×1.33	73	I	1	土師3	SI99, TM23と重復 壁近くには多量	#
148	D11d	N-19°-E	長方形	2.70×0.50	32	I	1	岩罅層1, 鉄1	TM27, SK149と重復 ノミ穴か	第370図
149	D11d	N 17°-E	長方形	1.30×1.00	15	II	1		TM27, SK146と重復	第371図
150	D12b	N-86°-E	長方形	2.32×1.25	30	I	1	土師43, 陶器1, 石1		#
153	D10g	N-79°-W	不整形方形	1.55×1.35	40	I	1	弥生2, 土師13, 石1		#
154	D10g	-	円形	0.90×0.75	5	I	1			#
155	D10g	N-89°-E	方形	1.23×1.10	40	I	1	土師7		#
156	D11b	N 80° W	隅丸長方形	2.35×1.65	60	I	1	弥生2, 土師9, 石2	TM27と重復	#
157	D11c	N-1°-E	隅丸長方形	1.00×0.80	22	II	3		SI104と重復	#
158	D11i	N 65°-W	方形	2.25×2.20	43	I	1	弥生2, 土師23, 須石1, 石2	TM30と重復	第372図
159	C10i	N-26°-E	方形	1.45×1.30	35	I	1		TM26, SK160と重復	第371図
160	D10a	N-9°-E	不整形方形	1.33×1.07	20	II, III	3		TM26, SK159と重復	第372図
161	D10d	-	円形	0.37×0.70	20	II	2			#

土坑 番号	位置	長短(即方向)	平面形	縦 横		壁面	底面	出土遺物	備 考	図録番号
				長(前) 短(後)	深さ(cm)					
162	D9c		不整形円形	1.00×0.95	22	Ⅱ	4			第372図
163	D11a	N-26°-W	隅丸長方形	1.23×0.90	25	Ⅰ	3	赤土1,土師6, 4:1	SI116と重複	#
164	D10c	N-69°-W	不整形長方形	1.50×0.50	68	Ⅰ	1	土師6	SI103・105・TM27と重複 現代の穴か	#
165	D11g	N-6°-W	隅丸長方形	1.86×1.50	53	Ⅰ	1	土師5	SI108と重複	#
166	E12f	N-28°-E	隅丸長方形	2.88×1.80	60	Ⅰ	1	土師5		#
169	E10g	N-6°-W	隅丸長方形	1.90×1.30	40	Ⅰ	1	土師1, 須恵1, 磯島1	TM33と重複	第373図
171	E11b	N-78°-E	不整形円形	1.74×1.20	17~38	Ⅲ	3	土師24, 鉄3	TM35と重複 ピット2本	#
172	F10a	N-86°-E	隅丸長方形	3.05×1.45	30	Ⅰ	1	赤土1, 土師7		#
173	E10d	N-72°-E	長 方 形	1.27×0.95	36	Ⅰ	1	赤土1, 土師5, 磯島2, 石2		#
175	D10j	N-87°-W	長 方 形	1.40×0.83	40	Ⅰ	1	土師6	SI119と重複	#
176	E11b	N-6°-E	不整形長方形	2.05×1.60	85	Ⅰ	1	土師12, 鉄1	TM32と重複	#
177	D11e	N-37°-W	隅丸長方形	2.90×1.15	30	Ⅰ	1		ピット1本	#
179	E12b	N-89°-E	長 方 形	1.70×1.35	62	Ⅰ	1			第374図
180	D11h	N-31°-E	不整形円形	1.40×1.23	20	Ⅱ	4		SI116と重複 ピット1本	#
184	F10c	N-78°-E	長 方 形	3.20×2.69	47	Ⅰ	1		ピット2本	#
185	F10b	N-82°-E	楕 円 形	2.65×1.35	60	Ⅰ	5			#



第375図 土坑出土遺物実測・拓影図一 1

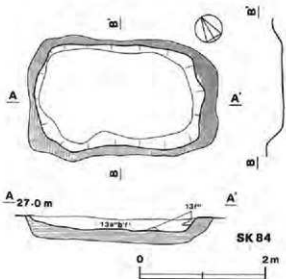
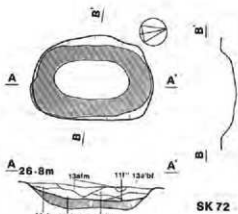
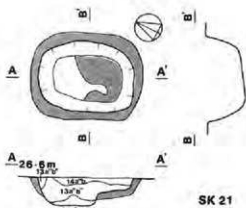
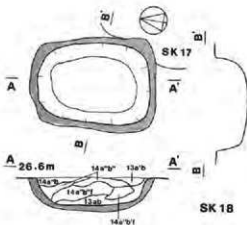
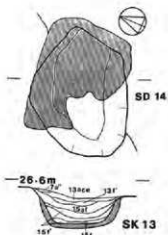
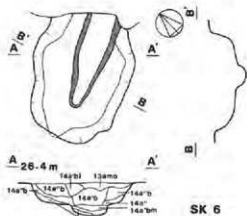


第376図 土坑出土遺物実測・拓影図-2

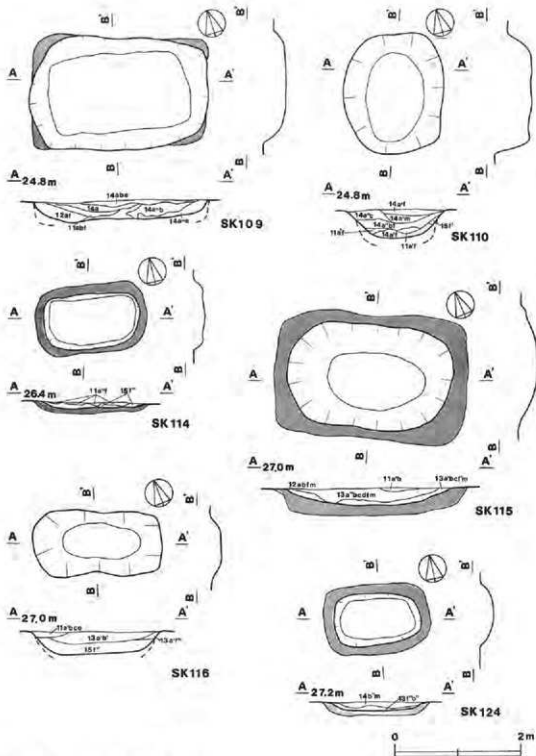
第376図の12~17は弥生式土器片の拓影図である。12は頸部片で、縦区画の沈線を垂下させ、その間を格子状に沈線を施している。13・14は胴部片で、付加条の縄文が施されている。15は口唇部に縄文を施した土縁部片で、付加条の縄文を施し、下端に竹管条工具による押圧が施されている。16・17は柵描き直線文を施した胴部片である。16は格子状に、17は鋸歯状に施した下に横走させて区画し、以下付加条の縄文を施している。

土坑出土土器観察表

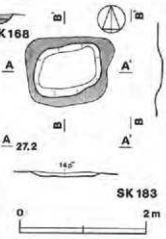
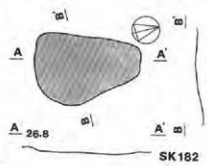
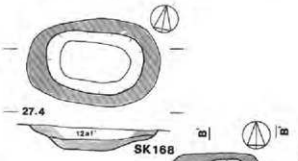
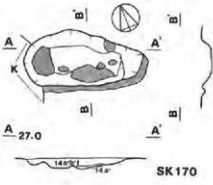
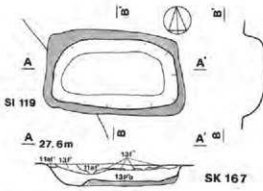
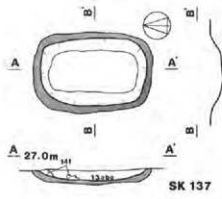
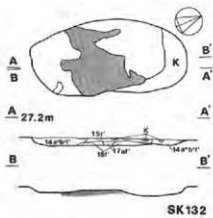
調査番号	器 種	法量(cm)	器形の特徴及び文様	工 法 の 特 徴	土土・色調・焼成	備 考
第375回 1	杯形土器 土 器 蓋	A 13.9 H 5.4	底部は平底で、体部は蓋厚を減じながら斜上方へ内彎して立ち上がっている。口縁部は体部から外気味にほぼ垂直に立つ。体部と口縁部の間に明瞭な境をもつ。	内面、口縁部内・外面ナズ整形。底部・体部外面ナズ整形。	砂粒 にぶい赤褐色 普通	100% P87 SK64
	皿 土器蓋土器	A 9.5 B 3.1 C 4.2	底部は平底で、体部は蓋厚を減じながらやや内彎して斜上方へ立ち上がる。内・外面にワクロ模が施される。	水後り後、波ナズ整形。底部に赤朱塗り痕と数目瓦痕有。	砂粒 灰白色 普通	40% P90 SK70
3	壺 赤土式土器	B (1.3) C 7.0	底部は平底であるが、中央部がやや凹み、凹み木葉痕がある。胴部は胴部から直線的に斜め上方に立ち上がっている。外面は付加糸の縄文が施されている。	内面にナズ整形	砂粒・石灰 にぶい藍色 普通	3% P68 SK74
	内耳土器	A 10.6 B (19.9)	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴上半部から内彎して口縁部まで立ち上がっている。口唇部は平底。	内・外面・口唇部ともナズ整形。	砂粒 黒褐色 普通	5% P101 SK79 外面に鉛筆付着
5	高形土器 土 器 蓋	A 18.2 B (5.9)	外部は内彎して斜上方へ大きく開き、蓋厚を減じながら口縁部に至る。底部下に境を有す。	内・外面ナズ整形後、内面と口縁部外面をナズ整形。	砂粒・石灰 褐色 普通	50% P70 SK86
6	高形土器 土 器 蓋	H (8.8) C 11.8	胴部であり、接合部からやや開き、中位からさらに内彎的に大きく開く。	内面口位は直ナズ、底部端外周ナズ、外面縦方向の美ナズ整形。	砂粒 にぶい黄褐色 普通	50% P71 SK86
7	内耳土器	A 44.0 B (5.3)	口縁部はやや外側へよくらんでいる。口唇部は平底。耳は1か所残存。	内・外面・口唇部ともナズ整形。	砂粒・スロリア にぶい褐色 普通	1% P104 SK118 外面に鉛筆付着
8	内耳土器	A 32.5 B (7.4)	胴上半部から口縁部にかけての破片である。胴上半部から内彎して口縁部まで立ち上がっている。口唇部は平底。	内・外面・口唇部ともナズ整形。	砂粒 黒色 普通	3% P105 SK118 外面に鉛筆付着
第376回 9	内耳土器	B (8.2) C 13.0	底部と胴下半部の破片である。底部は平底で、胴部は底部から内彎して立ち上がっている。	底部ナズ整形。内・外ナズ整形。	砂粒・石灰 明褐色 普通	3% P103 SK118 外面に鉛筆付着
	内耳土器	A 33.8 B (14.5)	胴下半部から口縁部にかけての破片である。胴部はやや内彎気味に口縁部まで立ち上がっている。口唇部は平底。	内・外面・口唇部ともナズ整形。	砂粒 黒色 普通	20% P106 SK118 外面に鉛筆付着
11	長頸壺 須 恵 器	B (5.2)	胴部は胴部との接合部から外側して直線的に立ち上がっている。胴部と胴部との境界面に明瞭な接合痕を残す。	内・外面とも直ナズ整形で、外面には縁輪を施す。	砂粒 オリーブ黄色 普通	3% P87 SK118



第377图 粘土貼り土坑実測図一



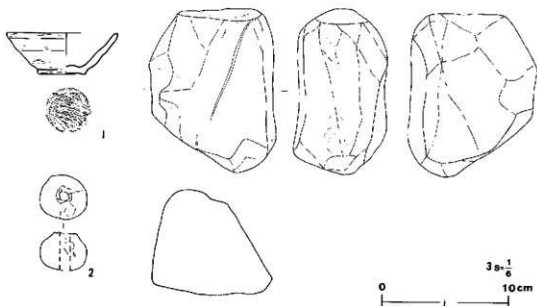
第378図 粘土貼り土坑実測図-2



第378图 粘土貼り土坑実測図-3

表10 粘土貼り土坑一覧表

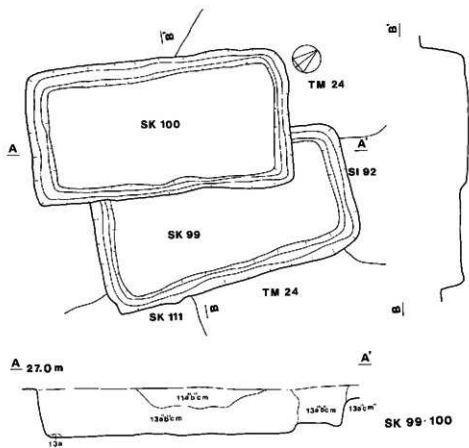
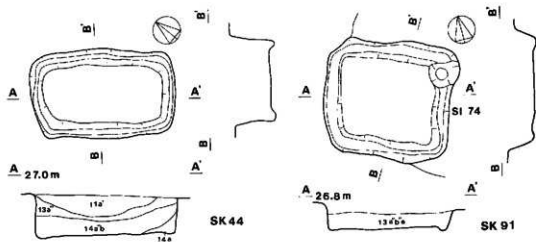
土坑 番号	方位	異部(E)方向	平面形	型 式		壁面	底面	出土遺物	備 考	図版番号
				長さ(m)×幅(m)	深さ(m)					
6	C7b	N-68°-E	平置長方形	2.70×1.45	63	V	1	土器5、銅輪1	底面に八の字状粘土	第377図
13	F8f	N-35°-E	不定形 (楕円形又は方形)	2.13×1.45	50	II	1		SD14と関連	"
18	F7f	N 9°-W	楕円形	2.60×1.90	50	II	1	土器1、陶器1、 磁石1	SK37と関連	"
21	F8g	N-26°-W	楕円形	1.80×1.35	37	I	3			"
72	C11b	N-13°-E	楕円形	1.95×1.36	23	III	2	銅器1、土器2、 陶器1、磁石1	TM25と関連	"
84	C10e	N-65°-W	長方形	2.96×1.82	40	II	2	土器5、土器1、 石1		"
109	B12b	N-73°-W	深大長方形	2.77×1.80	30	III	1	土器質3		第478図
110	B12c	N 20°-E	楕円形	1.95×1.67	50	I	2	土器10、石1、 内貝1		"
114	B10a	N-73°-W	楕円長方形	1.72×1.10	18	III	2	土器1、陶器1		"
115	C10e	N 66°-W	長方形	3.07×1.59	26	III	2	陶器1、土器1、 内貝3、石1		"
116	C10b	N-71°-W	楕円長方形	2.05×0.95	70	III	2	陶器1、土器12		"
124	C10a	N 78°-W	深大長方形	1.70×1.13	17	II	1		TM25と関連	"
132	D10f	N-19°-E	楕円長方形	2.45×1.16	8	III	1			第379図
137	D10e	N-79°-W	楕円長方形	1.90×1.30	16	III	2	土器4		"
151	D11g	N-4°-E	長方形	2.10×1.40			2		底面だけ残存	"
167	D10a	N-89°-W	長方形	2.15×1.30	33	I	2	土器3	SD19と関連	"
168	E10f	N 82°-E	楕円形	2.12×1.38	40	III	2	磁輪1	TM33と関連	"
170	C10h	N-61°-W	楕円形	1.38×0.95	15	II	1	土器7		"
174	E10g	N-20°-W	方形	2.14×1.07	19	I	1			"
192	E12c	N-9°-E	不定形	1.70×1.06	10	III	1			"
183	E11f	N-89°-W	楕円長方形	1.26×1.10	10	III	4	土器1		"



第380図 粘土貼り土坑出土遺物実測・拓影図

粘土貼り土坑出土土器観察表

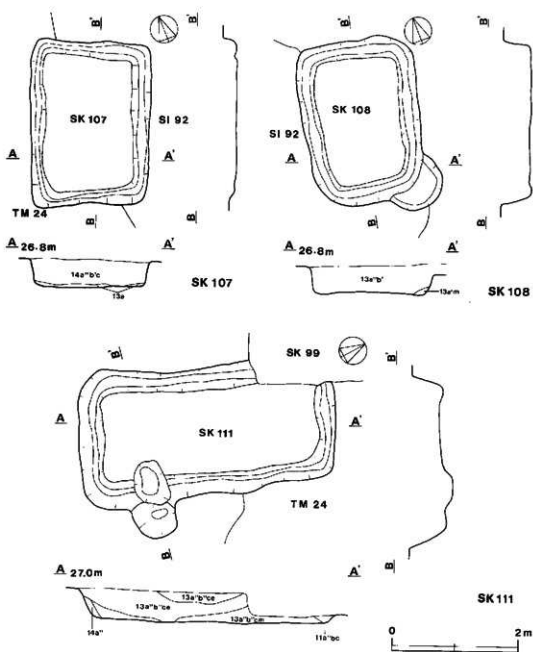
図数番号	番 種	法厚(cm)	器形の特征及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第380図 1	土加質土器	A 8.8	高部は平直で中央部がやや凹む。体部は均厚を減しながら底部からほぼ放射的に斜上方に立ち上って口縁部に至る。	水洗後、横ナア型形。高部は縦糸切り痕と軌目正痕有。内・外正にシクロ痕が見られる。	砂粒	80% P73 SK109
		B 3.3			浅黄褐色	
		C 3.7			普通	



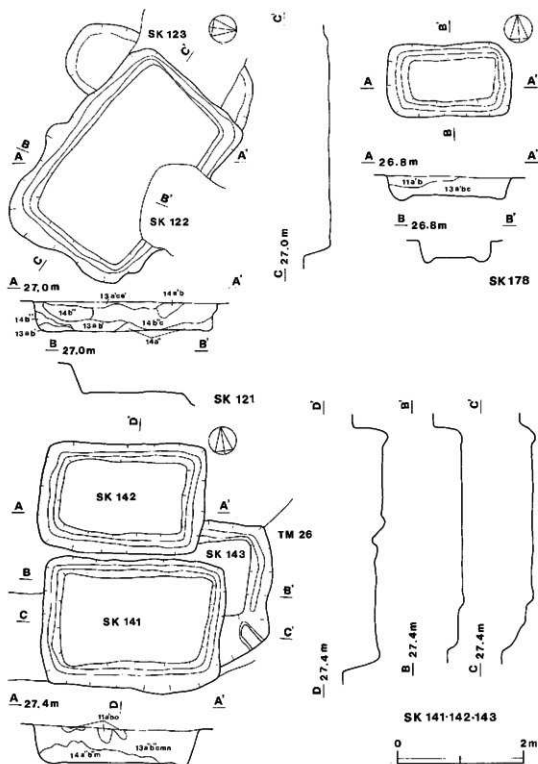
SK 99-100



第381図 壁溝を有する土坑実測図-1



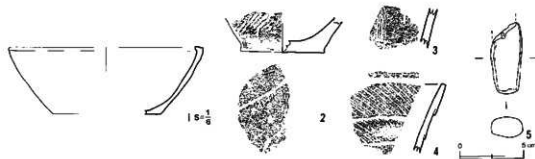
第382図 壁溝を有する土坑実測図-2



第383図 壁溝を有する土坑実測図-3

表11 壁溝を有する土坑一覧表

土坑番号	位置	方位(磁石)方向	平面形	規模		壁面	底面	出土遺物	備考	発掘番号
				長さ(北)×幅(東)	深さ(m)					
44	D4b	N-45°W	長方形	2.26×1.45	62~65	1	3			第381回 1
92	C9a	N-75°W	方形	2.00×1.84	35	1	1	土師7	SK74と重複	〃
99	C10f	N-25°E	長方形	4.13×1.30	40	1	1	弥生2、土師12	SK100・111・TM24と重複	〃
100	C10f	N-38°E	長方形	4.13×2.90	65	1	1	弥生1、弥生2、土師4、内耳1、(F112)	SK99・TM24と重複	〃
107	C10e	N-25°E	長方形	2.55×1.85	17	1	1		TM24・SK92と重複 いずれよりも新しい。	第107回 2
108	C10e	N-15°E	長方形	2.65×1.85	63	1	1	彌生2、弥生1 (F72)、土師6	SK92と重複 本館が新しい。	〃
111	C10e	N-25°E	長方形	4.05×2.06	37	1	1	弥生1、土師30	TM94・SK99と重複 TMより新しいがSKとの新旧関係不明。	〃
121	C10h	N-58°W	長方形	3.45×1.60	65	1	1	弥生2、土師24	SK122・123と重複 本館が一考有り。	第383回 3
141	D10b	N-77°W	長方形	2.80×2.13	45	1	1	弥生17、土師131、内耳1、陶器1、破砕1	TM26・SK143と重複 TMより新しいがSKとの新旧関係不明。	〃
142	D10a	N-80°W	長方形	2.65×1.83	50	1	1	土師18、内耳2	TM26・SK141・142と重複 TMより新しいがSKとの新旧関係不明。	〃
143	D10b	N-12°E	不整形方形	2.38×0.70	40	1	1		TM26・SK141・142と重複 TMより新しいがSKとの新旧関係不明。	〃
178	F12b	N-85°W	長方形	2.00×1.13	27	1	1	土師8、土師品1		〃



第384回 壁溝を有する土坑出土遺物実測・拓影図

壁溝を有する土坑出土土器観察表

発掘番号	器種	法華(cm)	器形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色割・焼成	備考
第384回 1	内耳土器	A (31.0)	底面から11輪部にかけての破片である。底面は平底で、切部に底縁から内縁して立ち上がっている。口縁部は平に。	外・内側・口唇部ともナブ塗形。	砂粒・石灰 棕色 赤褐色	5% 1702 SK100 外側に黒付着
		B (15.0)				
		C (17.2)				
2	盆 弥生式土器	B (2.6)	底面が不平等で、不鮮明な本葉脈がある。胴部は底面から外縁して立ち上がっている。外縁は付加角の溝文が施されている。	内側はナブ塗形。	砂粒・石灰 赤い棕色 赤褐色	5% 172 SK108
		C (6.8)				

第384図の3・4は弥生式土器片の拓影図である。3は頸部片で、櫛描き直線文を縦位に施している。4は口唇部に細文を施した二段作出の複合口縁部片で、付加条の縄文が施されている。

地下式坑（第385図）

地下式坑は、第1次調査時にオノ谷上台地に、比較的浅く小さいものが1基、第2次調査時に東側の宿台地に比較的深く大きいもの1基が検出された。

第1号地下式坑（第43号土坑）

本跡は、調査区の西側部、D1b₂区を中心に確認され、第2号古墳の南南東側18m程に位置している。本跡は、最初土坑として調査を進めたが、調査の過程で地下式坑であることが判明した遺構である。主軸方向はN 62° Wを指している。

竪坑は長軸1.15m・短軸0.55mで主軸方向に対してほぼ直角方向に横長の隅丸長方形形状を呈している。3面の壁はロームで、上部が底部よりやや内側に傾斜しているがほぼ垂直気味に0.8m程を掘っている。底面はほぼ平坦でよく締まっており、0.34m²の面積を有し、主室側にわずかに傾斜している。覆土は不明である。

主室の底部平面形は、主軸方向に対しほぼ直角方向に横長の不整長方形を呈し、規模は長軸1.76m・短軸0.68mである。底部は中央部がわずかに凹んでいる。壁はロームで、奥壁が良く残り、底部から0.5m上部まで丸味を帯びて約0.16m程凹んでいる。北東側壁は底部から0.45m程上部までわずかにゆるい弧状に凹んでいる。南西側壁は他の上坑と切り合っており、0.25m程底部から外傾しているだけであるが、上層から観察すると南西部壁付近は第55号土坑が本跡を切って掘っている。また、竪坑と主室の底部に近い壁には、第2号地下式坑と同様の細い鋭利なスコップ状のもので掘ったと思われる工具の使用痕が認められる。確認面から底部までは約1mである。なお、主室底は竪坑底より0.18m程低い。

覆土は締まりの弱い多量のローム大ブロックを含む褐色土が、底部から0.7m程堆積している。これは天井部が最初に崩落したものと思われる。その後、上部にローム粒子とロームブロックの混じりでやや締まりを帯びた暗褐色土（除去した表土と酷似しているもの）が一気に堆積したものである。

本跡からの出土遺物はないため、時期は不明である。

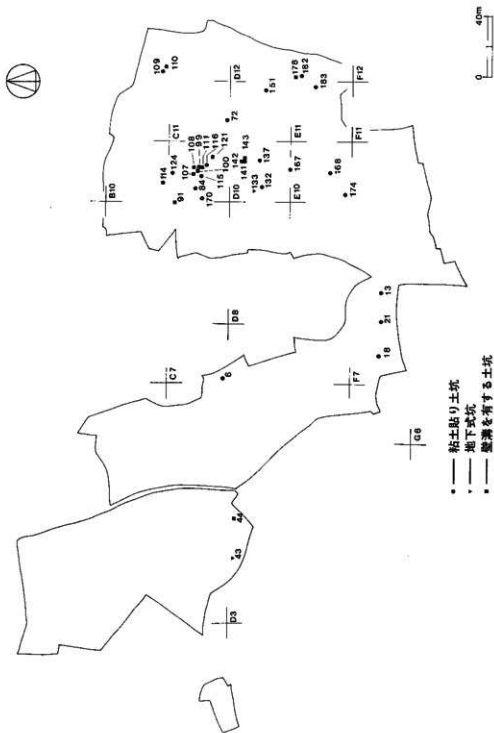
第2号地下式坑（第133号上坑）

本跡は、D10e₂区を中心に確認され、第23号古墳の南南東側11m程に位置している。主軸方向はN-22°-Eを指している。

竪坑は、長軸1.07m・短軸0.88mで主軸方向に対してほぼ直角に、横長の隅丸長方形形状を呈して

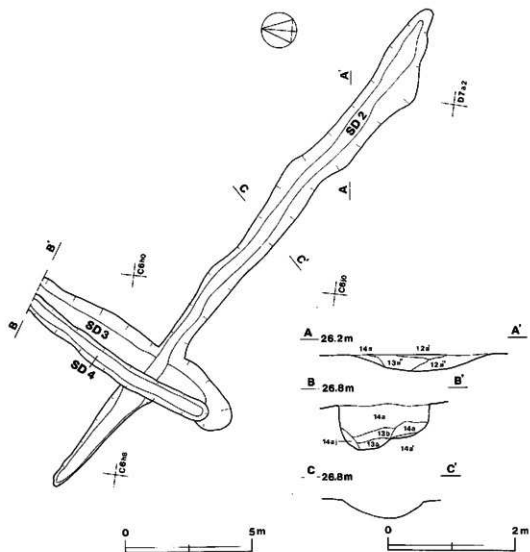
その後、主室側へ主室と竪坑を仕切っていた壁が崩落している。この時点で、主室をつなぐ空間がふさがれ、竪坑に更に2層の暗褐色土が堆積した後、主室側とほぼ水平になるまで褐色土と暗褐色土が堆積したが、更に、2つの土坑が「基の上坑状」となって土砂の堆積がなされていたものと思われる。

竪坑と主室の底部に近い層には、第1号地下式坑と同様の細い鋭利なスコップ状のもので掘ったと思われる工具の使用痕が認められている。

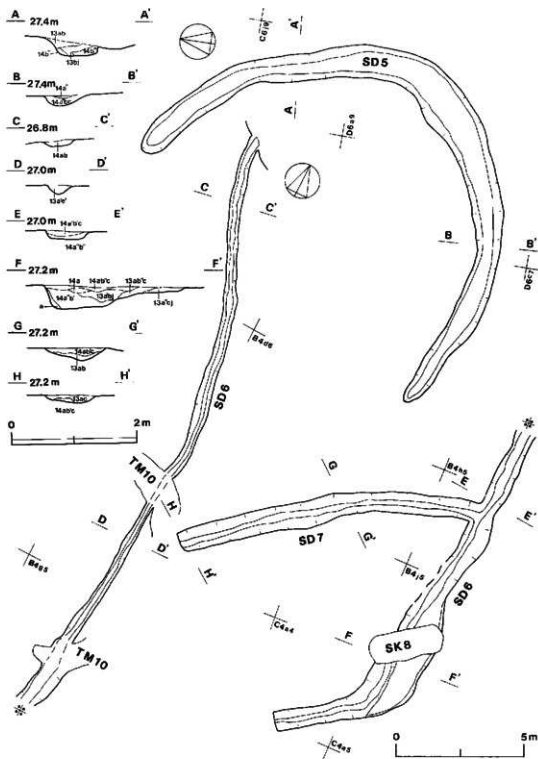


第6節 溝と出土遺物

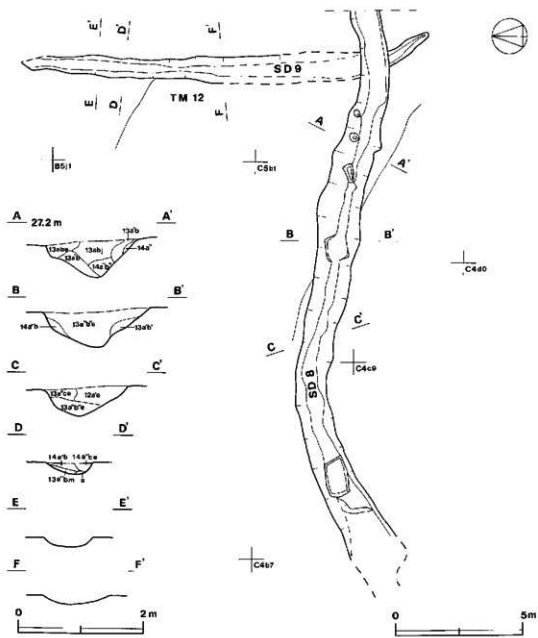
本節では、当遺跡から検出された溝36条のうち、整理の段階で溝と判断し難い第10号溝を欠番とし、35条のうち26条の溝については一覧表にまとめた。なお、これらの溝と形状や規模の異なる第29号溝については、文章で解説した。また、長峰城跡に伴う堀や溝と考えられる第1・13・30～35号溝については、中世の遺構と考えられるため第2章第8節1で扱うことにした。



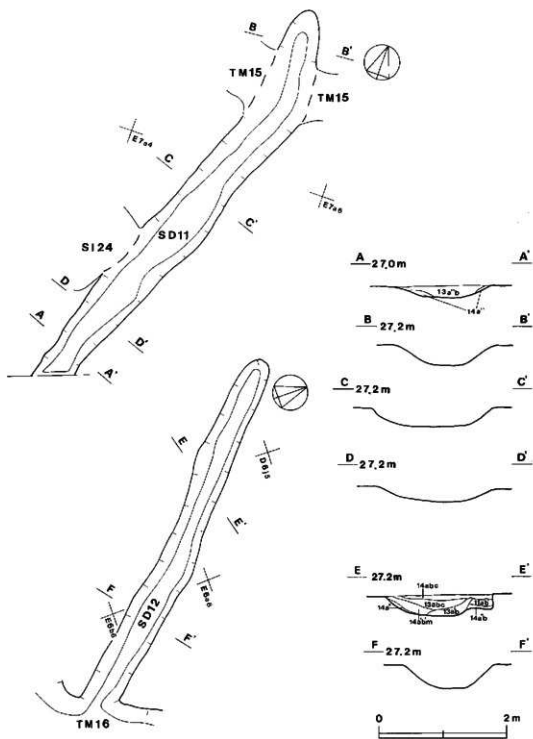
第387図 第2・3・4号溝実測図



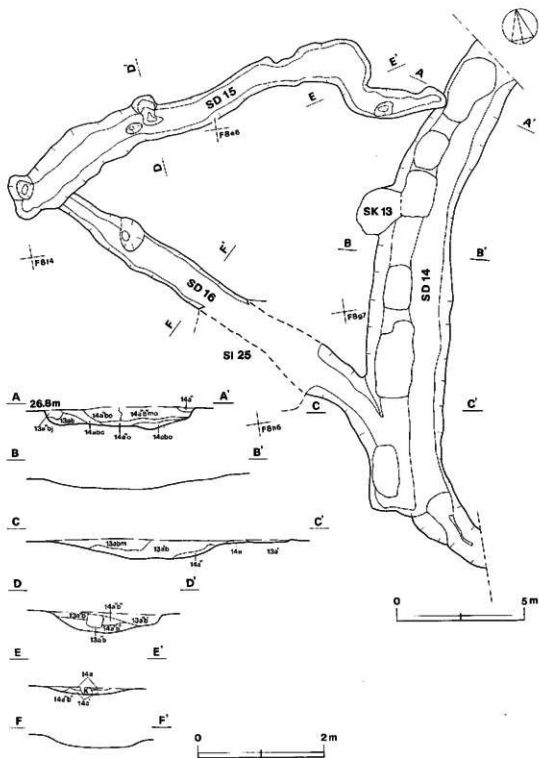
第388图 第5·6·7号满实测图



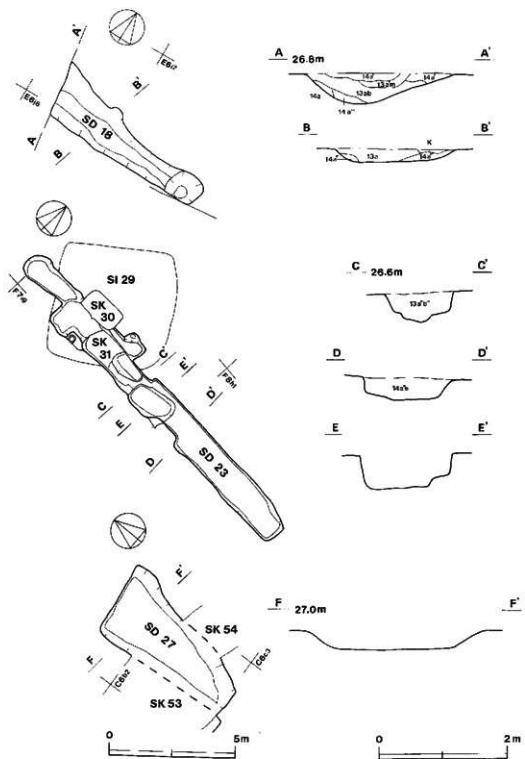
第389图 第8·9号沟渠测图



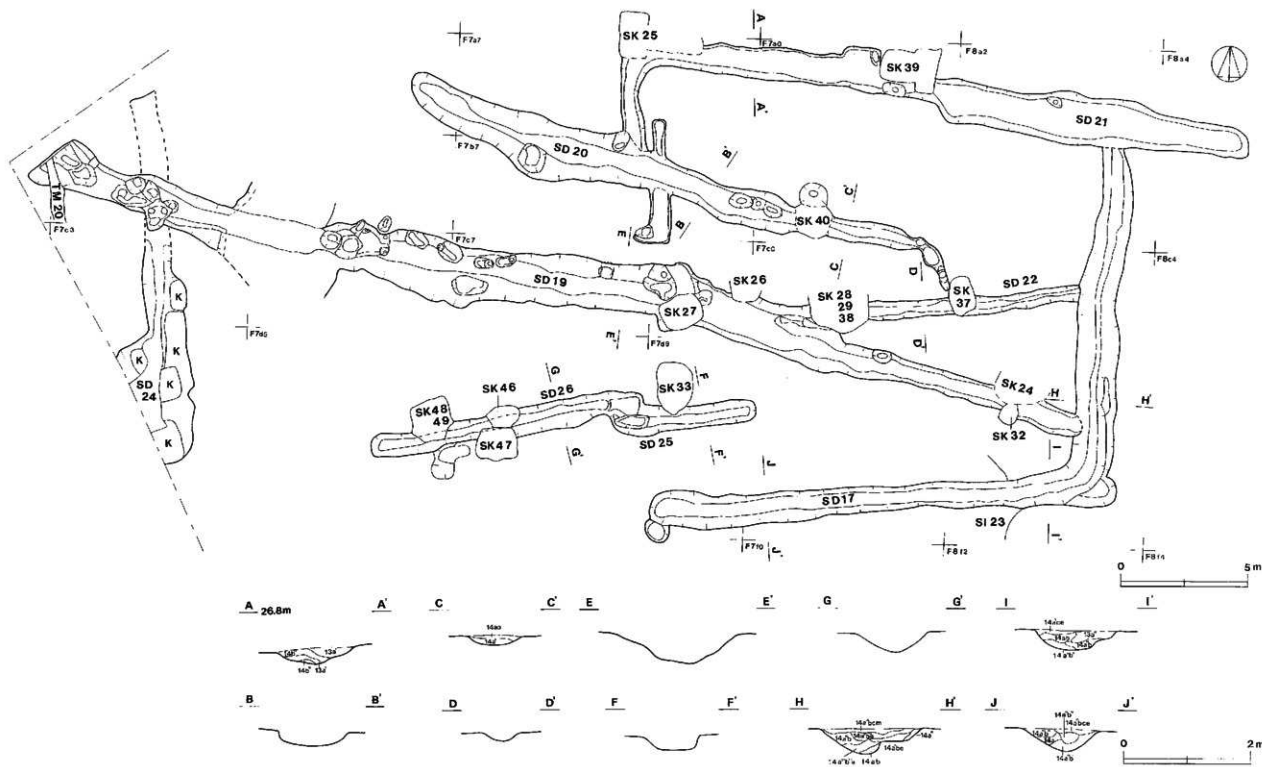
第390图 第11·12号沟实测图



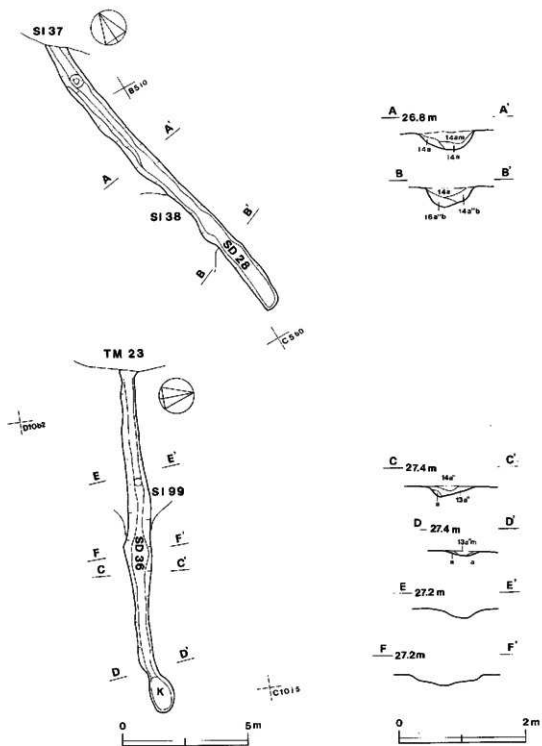
第391图 第14·15·16号涵洞测图



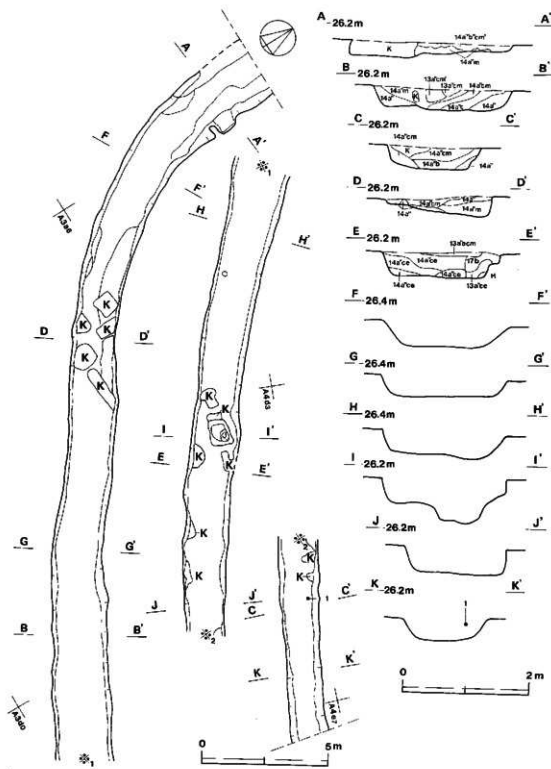
第392图 第18·23·27号清丈测图



第393图 第17·18·20·21·22·24·25·26号清灰测洞



第394图 第28·36号夹测图



第395图 第29号清淤测图

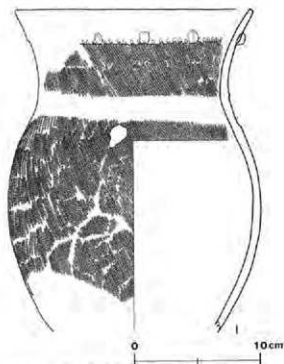
第29号溝 (第395図)

本跡は、エリア外の北西からZ3区・A3区・A4区を経て、東側のエリア外に弓なりに曲って延びている。長さは56.8m程で、断面形は全体がほぼ逆台形状に掘られ、壁はロームで外傾して立ち上がっている。上幅は1.3~2.6mで総体的に北西側が広く、東側に向くに従って狭くなっている。下幅は0.7~2.0mで上幅と同様に北西側が広く、東側に至って狭くなっている。確認面からの深さは0.3~0.5mである。底面はロームで、一部でやや凹凸掘乱穴があるものの全体が平坦である。ただし、底面の標高は、溝の中間部付近が高くて25.91m・北西側が25.68m・東側が25.36mと低い。これはこの付近の地形が東側へ低く傾斜しているためと思われる。

覆土は、おおむね2層からなり、上層は多量のローム粒子と少量~微量の炭化粒子や焼土粒子を含む黒褐色土及び暗褐色土である。下層は多量のローム粒子と微量の炭化粒子や焼土粒子を含む褐色土、底部付近の壁側にはローム粒子とローム小ブロックを含む褐色土が、それぞれ縮って堆積している。

遺物は全て覆土中と確認面からの出土で、第396図1の弥生式土器の壺、縄文式土器片2点、弥生式土器片49点、土師器片13点、円筒埴輪片28点、古墳の埋葬施設に使用されたものと思われる棺材の石片1点、陶器片1点が出土した。弥生式土器の壺は、A4e.区の溝の確認面から出土して

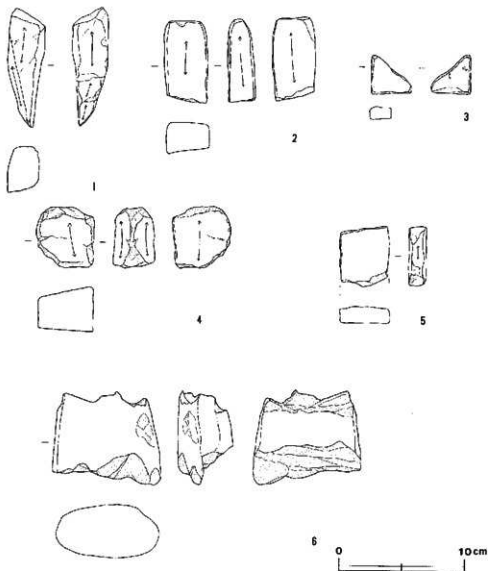
いるため、この溝の時期と性格が明らかになるかと思ひ検討したが、この付近にはいくつかの溝底に達する掘乱穴が見られることから、確認面の層から受けた広い掘乱穴による流れ込みと判断した。現段階では時期や性格の不明な溝と判断せざるを得ない。



第396図 第29号溝出土遺物実測図

第29号溝出土土器観察表

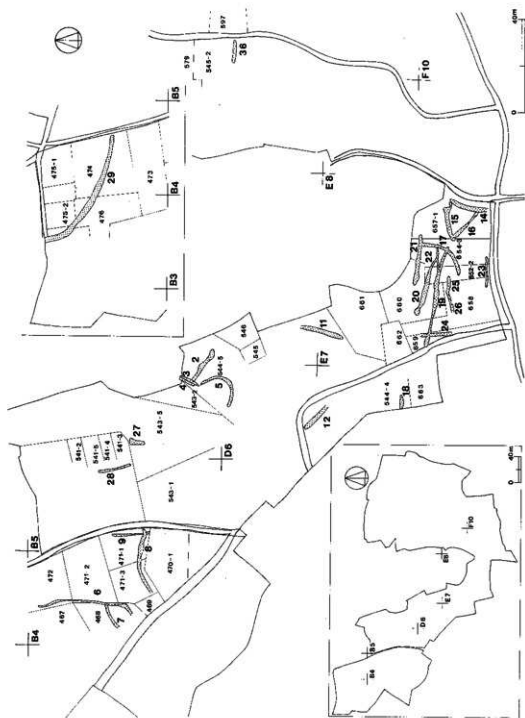
図番	器種	口径(cm)	器形の特徴及び文様	土質の特徴	胎土・色相・焼成	備考
第396区 1	甕 炊土式土器	A 19.2 B (75.7)	胴下半部以下は欠損している。胴口から加蓋にかけて器厚をほぼ一定に保ち、(胴口でやや薄くなり、全体的に短いS字状を呈している。口縁部は滑合、縁で無文とし、下部に横状工具による刺突を施らしている。さらに、刺突文と重なる位置に1部単位の間を3か所(図表9参照)付けている。胴厚と帯状の無文帯を施した胴部に、付訂本の無文が施されている。	写野はツグ型形。外面は口縁部及び胴部をツグ型形。	砂粒・土質により褐色 滑合	70% P/S



第397図 第29号溝出土遺物実測図

表12 溝一覧表

溝番号	台数(口)	方位方向	断面形状	堀				掘定	成り	掘土	出土遺物	備考	埋込番号
				長さ(m)	幅(m)	深さ(m)	深さ(m)						
2	C6, C7	N 55° W	浅い U字状	21.24	62~184	32~68	12~24	Ⅲ	2	自然	土師片4, 埴輪片 6, 7の片	544号地と517号外と の境と推定される。 TM1, SD5・4と重複	第38区
3	C6	N 26° E	浅い U字状	9.75	65~73	19~120	12~30	Ⅲ	2	自然	543と544号地の境 と推定される。 TM1, SD3・4と重複	543と544号地の境 と推定される。 TM1, SD2・3と重複	第38区
4	C6	N 26° E	浅い U字状	8.25	61~86	30~46	77~32	Ⅱ	2	自然	土師片13, 埴 輪片7	543と544号地の境 と推定される。 TM1, SD2・3と重複	第38区
5	C6, D6	-	浅い U字状	26.69	75~184	42~112	16~25	Ⅲ	2	人為		古溝の埋切り溝。 TM1と重複	第38区
6	B4, C4	N 1° W	浅い U字状	46.92	30~188	10~46	8~38	Ⅲ	4	自然		498と471番地の境 線。TM10, SD7, SD8と重複	第38区
7	B4	N 61° E	浅い U字状	11.92	68~109	10~25	11~21	Ⅲ	4	自然		458と509番地の境 線。SD6と重複	第38区
8	C4, C5	-	浅い U字状	22.9	130~174	29~78	43~55	Ⅲ	3	自然	土師片1, 埴 輪片9	470と471番地の境 線。TM12, SD9と重複	第39区
9	B5, C5	N 2° W	浅い U字状	16.44	50~100	11~39	14~15	Ⅲ	2	自然		遺跡域 TM12, SD8と重複	第39区
11	D7, E7	N 16° E	浅い U字状	17.9	128~209	54~122	11~28	Ⅲ	2	自然	土師片12, 埴 輪片1	TM16, SD1と重複	第39区
12	D6, E6	N 46° W	浅い U字状	15.0	118~152	32~79	28~42	Ⅲ	2	自然		遺跡域 TM16と重複	第39区
14	F8	N 6° E	浅い U字状	19.09	205~228	148~220	19~36	Ⅲ	6	自然		通称域 SD15・16, SK13と重複	第39区
15	F8	N 80° E	浅い U字状	19.3	68~152	28~130	12~32	Ⅲ	4	自然	土師片9, 埴 輪片1	SD14・16と重複	第39区
16	F8	N 12° W	浅い U字状	21.8	82~150	38~118	14~54	Ⅲ	1	自然		SD14・15, SD13と 重複	第39区
17	F7, F8	N 6° E	浅い U字状	30.3	68~166	29~66	30~39	Ⅲ	4	自然	土師片3, 埴 輪片3	SD19・21, SD13と 重複	第39区
18	E6	N 84° W	浅い U字状	6.81	101~100	34~86	20~49	Ⅲ	2	自然		544と662番地の境 線	第39区
19	F7, F8	N 78° W	浅い U字状	42.1	88~240	38~123	20~49	Ⅲ	3	自然	544号地と517号 地の境と推定 される。TM1, SD 7・8と重複	SD17・22・24, TM25, SK34・26・ 27・32と重複	第39区
20	F7, F8	N 72° W	浅い U字状	23.22	90~228	24~109	15~24	Ⅲ	4	自然	埴輪片2, 埴 輪片1	SD21, SK37・40と重 複	第39区
21	F7, F8	N 82° W	浅い U字状	31.9	65~208	35~140	14~24	Ⅲ	1	自然		517号外との境 と推定される。SD17・76, SK25・30と重複	第39区
22	F7, F8	N 85° E	浅い U字状	(11.0)	52~76	8~38	14~20	Ⅲ	2	自然		SD17・19, SK28・ 29・37・38と重複	第39区
23	F7, F8	N 89° E	浅い U字状	14.8	80~140	68~118	34~44	Ⅲ	6	自然	土師片2, 埴 輪片1	遺跡域 SK30・31, SD19と重複	第39区
24	F7	N 5° W	浅い U字状	(13.6)	110~400	30~210	20~22	Ⅲ	2	自然	土師片10, 埴 輪片1	通称域 SD19と重複	第39区
25	F7	N 80° E	浅い U字状	5.70	80~122	22~38	73~86	Ⅲ	3	自然	板石	658と660番地と地境 SD26, SK33と重複	第39区
26	F7	N 77° E	浅い U字状	10.97	89~114	22~38	23~32	Ⅲ	3	自然		658と660番地と地境 SD26, SK16~43と 重複	第39区
27	C6	N 1° E	浅い U字状	6.0	168~168	80~230	31~32	Ⅲ	1	人為		イロ穴か SK50・54と重複	第39区
28	B5, C5	N 14° W	浅い U字状	13.3	57~89	78~46	28~30	Ⅲ	3	自然		地境か SD17・38と重複	第39区
36	D10	N 80° W	浅い U字状	13.3	45~109	23~62	12~16	Ⅲ	4	自然		SD19, TM23と重複	第39区



第388図 溝と土地割りの関係位置図

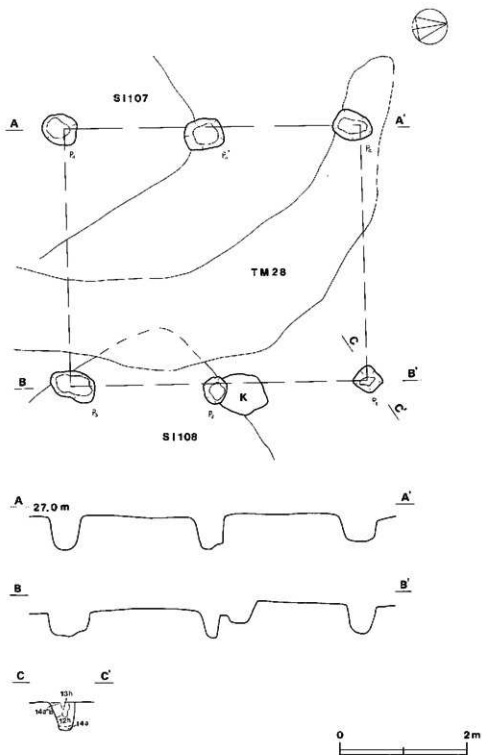
第7節 掘立柱建物跡と出土遺物

第1号掘立柱建物跡 (第399図)

本跡は、2次調査区のD11_g区を中心に確認され、第107・108号住居跡や第28号古墳と重複している。新旧関係は、本跡が第107・108号住居跡の床面や壁の一部及び第28号古墳の周溝を切っていることから、2軒の住居跡や古墳より新しい時期の遺構と思われる。

規模は、桁行が2間(4.68m)、梁行が1間(4.13m)、床面積は19.3m²であり、長軸方向がN-9°-Eを指している南北棟の建物である。柱間寸法は、桁行(南北)の1間で2.24~2.44m、梁行(東西)は北妻・南妻とも4.13mで等間隔である。柱掘方の規模は、P₁・P₂・P₄が長軸(径)46~49cm・短軸(径)40~43cm・深さ40~50cm、P₃・P₅・P₆は長軸(径)59~71cm・短軸(径)38~50cm・深さ43~58cmである。平面形は、P₁・P₂・P₃・P₆が隅丸長方形、P₄・P₅は不整形円形状を呈する。柱痕跡は、各柱穴とも認められなかった。土層は、中央に少量のローム粒子等を含む縮まりのやや弱い暗褐色土が柱状に、周囲に多量のローム粒子や少量のロームブロックを含む褐色土、少量のローム粒子等を含む極暗褐色土が堆積しているが、縮まり具合から版築がなされた様子は認められない。また、全ての柱掘方の底面は突き固めたように硬く縮まっている。

本跡の時期については、遺物の出土がなく明確にすることはできなかった。



第389图 第1号立柱建筑物遗迹测图

第8節 中世の遺構と出土遺物

本節においては、当遺跡の所在する台地の東端部に所在する、中世の長峰城跡に伴うと思われる堀7条、溝1条、塚2基について記述する。

1 堀・溝

第1号堀 (SD30) (第401・402図)

本跡は、2次調査区のF8・F9・G8・G9の各区にまたがって確認された南北方向に延びている堀である。堀のほぼ中央部を東西方向に走る農道を境とし、北側については形状・規模・主軸方向を明確にできた。しかし、南側については、40mほどで比高17mを測る急崖となり、崖下に人家が存在していることから土砂崩れの発生による危険が十分に予想されたため、表土を全面除去して調査することはできなかった。従って、トレンチ発掘による調査を実施したが底面まで掘り下げることができず、形状・規模等を明確にすることはできなかった。

F8・F9区における本跡は、農道から北(N-5°-W)へ5mほど直線的に延びた所でほぼ直角に屈曲し、東(N-78°-E)へ5mほど直線的に延びた所で再びほぼ直角に屈曲した後、北(N-10°-W)へ28mほど直線的に延びている。北側はさらに延びているものと思われるが、調査区域外となるために明確にすることはできなかった。しかし、本跡の北側が宿二ノ谷の南縁に接していることから、堀切り状に開くものと推定される。農道から北側における本跡は「㄂」状に屈曲する「折り」が施された堀であり、規模は全長38.3m、上幅6.0~7.5m、下幅0.5~1.1m、深さ2.2~2.5mで、壁は40~50度の角度で立ち上がっている。断面形が「㄂」を呈する箱堀で、掘り込みは灰白色粘上層にまで達している。底面は平坦であるが、北側に向かって傾斜し、中央部と北端部の比高は0.8mを測る。G8・G9区においては、第401図に示したように幅1mのトレンチを東西方向に設定して調査を実施した結果、上幅5.0~6.5mの規模で南西側にわずかに張出した曲線を描きながら、第2号塚の北東側に延びていることが確認された。南側はさらに延びて宿台地南縁に堀切り状に開くものと推定されるが、調査区域外であるために明確にできなかった。

覆土は、下位にロームブロック等を中量から多量含む褐色土や暗赤褐色土が堆積している。上位にはローム粒子やブロック等を少量から多量含む極暗赤褐色土、暗赤褐色土、暗褐色土、上位にはローム粒子等を多量に含む暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

遺物は、覆土から堀に伴うと思われる内耳土器片18点、陶器片3点の他に、流れ込みと考えられる弥生式土器片1点、土師器片12点が出土している。

第2号堀 (SD11) (第401・402図)

本跡は、2次調査区のC9・D9・E9・F9・G9の各区にまたがって確認された南北方向に延びている堀である。堀の南部を東西方向に走る農道を境とし、北側については形状・規模・主軸方向を明確にすることができた。しかし、南側については、40mほどで比高17mを測る急崖となり、崖下に人家が存在していることから、土砂崩れの発生による危険が十分に予想されたため、表土を全面除去して調査をすることができなかった。従って、トレンチ発掘による調査を実施したが底面まで掘り下げることができず、形状・規模等を明確にすることはできなかった。

F9区における本跡は、農道から北(N-15°-W)へ8mほど直線的に延びた所でほぼ直角に屈曲し、東(N-72°-E)へ13mほど直線的に延びた所で再びほぼ直角に屈曲した後、北(N-14°-W)へ緩やかに傾斜しながら26mほど直線的に延びている。規模は、全長47m、上幅7.7~8.3m、下幅1.0~1.7m、深さ2.0~3.0mで、壁は45~60度の急角度で立ち上がっている。断面形が「V」を呈する箱堀で、掘り込みは灰白色粘土層にまで達している。本区における2度目の屈曲部から北へ5mほどの所には、土橋・木橋の痕跡が検出されている。土橋は平面形が「><」状を呈する残存部が壁面及び底面に検出され、さらに木橋については土橋の残存部上に2本1対と思われる柱痕跡が7本検出された。この土橋・木橋は、土橋が一段階古い時期に堀の一部を掘り残して構築され、その後の改修により木橋が設置されたものと考えられ、虎口(出入口)として使用されたものと思われる。E9区においては、F9区から続く堀が北へ7mほど直線的に延びた所でほぼ直角に屈曲し、北東(N-64°-E)へ22mほど直線的に延びている。この区間における堀の形状は箱堀であり、上幅4.0~4.3m、下幅0.4~0.5m、深さ1.0~2.0mで、壁は35~65度の傾きで立ち上がっている。F9区における箱堀より小規模となるが、最初の屈曲部の堀底には上幅1.5m、下幅1.0m、深さ0.7mの規模で長方形に掘りくぼめて段差をつけている他に、長方形の西端部を掘り込んで方形の堅穴を構築している。この区間後、再びほぼ直角に屈曲し、北(N-13°-W)へ30mほど延びている。堀の形状は箱堀から「V」を呈する薬研堀へと変わり、上幅4.3~5.0m、下幅0.5~0.6m、深さ1.7~2.3mで壁は55~70度の急角度で立ち上がっている。堀の形状が箱堀から薬研堀へ変わる2度目の屈曲部にも堅穴が構築されており、規模は、上幅1.2m、下幅0.7m、深さ0.5mである。E9区における堀の全長は59mを測る。C9・D9・E9においては、F9区から北に延びてきた堀が宿二ノ谷の東側の形状に沿って緩やかな屈曲を示しながら、さらに北(N-12°-W)へ80mほど延びている。これらの区間における規模は、全長86m、上幅4.3~4.7m、下幅0.3~0.8m、深さ1.6~2.4mで、壁は50~55度の急角度で立ち上がっている。断面形が「V」を呈する薬研堀で、掘り込みは灰白色粘土層下の砂層まで達している。北側は、さらに延びて宿二ノ谷に開口しているものと推定されるが、調査区域外となるため明確にならなかった。農道から北側における本跡は「><」状に屈曲する「折り」が施された堀であり、全長192mを測る。G9区において

は、第401図に示したように幅1mのトレンチを東西方向に設定して調査を実施した。その結果、F9区から南に延びてきた堀は農道の南側で西側に屈曲した後、上幅6.3～7.0mの規模で南西側にわずかに張り出した曲線を描きながら、第1号塚の南西側に延びていることが確認された。南側は、さらに延びて宿台地南縁上に堀切り状に開くものと推定されるが、調査区域外のために明確にならなかった。

覆土は、下位に灰白色粘土粒子やブロック、灰褐色砂等を中量から多量含む暗赤褐色土、黒褐色土、暗褐色土が堆積している。中位にはローム粒子や灰白色粘土粒子等を多量含む暗赤褐色土、暗褐色土、極暗褐色土、上位にはローム粒子やブロックを少量含む暗褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

遺物は、覆土から堀に伴うと思われる内耳土器片1点が出土している。

第3号堀 (SD13) (第403図)

本跡は、1次・2次調査区のE6・E7区にまたがって確認された堀であり、E6f₁区付近で第19号古墳、E7f₁区付近で第17号古墳、E7f₂区付近で第4号堀と重複している。2基の古墳との新旧関係は、古墳の周溝を切って構築されていることから、本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。第4号堀との新旧関係は明確にとらえることはできないが、規模や形状等から同時期に存在した可能性が高いものと考えられる。

規模は、全長38m、上幅3.8～4.8m、下幅0.8～1.2m、深さ1.2m前後で、壁は40～50度の角度で立ち上がっている。断面形が「U」を呈する箱堀で、掘り込みは粘土層に達している。本跡は、東西方向(N-81°-E)に直線的に掘りこまれており、東側は第4号堀と接続している。西側はさらにオノ谷の東側に延びているものと思われるが、調査区域外のため明確にならなかった。

覆土は、下位にローム粒子を多量に含む褐色土、中位にローム粒子やロームブロックを中量含む暗褐色土、上位にローム粒子やロームブロックを多量に含む褐色土が堆積している。いずれも締まりのある土層あり、自然堆積と思われる。

遺物は、覆土から堀に伴うと思われる内耳土器片1点の他に、流れ込みと考えられる土器器片15点、円筒埴輪片7点が出土している。

第4号堀 (SD32) (第403図)

本跡は、2次調査区のE7区に確認された堀であり、E7g₁区付近で第17号古墳、E7f₂区で第3号堀と重複している。古墳との新旧関係は、同古墳の周溝を切って構築されていることから、本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。第3号堀との新旧関係は明確にとらえることはできないが、規模や形状等から同時期に存在した可能性が高いものと考えられる。

規模は、全長28m、上幅3.2～4.5m、下幅0.5～0.9m、深さ1.4m前後で、壁は50～60度の急角度で立ち上がっている。断面形が「┌┐」を呈する箱型で、掘り込みは粘土層に達している。本跡は、北東方向(N-35°-E)に直線的に掘り込まれており、南西側は第17号古墳の周溝を切つてやや延びた所で止まっている。北東側はさらに宿二ノ谷の西側に延びているものと思われるが、調査区域外のため明確にならなかった。

覆土は、下位に褐色土、中位に極暗褐色土、上位に暗褐色土が堆積している。いずれもローム粒子を中量から多量含む締まりのある上層であり、自然堆積と思われる。

遺物は出土していない。

第5号堀 (SD33) (第403図)

本跡は、2次調査区のE7区に確認された堀であり、E7_g区で第17号古墳と重複している。新旧関係は、同古墳の周溝を切つて構築されていることから、本跡の方が新しい時代の遺構と思われる。

規模は、全長9m、上幅1.7～4.2m、下幅0.6～1.0m、深さ1m前後で、壁は50～55度の急角度で立ち上がっている。断面形が「┌┐」を呈する箱型で、掘り込みは粘土層に達している。本跡は、北西側にわずかに張出した曲線を描きながら北東方向(N-60°-E)に掘り込まれており、南西側は第17号古墳の周溝を切つてやや延びた所で止まっている。北東側はさらに宿二ノ谷の西側に延びているものと思われるが、調査区域外のため明確にならなかった。

覆土は、下位に暗褐色土、中位に黒褐色土、上位に暗褐色土が堆積している。いずれもローム粒子を多量に含む締まりのある上層であり、自然堆積と思われる。

遺物は出土していない。

第6号堀 (SD35) (第403図)

本跡は、2次調査区のE7区に確認された堀であり、E7_i区で第17号古墳と重複している。新旧関係は、同古墳の周溝を切つて構築されていることから、本跡の方が新しい時代の遺構と思われる。

規模は、全長3m、上幅1.8～2.0m、下幅0.6～0.7m、深さ1m前後で、壁は60～65度の急角度で立ち上がっている。断面形が「┌┐」を呈する箱型で、掘り込みは粘土層に達している。本跡は、東西方向(N-72°-E)に直線的に掘り込まれており、東側は第17号古墳の周溝を切つてやや延びた所で止まっている。西側はさらに才の谷の東側に延びているものと思われるが、調査区域外のため明確にならなかった。

覆土は、下位に褐色土、中位に暗褐色土、上位に褐色土が堆積している。いずれもローム粒子

を多量に含む締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

遺物は、覆土から堀に伴うと思われる内耳土器片5点が出土している。

第7号堀 (SD1) (第404図)

本跡は、1次調査区のD6・D7・C7の各区にまたがって確認された堀であり、D6区で第26号住居跡と重複している。新旧関係は、床面を切って構築されていることから、本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。また、第16号古墳とも重複しているが、本跡が同古墳の周溝を北東から南西方向に切って構築されていることから、本跡の方が新しい時期の遺構と思われる。

規模は、全長54m、上幅1.5～2.7m、下幅0.3～0.6m、深さ0.6～0.9mで、壁は50～60度の急角度で立ち上がっている。断面形が「∟」を呈する箱堀で、掘り込みは粘土層に達している。本跡は、北東方向(N-42°-E)に44mほど直線的に延びた後、北(N-8°-W)へ方向を変えて10mほど延びている。北側はさらに宿二ノ谷の西側に延びているものと思われるが、調査区域外のため明確にならなかった。南西側は、本跡が台地を北東から南西方向に切るような形で構築されていることから、さらに延びて台地西端に現状保存されている前方後円墳の北側を通してオノ谷の東側に開くものと推定される。

覆土は、下位に褐色土、中位に暗褐色土や褐色土、上位に暗褐色土が堆積している。いずれもローム粒子やロームブロック等を少量から中量含む締まりのある土層であり、自然堆積と思われる。

遺物は、覆土から堀に伴うと思われる内耳土器片8点、陶器片4点の他に、流れ込みと考えられる土師器片47点、円筒埴輪片54点、球状土鏝1点が出土している。

第34号溝 (第401・第402図)

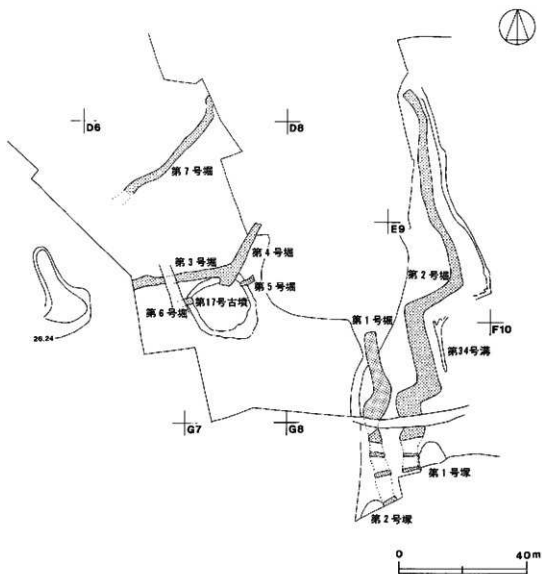
本跡は、2次調査区のC9・D9・E9・F9の各区にまたがって確認された南北方向に延びている溝である。E9・F9区において長方形を呈する土坑6基と重複しているが、底面や壁を切られていることから、本跡の方が古い時期の遺構と思われる。

規模は、全長105m、上幅0.8～1.3m、下幅0.8～1.1m、深さ0.3～0.6mで、壁は西側が50～70度の急角度、東側は内彎して立ち上がっている。溝の方向はC9・D9区においてN-15°-W、E9区でN-32°-W、F9区でN-9°-Wを指している。断面形は「∟」状を呈し、掘り込みは粘土層に達している。E9区の一部においては検出されなかったが、本来は続いていたものと考えられる。溝底には、長径30～50cm・短径30～40cmの楕円形の柱穴4本、長径70～90cm・短径50～70cmの楕円形の柱穴5本、長軸70～80cm・短軸50～60cmの長方形の柱穴2本が検出された他に、内彎する東側壁には、長径50～70cm・短径30～50cmの楕円形を呈する柱穴20本が検出された。各柱穴は

連続して検出されたわけではなく、柱穴間の距離にも規則性は認められない。

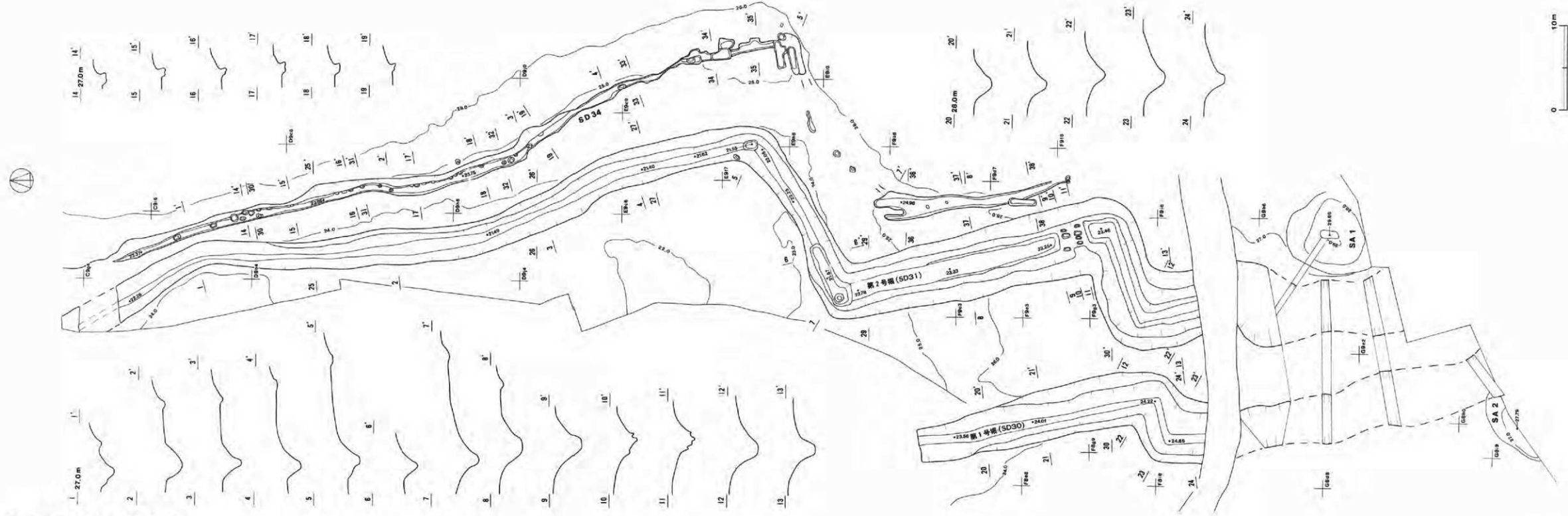
覆土は、中量から多量のローム粒子や粘土粒子、及び炭化物等を含む黒褐色土、暗褐色土が堆積している。

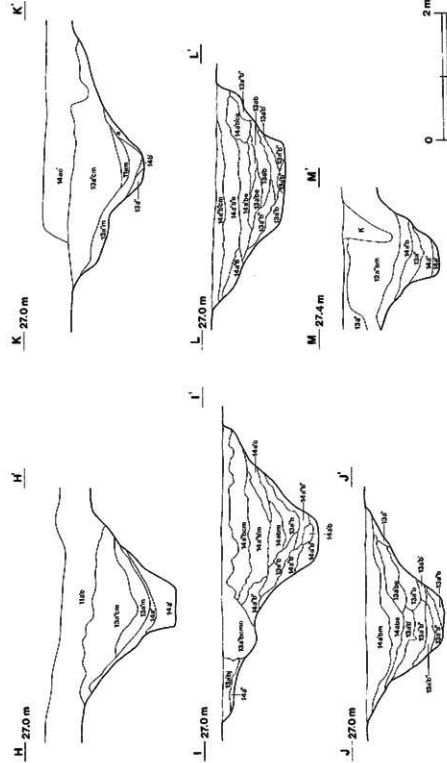
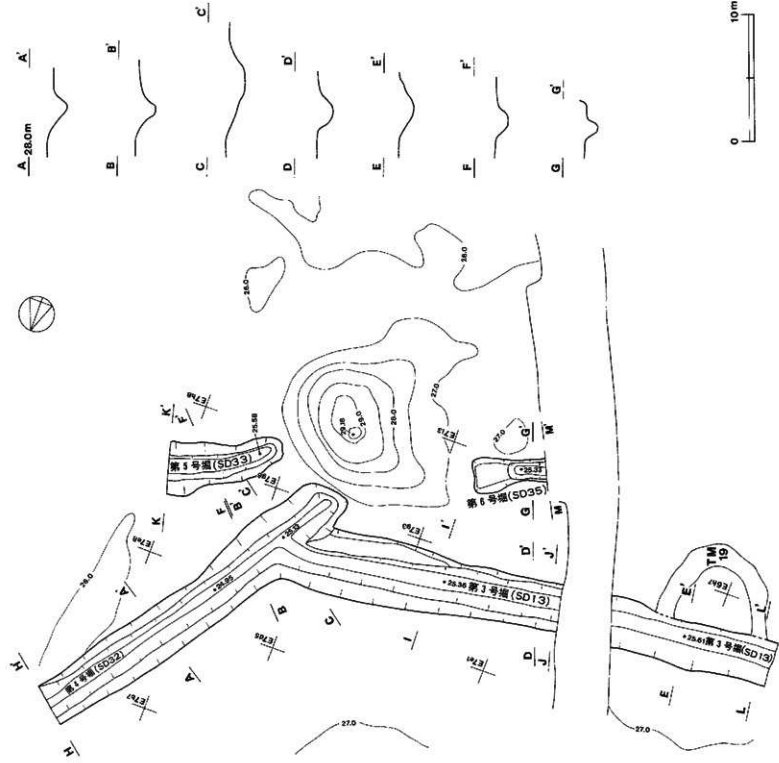
本跡の時期については、遺物の出土がなく時期を明確にすることはできなかった。しかし、溝底や東壁に31本の柱穴が検出されていること、本跡が第2号堀と台地の中段における平坦地（犬走り）の東端部に位置していること、第2号堀に平行して構築されていること等から、長峰城跡に関わりのある溝と考えられる。



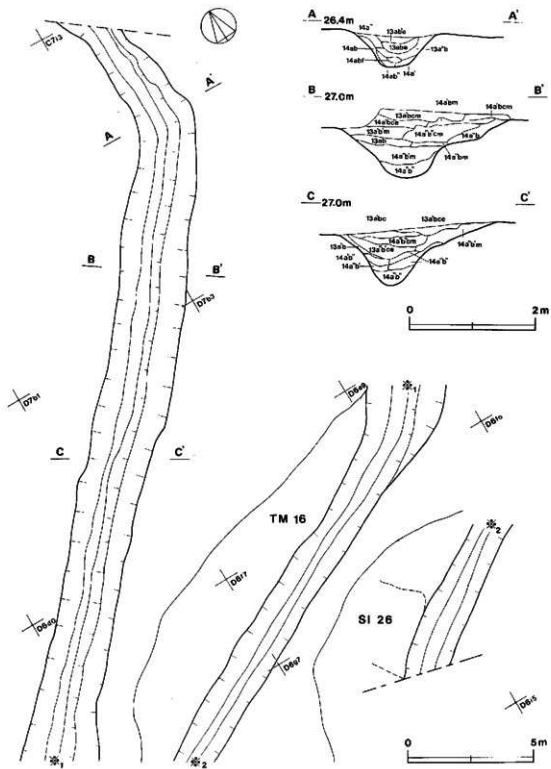
第400図 堀・塚・溝位置図

第401图 第1·2号堤·第34号消灾测图—1





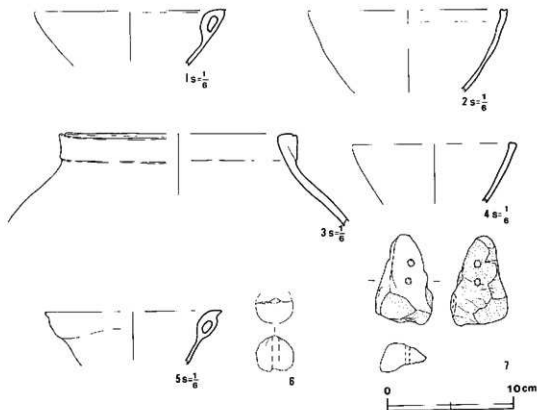
第403图 第3·4·5·6号堤实测图



第404图 第7号堀実測図



第405图 长峰城址周边地形图



第406図 掘出土遺物実測図

第1・2・6号掘出土土器観察表

図記番号	器種	径等(cm)	器形の特徴及び文様	土質の特徴	胎土・色ぬ・焼成	備考
第406図 1	内耳土器	A ¹ 30.0. B (8.7)	底部は欠損。体部は多少気味に固いて立ち上がる。11線部は中央部が凹み、外側にわずかに突出する。耳部は中央部の外面わずかに厚み。耳は1が両珠形。	口唇部は横ナゲ、横はナゲ変形。耳部は横ナゲ。	砂粒・黄砂 黒褐色 普通	30% P168 1号塚(SD90) 外面に黒漆付着
2	内耳土器	A ¹ 31.4. B (13.1)	底部は欠損。体部は外傾して立ち上がり、頸部から口縁部にかけてわずかに内彎する。11線部は中央が凹み、内側にわずかに突出する。	口唇部、口縁部内・外面は横ナゲ、横はナゲ変形。	砂粒・黄砂 黒褐色 普通	30% P167 1号塚(SD90) 外面に黒漆付着
3	盃	A ¹ 37.6. B (14.7)	口縁部から肩上半部にかけての破片。11線部は頸部から直立気味に隆起、口唇部は気味を帯びている。口縁部外面に粘土粉を貼り付け、11線部を形成している。	横傾成形。内・外面ともナゲ変形。	砂粒・長石 に白文褐色 普通	5% P88 1号塚(SD80) 普通
4	内耳土器	A ¹ 37.8. B (11.2)	底部は欠損。体部は内傾して立ち上がる。口唇部は中央部が凹み、内側にわずかに突出する。	口唇部、内・外面ともナゲ変形。	砂粒・黄砂 褐色 普通	5% P112 2号塚(SD81)

図面番号	省 種	法量 (cm)	器形の特徴及び文様	手 法 の 特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
第409図 5	内耳土器	A 28.0, B (5.5)	高さ3は欠片。体部は外傾して立ち上がり、胴部から1線部にかけてわずかに内傾する。1線部は平位で、内腹におわずかに突出する。耳蓋合部の外面はわずかに膨らむ。口には口縁残存。	口唇部、口縁部内・外面は横ナデ。他はナデ彫形。	砂粒・炭粒 に濃い褐色 青緑	10% P109 6号種(SD35)

2 塚

第1号塚 (第407・408図)

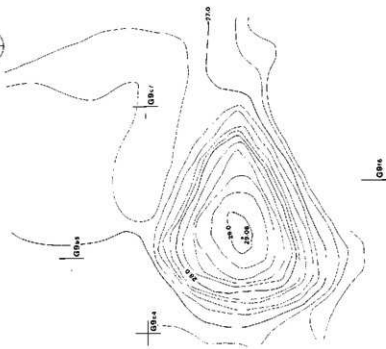
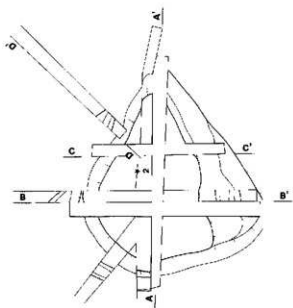
本跡は、2次調査区のG9区に前認された塚で、台地南縁に位置している。南西33mには、第1号・2号塚を間に挟んで第2号塚が存在している。

平面形は、西側が弧状に張出す扇形を呈し、長径11.1m・短径8.7mで、長径方向はN-86°-Wを指している。塚頂部の標高は29.06mであり、北側の裾端部における現地表面との比高は2.06mである。塚頂部から裾部にかけては、東側が緩く傾斜する他は急な傾斜である。調査は、第407図のように幅1mの上層観察用ベルトを「十」状に設定し、塚頂部から20cmずつ掘り下げていく方法で実施した。

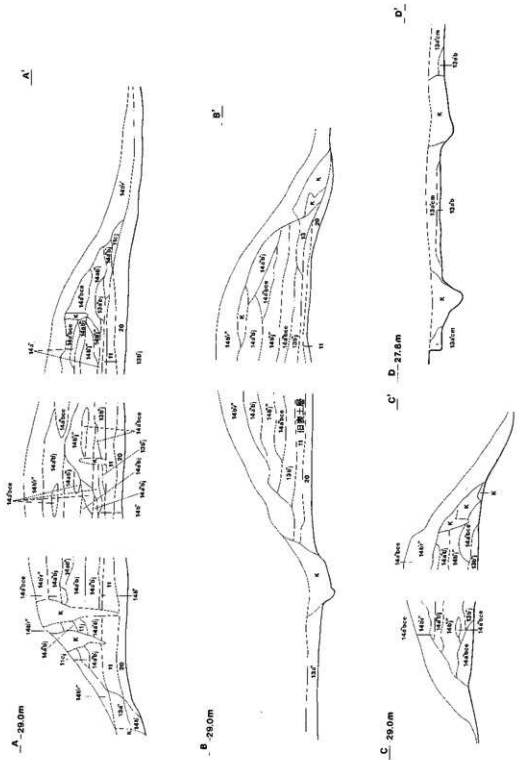
本跡は、周囲の現地表面から10～15cmほど上に残存する旧表土層（黒褐色土）の上面に、暗褐色土や褐色土を盛土して構築されており、主体は褐色土である。褐色土は色調や含有物により10層に細分することが可能で、中量から多量のロームブロックや少量の黒色土ブロック等が含まれており、水平及びブロック状に盛土されている。旧表土層の上面には、長径50cm・短径40cmの楕円形状に焼土の範囲が検出されていることから、構築の際に「清め」が行われたものと推定される。さらに、周溝の有無を確認するために、既設の上層観察ベルトを延長し、その他に補助ベルトを設定した。この結果、上幅1.3m、下幅0.2m、深さ0.6mで、断面形が「V」を呈する溝が裾端部を廻るような形で検出された。しかし、この溝は形状や規模等からは古墳に伴う周溝と考えにくく、本跡の北側が以前に畑として利用されていたこと等から、根切り溝と判断した。

遺物は、塚頂部北側の覆土上層から第409図1の石製勾玉、同じ北側の旧表土層から50cmほど上位に短刀の一部と考えられる2～6の鉄製品が出土している。

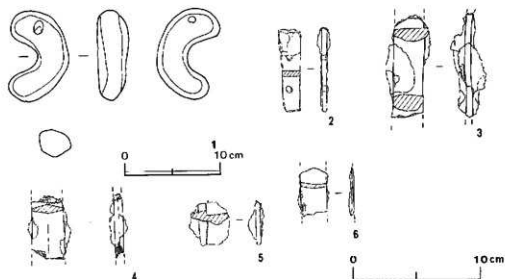
本跡は当初、第37号古墳として調査を進めてきたが、古墳に伴う埋葬施設である主体部、周溝、埴輪等の遺物が検出されなかったことや盛土の状跡等から、検討の結果、塚であると判断した。時期を明確にすることはできないが、堀との関係から長峰城跡に関連する物見塚としての性格をもつものと思われる。



第407图 第1号墩实测图—1



第400圖 第1号線測圖一2



第409図 第1号塚出土遺物実測図

第2号塚 (第410・411図)

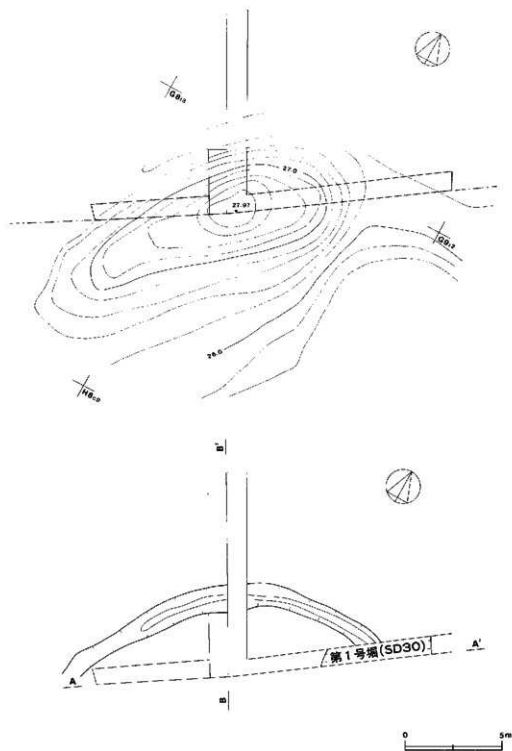
本跡は、2次調査区のG8区に確認された塚で、台地南縁に位置している。北東33mには、第1号・2号掘を間に挟んで第1号塚が存在している。

平面形は、長楕円形を呈し、長径17.5m、短径7.4mで、長径方向はN-36°-Eを指している。塚頂部の標高は27.91mであり、北側の裾端部における現地表面との比高は1.77mである。塚頂部から裾部にかけては、南西側が緩く傾斜する他は急な傾斜である。調査区域は、塚頂部を通過する地境線より北側の部分であり、塚全体の3分の1ほどである。調査は、第410図のように幅1mの土層観察用ベルトを「上」状に設定し、第1号塚の調査と同じ方法で、塚頂部から20cmずつ掘り下げていく方法で実施した。

本跡は、暗赤褐色土、暗褐色土、暗褐色土、褐色土を盛土して構築されているが、主体は褐色土である。褐色土は色調や含有物により10層に細分することが可能であり、少量から多量のロームブロック等が含まれている。さらに、周溝の有無を確認するために、既設の土層観察用ベルトを延長して調査したが、周溝を検出できなかった。

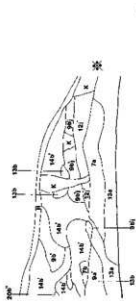
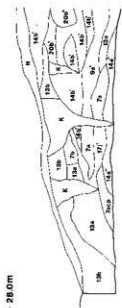
遺物は、塚頂部北側の盛土上層から第412図1の弥生式土器の壺胴部片や2の土師器のミニチュア土器が出土している。

本跡は当初、第38号古墳として調査を進めてきたが、古墳に伴う埋葬施設である主体部、周溝、埴輪等の遺物が検出されなかったことや盛土の状態等から、検討の結果、塚であると判断した。時期を明確にすることはできないが、堀との関係から長峰城跡に関連する物見塚としての性格を

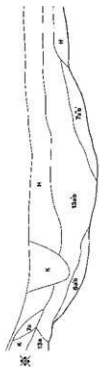


第410图 第2号坝实测图-1

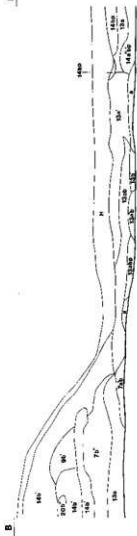
A. 28.0m



A'

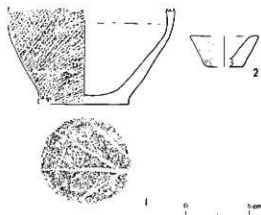


B'



第411图 第2号探果测图一2

もつものと思われる。



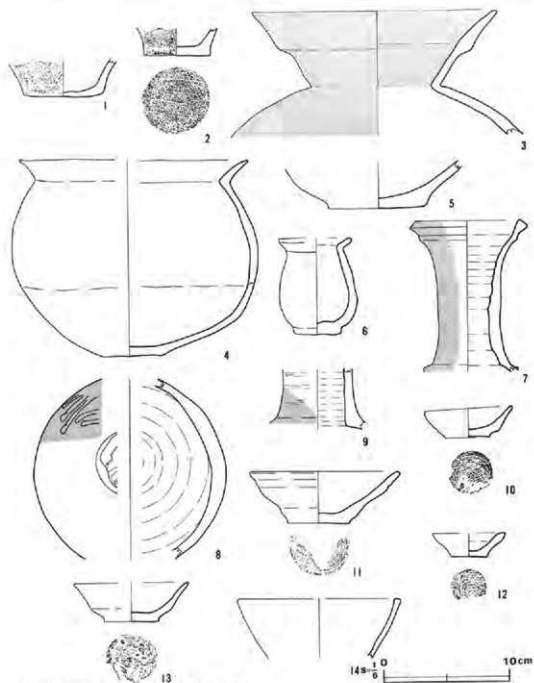
第412図 第2号塚出土遺物実測・拓影図

第2号塚出土土器観察表

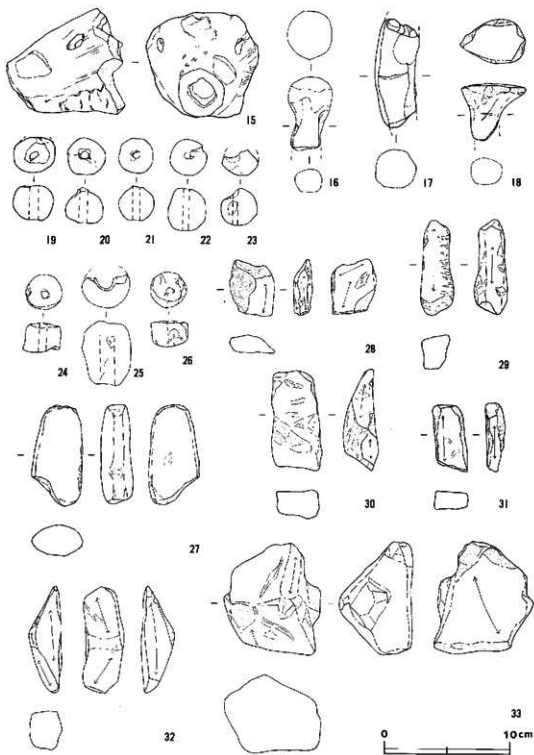
図数番号	器種	高さ(cm)	器形の特徴及び文様	手取の特徴	粘土・色調・焼成	備考
第412図 1	器	B (7.7)	平皿で、底部外周に木線痕が見られる。胴部は均輪して立ち上がるが、中位以下は欠損する。外面には付な来の線文が施されている。	片曲はナゲ形。	砂粒・スクリア 浅黄褐色 普通	20% P156
	穴生式土器	C 7.2				
2	ミニチュア	A (3.4)	平器。体部は外輪して立ち上がる。	内・外面ともナゲ形。	砂粒 明褐色 普通	30% P157
	土器	B 2.5				
	土器	C (3.0)				

第9節 遺構外出土遺物

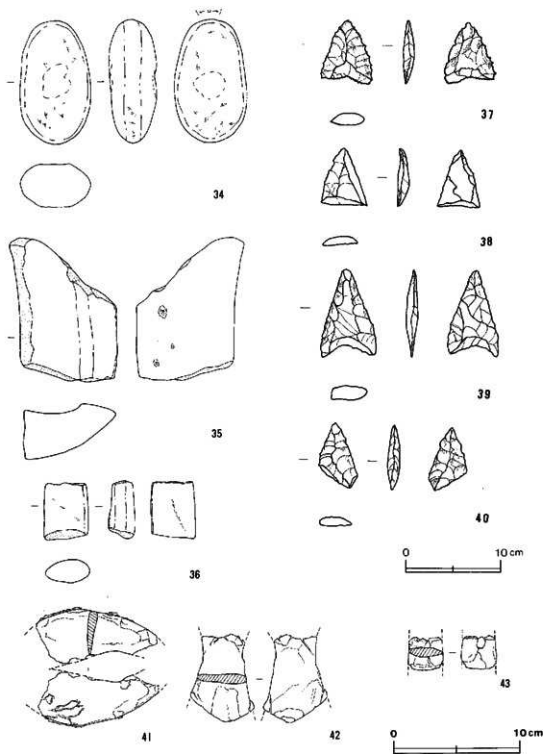
当遺跡では、遺構以外からも若干の遺物が出土している。これらは、本来いずれかの遺構に伴うものと思われるが、ここでは安易な推測をさけ、実測図をもってその一部を紹介するに留めた。



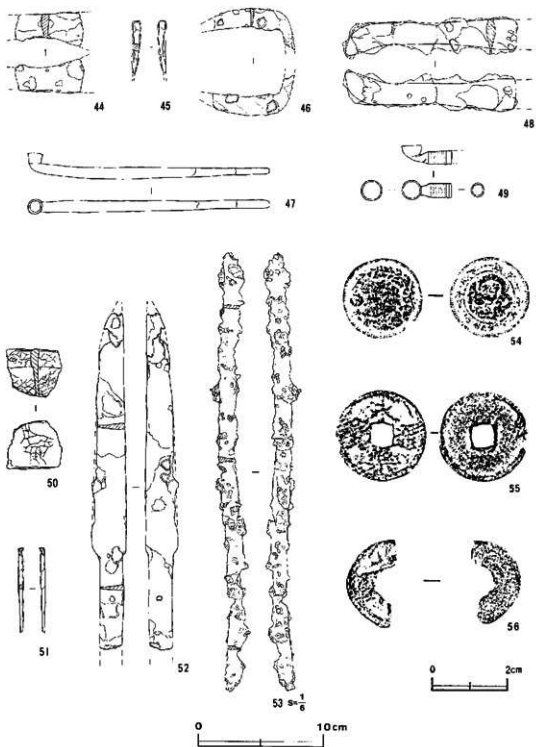
第413図 遺構外出土遺物実測・拓影図一



第414图 遺構外出土遺物実測図-2



第415图 遺構外出土遺物実測図-3



第416图 遺構外出土遺物実測・拓影図-4

遺構外出土器観察表

図版番号	器 種	径寸(cm)	器形の特徴及び文様	丁 法 の 特 徴	粘土・色調・成成	備 考
第413図 1	甕 新生式土器	B (2.9)	底部から胴下半部にかけての破片。平底。胴部は外反気味に立ち上がる。胴部外面には付加糸の縄文が施されている。	均等に彫割が密しく、彫形技法不明。	砂粒 橙黄色 青緑	5% P82 B11 _h
		C 6.4				
2	甕 新生式土器	B (2.2)	底部から胴下半部にかけての破片。平底で、底部外面には木葉文が見られる。胴部は外知して立ち上がる。胴部外面には付加糸の縄文が施されている。	内面はナダ彫形。	砂粒・バミス 橙黄色 普通	10% P100 DML
		C 5.3				
3	壺形土器 I 師 器	A 19.6	胴中央部以下は欠損。胴部は外傾して立ち上がり、口縁部は複合口縁で、口縁部の中位から外反して開く。	内・外面とも縄ナダ彫形後、赤彩。	砂粒 暗赤褐色 普通	20% P80 E11 _d
		B (10.0)				
4	壺形土器 土師器	A (18.4)	平底。胴部は内傾して立ち上がり、最大径を中位に持つ。口縁部は胴部から「く」の字状に外反して開く。	内・外面とも口縁部は縄ナダ、胴部は縄ナダ彫形。	工段・バミス 明赤褐色 普通	60% P79 E11 _d
		B 15.6				
		C 5.4				
5	壺形土器 土師器	B (3.7)	底部から胴下半部にかけての破片。平底。胴部は内反気味に立ち上がる。	内・外面とも縄ナダ彫形。	砂粒・バミス にぶい変色 普通	5% P81 E11 _h
		C 7.8				
6	ミニチュア 土師器	A (5.8)	平底。胴部は内傾して立ち上がり、最大径を下部に持つ。口縁部は胴部から「く」の字状に外反して開く。	外面はナダ彫形。内面は口縁部がナダ、胴部は縄ナダ彫形。	砂粒 にぶい橙黄色 普通	90% P97 E7 _l
		B 7.6				
		C 3.8				
7	壺形土器 土師器	A 8.3	口部は欠損。口縁部は細く、狭やかに外反して開く。口縁部は上縁が内傾し、断面三角形を呈する。	巻き上げ成形。内・外面ともナダ彫形。	細砂 明赤褐色 普通	20% P98 D11 _h
		B (12.0)				
8	壺形土器 土師器	B (14.3)	半部状に形成した2個体を接合したと考えられる割部で、内傾して立ち上がる。自然熱が特徴。	水洗き成形。内面はナダ彫形。	細砂 褐紅色 普通	30% P92 D11 _g
		B (4.8)	胴部片。胴部はほぼ垂直に立ち上がる。胴部との間に接合痕を明確に残す。	巻き上げ成形。外面はナダ彫形。	細砂 褐紅色 普通	5% P91 D11 _g
10	皿 土師製土器	A 7.9	平底。体部は器厚を減じながら外反気味に立ち上がる。口縁部や口縁部の内・外面の一部にターム状の付着物。	水洗き成形。体部は内・外面とも縄ナダ彫形。底部は回転未切り。	砂粒 にぶい橙黄色 普通	90% P96 D10 _c
		B 2.4				
		C 3.5				
11	皿 土師製土器	A 12.1	平底。体部は器厚を減じながら外反して開く。外面に弱いワグロ痕が残る。	水洗き成形。体部は内・外面とも縄ナダ彫形。底部は回転未切り。	砂粒 にぶい変色 普通	70% P78 D10 _h
		B 4.2				
		C 4.8				
12	皿 土師製土器	A (5.8)	平底。体部は器厚が厚く、外傾して開く。	体部は内・外面ともナダ彫形。底部は回転未切り。	砂粒・バミス にぶい褐色 普通	50% P99 D10 _d
		B 1.9				
		C 2.9				

図版番号	名称	法量(cm)	面形の特徴及び文様	手法の特徴	胎土・色紙・組成	備考
第412回 13	遺 土器 土器	A(9.2)	平底、作部は器厚を減しながら	水筒き成形。体部は内・外面とも 横ナズ彫形。底部は内縁未切り。	砂質 に白い褐色 普通	30% P77 D10e,
		B 3.1	外傾して立ちこがり、中で外			
		C 4.4	反して開く。口縁部内面の一部 に煤と混われる黒色の付着物。			
14	内耳土器	A(76.0) B(9.5)	底部は欠損。体部は内側50%に 同じで立ち上がる。口部は平 直で、内側におすかに突出する。	口部部、外・内面ともナズ彫形。	砂質・黄褐色 黒褐色 普通	20% P110 BT

遺構出土形象埴輪観察表

図版番号	編治・部位	形、型、成形法等の特徴	胎土、焼成等の特徴	色紙	備考
第412回 15	形象埴輪 顔	破片で、耳は欠損しているが孔が対称される。 口は一對で際状工具で木の葉形に穿孔している。口は鼻と一段でははく開いている。外側ハケ目整形後、ナズを加えているが一部にハケ目裏が残っている。内面は輪郭線が明確に残り、横ナズ彫形をしている。	砂質・土質を多量、 小礫・スコリアを極 少量含む。焼成は良好。	褐色	DP95 表層
16	人物埴輪 粟豆良	中央で断面形はほぼ楕円形の粘土棒の下端を、指で押しつけて球に作った後ナズを掻いている。接合部から推定すると左側は粟豆良である。	細砂・黄砂を多量、 小礫を少量含む。焼 成は普通。	褐色	DP264 C4b,
17	人物埴輪 顔	顔で顔と接合する部分の左側の破片である。接合部が不明瞭ながら確認できる。唇付近から右前方へやや曲がっている。 全面横ナズ彫形をした後、ナズ整形。	砂質・黄砂を多量に含 む。焼成は良好。	褐色	DP95 D10d,
18	人物埴輪 刀	人物埴輪の左腕部が着装されていたと推定される。現存部は物の部分である。断面形はほぼ円形で、柄頭は楕円形であったと思われるが、端部が欠損している。 今面比較的に空なナズ彫形。外側に当たる部分はナズの跡が火責となって残りがあがる。	細砂・黄砂を多量、 小礫を少量含む。焼 成は普通。	褐色	DP265 E7b,

第10節 土器以外の出土遺物

本節では、当遺跡から出土した土器以外の遺物について、土製品、石器・石製品、古銭、金属製品に分けて、それぞれの法量及び特徴等を一覧表にまとめて掲載した。

1 土製品

表13 土製品一覧表

図版番号	器 種	法 量 (cm)		孔 徑 (cm)	重 量 (g)	出土地点	封套番号	備 考
		最大長	最大幅					
第7図10	紡錘車	5.5	5.5	0.6	55.7	SI-1	DP1	
第15図9	紡錘車	4.0	4.2	0.6	39.5	SI-5	DP2	
第19図6	管状土器	4.4	3.9	0.55	63.8	SI-7	DP3	
第23図5	紡錘車	5.2	5.1	0.6	55.2	SI-9	DP5	
第115図4	管状土器	2.9	2.4	0.5	21.6	SI-14	DP6	
第115図5	球状土器	3.3	3.5	0.8	37.1	SI-14	DP7	
第115図6	球状土器	3.1	3.1	0.7	27.1	SI-14	DP8	
第115図7	球状土器	3.4	3.3	0.4	31.7	SI-14	DP9	
第115図8	管状土器	2.9	2.2	0.4	18.7	SI-14	DP10	
第115図9	管状土器	3.5	3.0	0.55	31.4	SI-14	DP11	
第115図10	球状土器	3.3	3.3	0.6	33.0	SI-14	DP12	
第143図4	球状土器	2.2	2.3	0.5	12.9	SI-32	DP13	
第145図4	支 脚	15.2	8.3		77.9	SI-33	DP78	
第218図6	球状土器	3.6	3.4	0.6	39.8	SI-35	DP218	
第147図4	球状土器	3.3	3.1	0.7	34.2	SI-36	DP14	
第224図20	球状土器	3.1	3.2	0.7	28.0	SI-45	DP15	
第234図21	球状土器	2.9	3.0	0.8	25.5	SI-45	DP16	
第224図22	球状土器	3.0	3.0	0.7	23.1	SI-45	DP17	
第224図23	球状土器	3.4	3.1	0.7	22.1	SI-45	DP18	
第224図24	球状土器	3.5	3.1	0.9	29.2	SI-45	DP19	
第153圖2	不 明	6.1	3.1	-	95.1	SI-47	DP19	
第227図15	球状土器	2.5	2.7	0.7	17.4	SI-48	DP20	

图版序号	器 型	法 量 (cm)		T. 厚 (cm)	重 量 (g)	出土地点	台帐编号	备 考
		最大长	最大幅					
第227图8	球状土铎	2.7	2.9	0.8	21.1	SI-48	DP21	
第227图16	球状土铎	2.7	2.8	0.7	18.1	SI-48	DP20	
第227图17	球状土铎	2.2	2.1	—	(4.9)	SI-48	DP221	一部破损
第229图10	球状土铎	2.8	2.5	0.6	22.4	SI-49	DP22	
第233图18	球状土铎	2.9	3.0	0.9	24.5	SI-51	DP22	
第233图19	球状土铎	3.0	2.8	0.9	21.6	SI-51	DP23	
第233图20	球状土铎	3.0	2.8	—	(9.6)	SI-51	DP24	一部破损
第233图21	球状土铎	2.9	3.4	0.7	26.1	SI-51	DP25	
第233图22	球状土铎	2.4	2.6	0.6	18.3	SI-51	DP26	
第233图23	球状土铎	2.5	2.7	0.6	18.2	SI-51	DP223	
第157图2	球状土铎	2.6	2.8	—	(9.4)	SI-52	DP27	一部破损
第157图3	球状土铎	2.6	2.9	0.4	21.3	SI-52	DP28	
第157图4	球状土铎	2.6	2.4	—	(5.2)	SI-52	DP224	一部破损
第157图5	球状土铎	2.8	1.9	—	(5.1)	SI-52	DP225	一部破损
第166图6	球状土铎	3.3	4.1	0.6	53.4	SI-69	DP29	
第168图2	球状土铎	3.2	3.2	0.8	32.0	SI-72	DP30	
第77图11	勾 玉	2.2	0.9	0.2	(3.0)	SI-76	DP31	
第177图7	球状土铎	2.8	3.0	0.7	28.7	SI-85	DP32	
第177图8	球状土铎	2.8	3.1	0.8	25.7	SI-85	DP33	
第180图2	球状土铎	2.6	3.3	0.9	27.1	SI-86	DP34	
第230图4	球状土铎	2.6	2.9	0.7	19.4	SI-88	DP36	
第239图7	球状土铎	2.7	2.6	—	(8.6)	SI-88	DP37	
第239图5	球状土铎	3.6	3.3	0.9	34.5	SI-88	DP38	一部破损
第239图6	球状土铎	2.6	2.6	0.7	14.9	SI-88	DP51	
第241图10	球状土铎	3.2	3.1	0.8	25.0	SI-90	DP39	
第241图11	球状土铎	3.4	3.4	0.9	34.3	SI-90	DP40	
第241图12	球状土铎	3.0	3.0	0.9	24.6	SI-90	DP41	
第241图13	球状土铎	3.4	3.9	0.8	38.9	SI-90	DP42	
第241图14	球状土铎	3.5	3.4	0.8	39.0	SI-90	DP43	
第241图15	球状土铎	3.1	3.3	0.8	31.3	SI-90	DP44	

图版序号	新 颖 类	法 量 (cm)		子 径 (cm)	重 量 (g)	出 土 层 位	台 帐 号	备 考
		最大径	最小径					
第241图16	球状土器	3.4	3.3	0.9	32.6	SI-90	DP45	
第241图17	球状土器	2.7	3.0	-	(11.8)	SI-90	DP46	一部破損
第241图18	球状土器	3.0	3.4	0.9	38.2	SI-90	DP47	
第241图19	球状土器	2.7	2.4	-	(7.6)	SI-90	DP48	一部破損
第241图20	球状土器	2.8	3.0	-	(13.3)	SI-90	DP49	一部破損
第241图21	球状土器	3.0	3.1	-	(14.2)	SI-90	DP50	一部破損
第184图9	管状土器	5.4	3.6	1.8	65.7	SI-91	DP52	
第184图10	管状土器	5.3	3.3	2.0	55.3	SI-91	DP53	
第194图14	纺锤形	5.3	5.4	0.9	60.3	SI-100	DP54	
第194图15	支 脚	13.7	8.9	-	598.8	SI-100	DP56	
第194图16	支 脚	11.4	7.9	-	93.0	SI-100	DP226	
第92图7	支 脚	8.2	5.6	-	100.8	SI-101	DP55	
第92图14	球状土器	3.3	3.1	0.7	28.2	SI-102	DP57	
第97图5	球状土器	2.5	2.4	-	(5.8)	SI-106	DP58	一部破損
第202图3	球状土器	2.8	3.0	-	(11.9)	SI-108	DP59	一部破損
第205图11	门 板	3.9	3.9	-	18.4	SI-111	DP60	
第99图13	球状土器	2.6	2.6	0.6	18.1	SI-113	DP61	
第99图12	纺锤形	2.7	3.6	0.6	36.4	SI-113	DP62	
第249图9	球状土器	2.9	3.1	0.5	27.4	SI-114	DP63	
第249图10	球状土器	3.0	3.1	0.7	24.0	SI-114	DP64	
第207图1	球状土器	2.5	2.6	-	(7.3)	SI-115	DP65	一部破損
第207图2	土器片断	3.7	3.8	-	25.2	SI-115	DP66	
第207图3	土器片断	3.9	3.6	-	21.5	SI-115	DP67	
第101图8	管状土器製品	7.7	8.0	-	167.2	SI-116	DP68	
第101图9	球状土器	2.0	2.0	-	(4.1)	SI-116	DP69	一部破損
第251图3	球状土器	2.7	2.7	0.45	14.8	SI-117	DP71	
第104图12	管状土器製品	25.0	8.1	-	808.4	SI-119	DP72	
第263图6	球状土器	2.7	3.0	0.6	23.2	SI-122	DP73	
第216图30	支 脚	6.1	7.4	-	140.9	SI-124	DP74	
第216图31	支 脚	12.8	10.6	-	660.7	SI-124	DP75	

試験番号	容 器	法 量 (cm)		孔 徑 (cm)	腐 敗 (g)	出土地点	台帳番号	備 考
		最大径	最大幅					
第216回23	支 脚	11.2	9.1	-	775.5	SI-124	DP76	
第217回33	支 脚	14.8	12.3	-	1026.7	SI-124	DP77	
第217回34	支 脚	2.8	3.2	-	41.2	SI-124	DP82	
第217回35	勾 玉	2.6	1.1	0.2	4.3	SI-124	DP96	
第269回 5	珠 状 土 珠	2.6	2.6	0.8	13.7	ST-3	DP35	
第269回18	珠 状 土 珠	3.0	2.8	0.45	19.8	TM-1	DP98	一部破損
第269回19	珠 状 土 珠	2.6	2.6	0.6	16.2	TM-1	DP99	
第269回20	珠 状 土 珠	2.5	2.5	0.53	17.4	TM-1	DP100	
第283回 1	紡 錘 車	6.1	3.3	-	(38.5)	TM-4	DP101	一部破損
第288回 1	珠 状 土 珠	2.4	2.4	0.55	13.0	TM-7	DP102	
第290回 4	紡 錘 車	3.7	5.0	-	(51.4)	TM-8	DP103	一部破損
第311回22	珠 状 土 珠	4.0	3.9	0.9	52.8	TM-17	DP104	
第321回 2	珠 状 土 珠	3.6	3.4	0.7	31.4	TM-23	DP106	
第323回 3	土 器 片 鉢	4.0	3.0	-	15.4	TM-24	DP107	
第325回 1	紡 錘 車	6.2	3.4	-	(38.2)	TM-25	DP105	一部破損
第330回 2	珠 状 土 珠	3.1	2.7	-	(12.2)	TM-27	DP108	一部破損
第332回 1	珠 状 土 珠	2.6	3.0	0.6	15.8	TM-28	DP109	
第337回 2	珠 状 土 珠	3.0	3.1	0.6	26.2	TM-30	DP111	
第341回 2	珠 状 土 珠	2.4	2.8	0.7	16.1	TM-32	DP112	
第349回12	珠 状 土 珠	3.6	3.8	0.9	37.7	TM-33	DP113	
第380回 2	珠 状 土 珠	3.2	3.6	0.65	38.2	SK-84	DP79	
第376回18	珠 状 土 珠	3.1	3.2	0.8	39.2	SK-128	DP80	
第384回 5	不 明	5.7	2.4	-	18.7	SK-176	DP81	
第406回 6	珠 状 土 珠	2.9	3.0	-	(11.9)	網 7 (SD-1)	DP82	
第414回19	珠 状 土 珠	2.8	3.3	0.55	26.1	D10c,	DP83	
第414回20	珠 状 土 珠	2.8	2.9	0.6	21.3	D10f,	DP84	
第414回24	珠 状 土 珠	2.4	2.9	0.3	25.1	D10g,	DP86	
第414回21	珠 状 土 珠	2.7	2.7	0.5	19.6	Aトレンチ	DP87	
第414回25	珠 状 土 珠	5.2	3.9	-	(34.9)	Gトレンチ	DP88	

図版番号	器 種	規 量 (cm)		寸 法 (cm)	重 量 (g)	出土地点	台帳番号	備 考
		最大長	最大幅					
第414図22	球状土器	3.3	2.9	0.55	30.0	Gトレンチ	DP90	
第414図23	球状土器	2.8	2.8	—	(10.8)	Iトレンチ	DP91	
第414図26	管状土器	2.1	2.9	0.4	22.6	Iトレンチ	DP88	

2 石器・石製品一覧表

表14 石器・石製品一覧表

図版番号	器 種	規 量 (cm)			重 量 (g)	石 質	出土地点	台帳番号	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第7図11	砥 石	9.8	3.1	1.8	87.3	砂岩	SI-1	Q1	
第7図12	砥 石	5.9	5.4	0.3	40.6	砂岩	SI-1	Q2	
第7図13	砥 石	7.0	3.1	2.7	131.0	粘板岩	SI-1	Q3	
第19図7	砥 石	4.8	3.5	1.2	61.4	砂岩	SI-7	Q4	
第121図4	石 錐	2.9	1.6	0.8	1.1	黒曜石	SI-17	Q5	
第141図11	浮 子	5.7	5.3	3.6	21.9	輝石	SI-31	Q85	
第145図5	浮 子	5.8	3.4	2.9	15.3	輝石	SI-33	Q6	
第147図6	砥 石	10.9	6.9	4.6	627.3	砂岩	SI-36	Q6	
第147図5	不 明	7.3	3.0	2.6	34.9	粘岩	SI-36	Q7	
第38図14	砥 石	10.6	2.6	1.2	63.8	泥岩	SI-37	Q9	
第38図15	砥 石	7.9	4.6	2.0	113.9	砂岩	SI-37	Q10	
第149図4	浮 子	8.4	6.7	3.3	40.3	輝石	SI-39	Q11	
第211図7	紡錘車	4.1	4.3	1.6	39.6	滑石	SI-42	Q12	
第47図16	砥 石	8.0	7.4	3.2	327.3	砂岩	SI-43	Q13	
第47図17	砥 石	10.6	9.2	4.3	686.9	砂岩	SI-43	Q14	
第47図18	石 錐	24.8	19.2	2.7	1916.4	砂岩	SI-43	Q15	
第224図18	紡錘車	4.7	4.9	1.0	34.0	滑石	SI-45	Q16	
第224図19	紡錘車	4.5	4.6	1.1	34.0	滑石	SI-45	Q17	
第227図19	刮 玉	1.8	1.1	0.4	0.8	滑石	SI-48	Q18	
第229図11	石製校済品	2.2	1.8	0.3	2.1	滑石	SI-49	Q19	
第162図1	砥 石	4.8	2.5	2.9	56.0	粘板岩	SI-66	Q20	

同級番号	群 種	流 量 (cm)			重 量 (g)	石 質	山上地点	台帳番号	備 考
		最大径	最大幅	最大厚					
第168図1	英 石	6.1	3.9	1.5	51.6	粗砂岩	SI-67	Q21	
第169図5	浮 子	5.6	3.3	7.0	19.9	礫石	SI-69	Q22	
第171図3	硃 石	15.7	7.5	4.6	916.4	砂岩	SI-70	Q23	
第171図4	石 皿	25.5	18.6	6.5	5892.3	砂岩	SI-70	Q24	
第174図10	磨 石	8.8	7.0	4.2	407.9	砂岩	SI-73	Q25	
第170図7	浮 子	10.4	5.8	3.6	73.8	礫石	SI-75	Q26	
第174図5	硃 石	10.3	4.2	5.8	462.5	砂岩	SI-82	Q27	
第84区1	浮 子	8.1	6.2	3.3	51.4	礫石	SI-83	Q28	
第177図9	管 玉	2.3	0.8	0.8	2.6	燧石	SI-85	Q29	
第177図10	管 玉	1.4	0.5	0.5	1.0	燧石	SI-85	Q30	未製品
第177図11	管 玉	1.3	0.4	0.4	0.5	燧石	SI-85	Q31	
第178図14	円 板	2.2	1.1	0.3	7.1	燧石	SI-85	Q32	
第178図15	勾 玉	1.3	0.7	0.4	0.6	燧石	SI-85	Q33	未製品
第178図16	勾 玉	1.3	1.0	0.3	0.6	燧石	SI-85	Q34	未製品
第177図12	管 玉	2.2	0.6	0.6	1.9	燧石	SI-85	Q35	
第177図13	管 玉	2.3	0.7	0.7	2.0	燧石	SI-85	Q36	未製品
第241図22	砥 石	7.2	6.0	1.2	74.2	泥岩	SI-90	Q37	
第241図23	防 鏽 車	4.9	5.3	1.4	48.4	燧石	SI-90	Q38	
第241図24	管 玉	1.2	0.5	0.5	0.4	燧石	SI-90	Q39	
第88区6	防 鏽 車	3.8	4.2	1.4	25.2	燧石	SI-92	Q40	
第90区4	磨 石	7.4	5.6	2.9	189.4	砂岩	SI-98	Q41	
第199図17	砥 石	31.2	20.0	16.3	17.1(kg)	砂岩	SI-100	Q42	
第198図3	管 玉	2.8	0.6	0.6	1.4	燧石	SI-104	Q43	
第198図4	浮 子	7.8	5.5	5.4	60.0	燧石	SI-104	Q44	
第245図7	防 鏽 車	4.8	4.9	1.4	35.9	燧石	SI-105	Q45	
第249図11	石 弁	5.8	2.3	1.4	31.1	シルト岩	SI-114	Q47	
第104図15	磨 石	8.4	6.4	5.6	392.1	砂岩	SI-119	Q48	
第104図14	硃 石	8.7	4.9	4.1	246.1	砂岩	SI-119	Q49	
第104図13	砥 石	8.0	4.1	3.8	336.0	燧石+燧岩	SI-119	Q50	
第106図4	砥 石	12.5	5.5	3.4	325.5	泥岩	SI-120	Q51	

図説番号	番 種	規 格 (cm)			重 量 (g)	石 質	出土地点	台帳番号	備 考
		最大長	最大幅	最大厚					
第258図9	勾 玉	6.2	3.7	1.7	56.0	滑石	SI-122	Q46	
第298図22	石 鏃	1.9	1.4	0.3	0.4	黒曜石	TM-12	Q73	
第298図23	穴 明	12.1	5.2	0.7	61.0	砂岩	TM-12	Q74	
第311図33	砥 石	6.4	3.0	2.7	88.9	凝灰岩	TM 17	Q56	
第311図34	ナ イ フ	5.1	3.0	0.45	9.7	頁岩	TM-17	Q75	
第323図4	砥 石	8.0	2.6	2.4	59.1	粘板岩	TM 24	Q57	
第341図3	有 孔 円 板	2.4	2.4	0.3	4.0	滑石	TM-32	Q76	
第348図44	石 斧	8.6	4.3	1.5	95.0	凝岩	TM-33	Q58	
第348図43	砥 石	7.8	2.0	3.9	43.1	砂岩	TM-33	Q77	
第362図4	砥 石	4.1	2.4	1.8	31.8	凝灰岩	TM-35	Q59	
第368図3	砥 石	26.0	20.0	13.2	9.1	砂岩	SK-18	Q53	
第376図19	割 片	5.5	1.9	0.9	10.9	黒曜石	SK-156	Q52	
第397図2	砥 石	9.3	3.5	2.1	91.6	粘板岩	SD 8	Q79	
第397図1	砥 石	9.5	3.1	3.4	112.3	粘板岩	SD-8	Q80	
第397図4	砥 石	4.9	4.6	3.1	78.7	砂岩	SD 8	Q81	
第397図5	砥 石	4.7	1.5	3.3	39.3	粘板岩	SD-8	Q82	
第397図3	砥 石	3.2	3.1	0.9	11.6	砂岩	SD-8	Q83	
第397図6	石 斧	7.5	8.3	4.2	353.9	硬砂岩	SD-19	Q55	
第406図7	砥 石	7.2	4.5	1.6	78.7	粘板岩	類3 (SD13)	Q54	
第406図1	勾 玉	2.4	1.8	0.7	4.9	碧玉	SA 1	Q60	
第414図27	砥 石	8.0	4.1	2.3	101.2	砂岩	B46	Q61	
第414図28	砥 石	4.5	3.0	1.3	25.2	凝灰岩	C60	Q84	
第414図29	砥 石	7.5	2.6	2.6	70.1	凝灰岩	C106	Q85	
第414図30	砥 石	8.0	2.2	3.4	92.0	凝灰岩	D106	Q62	
第415図34	砥 石	9.9	5.8	3.4	290.3	粘板岩	D106	Q67	
第415図37	石 鏃	1.7	1.3	0.3	0.6	黒曜石	D106	Q63	
第415図38	石 鏃	1.5	1.2	0.2	0.4	チャート	D106	Q64	
第415図39	石 鏃	2.3	1.5	0.3	0.9	チャート	F106	Q71	
第415図40	石 鏃	1.7	1.0	0.2	0.2	黒曜石	F106	Q72	
第414図31	砥 石	5.4	1.5	3.5	30.3	凝灰岩	Hトレンテ	Q78	

図版番号	種類	法量 (cm)			重量 (g)	石質	出土地点	古銭番号	備考
		最大長	最大幅	最大厚					
第414図32	磁石	8.5	2.6	2.9	77.5	凝灰岩	Gトレンチ	Q66	
第414図33	磁石	9.0	2.9	5.4	382.5	砂岩	Kトレンチ	Q68	
第415図35	石皿	11.6	8.5	3.0	345.3	凝灰岩	Kトレンチ	Q69	
第415図36	石斧	4.6	3.5	1.8	55.3	砂岩	Mトレンチ	Q70	

3 古銭

表15 古銭一覧表

図版番号	名称	素材	初鑄年 (西暦)	鑄造地	出土地点	古銭番号	備考
第209図21	寛永通寶	銅	寛保2年 (1742)	日本	TM-1	M45	
第209図22	寛永通寶	銅	寛永13年 (1636)	日本	TM-2	M46	
第209図23	寛永通寶	銅	寛永13年 (1636)	日本	TM-1	M47	
第283図2	文久永寶	銀	文永3年 (1860)	日本	TM-4	M48	
第303図3	聖徳元宝	銅	建中靖国元年 (1101)	北宋	TM-16	M49	
第312図36	寛永通寶	銅	寛永18年 (1643)	日本	TM-17	M51	
第312図37	洪武通寶	銅	洪武元年 (1368)	明	TM-17	M52	
第336図2	寛永通寶	銅	寛保元年 (1741)	日本	TM-29	M53	
第354図2	永樂通寶	銅	天正15年頃 (1587)	日本	TM-36	M54	
第376図24	寛永通寶	銅	寛保元年 (1741)	日本	SK-48	M55	
第416図51	平紙	銅	明治17年 (1884)	日本	Cトレンチ	M56	
第416図55	永樂通寶	銅	天正15年頃 (1587)	日本	表層	M57	
第416図56	日美口二	銅	—	—	B75	M58	欠損

4 金属製品

表16 鉄製品一覧表

図版番号	種類	材質	法量 (cm)			重量 (g)	出土地点	古銭番号	備考
			最大長	最大幅	最大厚				
第147図7	錠	鉄	9.8	1.3	0.2	12.8	SI-36	M6	断面長方形。金体的に薄平。
第147図8	錠	鉄	22.0	2.2	0.5	123.4	SI-36	M7	断面長方形。

図録番号	新様	材質	法 規 (cm)			重量(g)	出土地点	内装番号	備 考
			最大長	最大幅	最大厚				
第261図35	鉄線	鉄	7.7	1.0	0.5	6.8	TM-3	M29	刀身の断面形状は長形で先端部は鋭角、基部の断面形状は鋭角。
第281図36	短刀	鉄	14.6	4.4	0.8	73.2	TM-3	M30	断面形状は三角。刀身の一端で両端は欠損。
第294図1	不明	銅	最大外径「7.5」	最大内径「5.9」	0.6	35.4	TM-11	M31	断面円形。環状を呈する。
第296図24	楯	鉄	7.1	1.3	0.3	4.8	TM-12	M32	近種角形。基部は折れ曲がる。
第312図35	不明	鉄	12.2	11.1	0.2	159.9	TM-17	M34	断面形状が浅い形状を呈する部分に半円形の短い柄が接着。
第350図46	短刀	鉄	25.4	3.6	0.8	263.9	TM-33	M35	断面三角形。基部は欠損。
第349図45	鎌	鉄	10.0	4.1	0.7	61.3	TM-33	M37	先端部及び柄装着部は欠損。
第376図20	衝	鉄	5.3	1.3	0.5	10.6	SK-85	M1	断面長方形。頭部は折れ曲がり、先端部は欠損。
第376図21	不明	鉄	18.4	0.9	0.6	26.6	SK-148	M3	断面円形。環状を呈する。
第376図22	不明	金銅	6.0	0.6	0.3	3.5	SK-148	M4	断面円形。先端部は鋭角。
第376図23	盤	鉄	6.9	2.2	0.3	10.5	SK-176	M5	先端部は欠損。
第409図2	短刀	鉄	6.5	1.7	0.5	13.0	SA-1	M39	断面長方形。基部。目釘穴2か所。
第409図3	短刀	鉄	8.1	3.5	1.0	39.9	SA-1	M40	断面三角形。刀身の一端で両端は欠損。
第409図4	不明	鉄	5.1	3.4	0.7	20.0	SA-1	M41	断面菱形。鋭角。
第409図5	短刀	鉄	3.4	3.2	0.5	10.9	SA-1	M42	刀身の一端。
第409図6	短刀	鉄	3.6	2.9	0.3	5.4	SA-1	M43	刀身の一端。
第415図41	鎌	鉄	9.5	4.4	0.4	53.1	AT	M9	先端部と柄装着部の一部は欠損。
第415図42	不明	鉄	6.9	5.1	0.7	69.5	BT(C10 ₆ ~C11 ₆)	M10	三角形状を呈する。健全か。
第415図43	不明	鉄	2.6	2.7	0.7	9.7	BT(C10 ₆ ~C11 ₆)	M12	断面菱形。鋭角。
第416図44	鉄	鉄	5.5	2.8	0.5	17.0	GT(D9 ₆ ~D9 ₆)	M13	先端部及び柄装着部は欠損。
第416図45	釘	鉄	4.2	0.8	0.5	3.8	HT(D10 ₆ ~D10 ₆)	M14	断面四角形。
第416図46	鎌 (小形)	鉄	3.2	6.5	0.2	7.8	D10 ₄	M20	先端部は欠損。
第416図47	短刀	鋼・銅	19.1	1.2		31.7	D10 ₆	M21	すべて金属製で、火皿及び後刀部に銅、鍍金は銅製。
第416図48	鎌	鉄	13.9	2.9	0.7	0.7	E11b	M22	柄装着部は欠損。
第416図49	短管	銅	3.8	1.6		6.4	表探	M23	厚首部。火皿は塊状を呈す。
第416図50	不明	鉄	4.4	3.9	0.5	32	表探	M24	1枚薄片。鋭角。
第416図51	釘	鉄	6.8	0.4	0.3	3.3	表探	M25	近種四角形。基部は折れ曲がる。
第416図52	短刀	鉄	26.8	2.8	6.4	94.5	表探	M26	断面三角形。平造で切先をわずかに欠損。鎌心時代か。
第416図53	太刀	鉄	69.9	6.1	0.9	312.6	D12b	M27	断面三角形。編造で基部は欠損。鎌心時代か。

第4章 ま と め

当遺跡において検出された遺構は、竪穴住居跡（竪穴遺構を含む）124軒、掘立柱建物跡1棟、古墳35基、塚2基、堀7条、溝28条、土坑178基等である。竪穴住居跡及び竪穴遺構の内訳は、弥生時代51軒、古墳時代68軒、時期不明5軒である。なお、土坑には21基の粘土貼り土坑、12基の壁溝のある土坑、2基の地下式坑が含まれている。

遺物は、縄文時代早期の茅山式の土器片、弥生時代中・後期、古墳時代前・中期の土器及び土器片、古墳に伴う埴輪片等が出土している。その他、石器・石製品、土製品、鉄製品、陶磁器片及び古銭等が出土している。

以上のことから当遺跡は、断続的ではあるが縄文時代から古墳時代までは生活が営まれ、その後、古墳が築造され、さらに、中世には城館の一部として使用された複合遺跡であるといえる。

なお、調査の概要と各遺構・遺物等については前述したので、ここでは調査によって明らかになった事実と問題点について述べることにする。

第1節 弥生時代の住居跡と遺物

弥生時代の住居跡は、第1～10・23・25・29・30・34・37・38・40・41・43・44・53・54・55・58・59・61・62・63・64・65・68・70・73・74・76・79～81・83・84・92・98・101・102・106・113・116・119・120・125号住居跡の51軒である。以下、これらの住居跡について検討してみたい。なお、第63号住居跡は壁等が削平されていて、ピットと炉の一部だけが検出され、正確な時期は不明であるが、当遺跡の5本の柱穴を残している住居跡と酷似していることから、該期のものの可能性のある住居跡である。

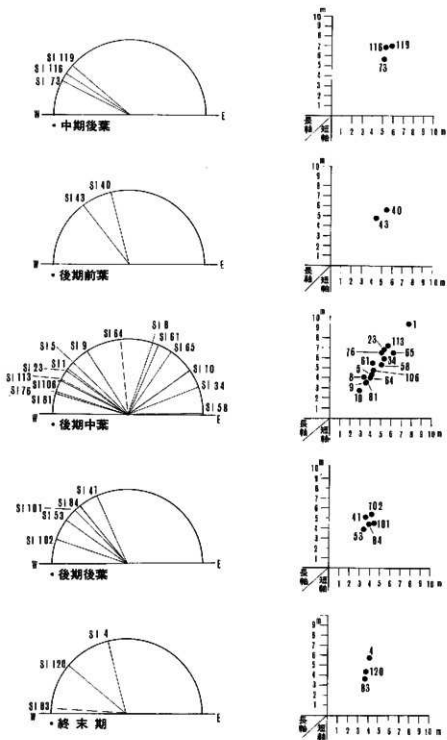
当遺跡の住居跡の時期を、出土土器から検討してみると5つの時期に分けることができる。最初は、中期後葉に位置づけられる第73・116・119号住居跡の3軒である。これらの住居跡は、千葉県内で出土している宮ノ台式土器の影響を受けている長頸甕と、口唇部が頸頭の押圧によって小波状を呈する甕が、床面もしくは床面直上から出土している。次いで、後期前葉に位置づけられる第40・43・79号住居跡の3軒である。これらの住居跡からは、南関東系の久ヶ原式土器の影響を受けて、胴部を二本の沈線で山形に区画し、区画内に方向を変えながら縄文を充填し、その山形文の上下へ朱を施している朱彩壺片が床面から出土している。次に、後期中葉に位置づけられる第1・5・8～10・23・34・58・61・64・65・76・81・106・113号住居跡の15軒である。これらの住居跡からは、茨城県の長岡式土器の影響を受けている複合口縁で、頸部を無文帯、もしくはそこへ櫛描文を施している土器または土器片が、床面もしくは床面直上から出土している。

続いて、後期後葉に位置づけられる第41・53・84・92・101・102号住居跡の6軒である。これらの住居跡は、長岡式系と上稲吉式の影響を受けている土器を出土している。最後に、弥生時代終末期に位置づけられる第4・83・120号住居跡の3軒である。これらの住居跡は、十王台式土器と併行期と思われる、上稲吉式土器の影響を受けた竈を1～2個単位で貼付している土器または土器片を床面もしくは床面直上から出土している。また、出土土器が少なく正確には時期を特定できなかった住居跡は21軒である。

住居跡の1軒当りの占める面積を平均化してみると、中期後葉の住居跡は30.0㎡、後期前葉の住居跡は21㎡、後期中葉の住居跡は22.4㎡、後期後葉の住居跡は16.0㎡、後期後葉の終末期の住居跡は16.7㎡となり、中期の住居跡が大きく、後期になると次第に小さくなる傾向が見られる。また、51軒の住居跡の床面積を割合でみると、10㎡以下のものは51軒中5軒で10%、11～20㎡のものは51軒中18軒で36%、21～30㎡のものは51軒中16軒で32%、31㎡以上のものは51軒中7軒で14%、計測不可能なものは51軒中4軒で8%である。このことから当遺跡の1軒の住居跡面積は、およそ20㎡前後のものが平均的なものである。

住居跡の形態のうち貯蔵穴と5本目の支柱穴に注目してみると、以下のような共通する特徴が見られる。それらは、4本の支柱穴を持ち、さらに出入口に関すると思われる比較的浅くて小規模な5本目の支柱穴を持ち、この支柱穴と壁の間がやや凹んで、底面が良く締まった貯蔵穴を壁際に構築していることが第1・2・3・4・5・76・101・113号住居跡にみられる。また、前述の住居跡と似ているが、貯蔵穴の位置が5本目の支柱穴の横で、壁に接して付している第6・7・9・34・37号住居跡である。この特徴から推測すると、後期中葉（第1・5・9・34・76・113号住居跡）から後期後葉（第101号住居跡）、そして後期後葉の終末期（第4号住居跡）へとその特徴が受けつがれているものと思われる。なお、出土遺物から時期の特定ができなかった第2・3・6・7・37号住居跡も上記の特徴を有している。

住居跡を平面形状から見た場合、中期後葉の住居跡は第73号住居跡が隅丸方形、第116号住居跡が隅丸長方形、第119号住居跡が楕円形である。後期前葉の住居跡は第40・43号住居跡が隅丸方形、第79号住居跡は不明である。後期中葉の住居跡は、隅丸長方形が第1・8・61・76・106・113号住居跡の6軒で21軒のうち28%を占める。隅丸方形は第5・9・34・58・64・81号住居跡の6軒で21軒のうち28%である。その他、長方形が第23号住居跡、不整形が第65号住居跡である。このことから、後期中葉の住居跡の平面形は隅丸長方形と隅丸方形が大半を占めていることがわかる。後期後葉の住居跡は隅丸長方形が第41・102号住居跡の2軒、隅丸方形が第53・84号住居跡の2軒、不整形が第101号住居跡、不明が第92号住居跡である。後期後葉の終末期の住居跡は、隅丸長方形が第4・120号住居跡、隅丸方形が第83号住居跡である。以上のことから、弥生時代の住居跡の平面形は、大部分が隅丸の長方形もしくは方形であるといえる。



第417図 時期別別住居跡規模・長軸方向(弥生時代)

長軸方向をみると、中期後葉の住居跡は、3軒ともN-49°~62°-Wの方向を指している。後期前葉の住居跡は、第79号住居跡が不明であるが、他の2軒はN-14°-WとN-38°-Wを指している。後期中葉の住居跡は、9軒がN-6°~74°-W、5軒がN-18°~89°-Eを指し、1軒が円形のために方向が不明である。後期後葉の住居跡は、4軒がN-24°~71°-Wを指し、1軒が不整形のため、1軒が規模等が不明確のために不明である。後期後葉の終末期のものは3軒ともN-14°~84°-Wを指している。

地床炉についてみると、中期後葉、後期前・中・後・後葉の終末期の住居跡はいずれも1基の地床炉をもっており、床面の中央部付近に床面をそのまま使用したり、やや凹めて使用している。また、後期中葉の住居跡についても同様のことがいえるが、第61号住居跡は地床炉を2基設置している。炉を持たない第10・34・53・92号住居跡の4軒は、貯蔵穴も設置しておらず、他の住居跡と趣を異にしているものである。

火災に遭ったと思われる住居跡は、中期後葉のものは無く、後期前葉のものは3軒中1軒、後期中葉のものは15軒中5軒、後期後葉のものは6軒中3軒、後期後葉の終末期のものは無い。

出土遺物の分量についてみると、多・少の相違はあるが、全住居跡から弥生式土器片が出土しており、完形品も少量出土している。主なものとしては、壺・広口壺・甕・鉢・手掘り土器等である。出土量の多かった住居跡は、第1・5・6・7・9・40・43・65・73・76・92・101・102・113・119号住居跡で95点以上である。少なかった住居跡は、第8・10・25・29・38・61・74・79・80・81・83・98・125号住居跡で19点以内であった。また、壺・広口壺・甕・鉢、その他の個体数を住居跡ごとに一覧表(表18)にした。この表を見ると、大部分の住居跡から壺か広口壺が1個体以上出土していることがわかる。なお、中形の広口壺には煤が付着しており、煮炊に使用したものと思われる。また、それ以外の貯蔵用と思われる壺、大形の広口壺と甕を持つ住居跡の数が少ないことも特徴である。

その他、翼状土製品としたブーメラン状の土製品は、中期後葉とした第116・119号住居跡の炉内から出土している。第119号住居跡から出土したものは、2つに分かれていたが1つに復元出来て、長さ25cm、最大幅8.1cm、重量808.4gであった。第116号住居跡のものは破片であり、現存長7.7cm、最大幅8.0cm、重量167.2gである。これらの上製品は五徳の支脚のようなものか、炉の囲いのなものか、枕石のなものと思われるが、数や形からすれば支脚や炉の囲いでは数が足りなく形も異様で用を足さないとと思われる。炉内に置いて薪等を効率良く燃やすために置かれた枕石の上製品と考えるのが妥当と思われる。なお、当遺跡の西側5.9mにある成沢遺跡の古墳時代前期の第12号住居跡から出土した翼状土製品(現存長20.4cm・最大幅8.2cm)が同様のものと思われる。

紡錘車は、石製のものが第92号住居跡から1点(古墳時代の5軒の住居跡から6点)、土製のもの

のが第1・5・9・113号住居跡から各1点（古墳時代の住居跡から1点）が出土している。このことから、後期中葉の住居跡では、土製品の紡錘車が主流を占めていたことがわかる。また第25号住居跡から出土した土器の底部には、布目痕が残っていることから織物が存在していたことが裏づけられる。

土鍾は、球状土鍾が第102・106・113・116号住居跡の4軒から各1点（古墳時代の住居跡は21軒から55点）、管状土鍾は第7号住居跡から1点（古墳時代の住居跡2軒から5点）が出土している。

浮子は、第83号住居跡から1点（古墳時代の住居跡6軒から各1点）が出土している。

土器片鍾は、弥生時代の住居跡からの出土はなく、古墳時代の住居跡1軒から2点が出土している。このことから、上記の3種類の遺物が漁業に関するものであるとすれば、当遺跡の弥生時代は、古墳時代よりも遺物の比較において、漁業に関する生業は少なかったと推測される。

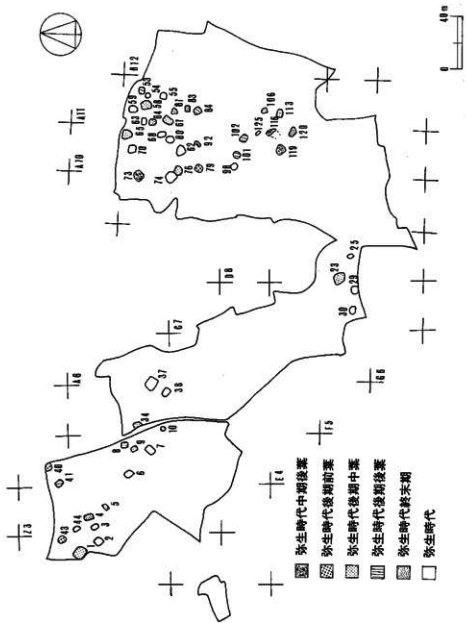
砥石は5軒から8点、石皿は第43・70号住居跡から各1点、凹石は第43号住居跡から1点が出土している。

以上の事柄を整理してみると、中期後葉の3軒の住居跡は、宿二ノ谷の東側台地にあつて当遺跡内では比較的大きい住居跡であり、遺物は宮ノ台式の系譜をもつ土器を使用している。また、複合口縁部をもつ土器は全く出土していないことから考えると、茨城県北方面からの影響が比較的薄い時期に生活を営んだものと考えられる。次いで、後期前葉の3軒の住居跡は、宿二ノ谷の東側台地に1軒、西側の台地に2軒が検出された。遺物は、南関東系の久ヶ原式土器と併行期に位置づけられる土器をもつ住居跡である。後期中葉の15軒の住居跡は、宿二ノ谷をはさむ両台地に検出された。遺物は、長岡式系の系譜をくむと思われる土器をもつ住居跡である。後期後葉の6軒の住居跡は、宿二ノ谷をはさむ両台地に検出された。遺物は、長岡式系と上稲吉系の系譜をくむと思われる土器をもつ住居跡である。後期後葉の終末期の3軒の住居跡は、宿二ノ谷の東側台地に1軒、西側の台地に2軒が検出された。遺物は、上稲吉式系の土器をもつ住居跡である。

以上、当遺跡を概観したが、弥生時代中期後葉から後期後葉の終末期にかけて、竜ヶ崎市東部の長峰台地において、南関東系と北関東系の土器様相を徐々に吸収しながら生活を展開し、弥生時代から古墳時代の前期へと受け継いでいったものと考えられる。

表17 住居跡内出土主要土器一覧表

住居跡 番号	山	工口 型	鉢	高径径と数 (数字は底部の径を表す)					数	住居跡 番号	山	工口 型	鉢	底径径と数 (数字は底部の径を表す)					数
				6.0cm 以下	6.0cm 台	7.0cm 台	8.0cm 台	9.0cm 台						10.0cm 以上	6.0cm 以下	6.0cm 台	7.0cm 台	8.0cm 台	
SI1		1		4.7			8.5		2	SI61						9.6	1		
2					6.8					62		1	1						
3										63									
4		1			6.8		8.0		2	64				6.2			1		
5						7.0			1	65		1							
6		1	1					8.8	17.9	2	68								
7					7.2	7.2	7.8		3	70			1	6.6			1		
8										73	1	1	3	7.7	7.7	8.1	4		
9					7.0	7.3	8.2		3	74									
10					7.2				12.2	2	76	1	1	6.2	6.5	6.7	0		
23							9.1		1	79									
25					7.7				1	80					8.4		1		
29										81									
30	1									83									
34		1								84									
37		1	1			7.6			1	92	1	1							
38										98									
49										101		1							
41		2								102		3		5.8	7.4	9.4	9.8		
43	1	1			6.2	7.1		9.0	12.8	4	106								
44										113									
53		1								116	2	1		4.4			1		
54										119									
55										120		1	1						
58			1							125									
59						8.3			1										



第418圖 弥生時代住居跡分布圖

第2節 古墳時代の住居跡と出土遺物

1. 土器について

当遺跡からは、縄文・弥生・古墳時代の土器、中世の土器や陶器等が出土しているが、本節においては、古墳時代の土器について、住居跡出土の資料を中心に、従来の編年資料等を参考にしながら全体を次の2群に分類し、その概略を述べることにする。

第1群 古墳時代前期の土器

第2群 古墳時代中期の土器

第1群土器（第419・420・421・422図）

第1群土器は、古墳時代前期の五領期に比定される土器群である。本群に属する土器は、51軒の竪穴住居跡と第3号竪穴遺構から出土したものであり、本節で扱う土器類のなかでは最も出土量の多いものである。

当遺跡出土の前期の土器をみると、壺形土器・台付壺形土器の口唇部に刻目が認められないものが主体であること、埴形土器と器台形土器が存在すること、高環形土器の脚部が「ハ」の字状を呈すること、ハケ目整形より篋ナデ整形が優勢であること等の特徴があげられる。これらのことから、当期は、器形の整形技法においては篋ナデ整形が主たる段階、埴形土器と器台形土器のセットが明らかになる段階、安定した器種を含む段階であり、五領期をⅠ～Ⅲ期に分けて考えてみると、五領Ⅱ期の範疇にあるものと思われる。しかし、該期の土器の中には、口唇部に刻目が施されている壺形土器、半球状の坏部に大きく裾広がりになる脚部がつく高環形土器など、古い様相の残るものが認められることから新旧の時間差が考えられるので、五領Ⅱ期をある程度時間的な幅をもたせて古い段階・新しい段階の2類に分類した。

第1類（第419・420図）

本類は、第12・15・28・31・46・56・69・75・82・91号住居跡・第3号竪穴遺構出土の土器を中心に、第13・17・36・94号住居跡出土の土器を補って設定した。器種としては、壺形土器・小形壺形土器・台付壺形土器・壺形土器・脚付壺形土器・埴形土器・高環形土器・器台形土器等がある。本類は、壺形土器の口唇部に刻目を有する点や、高環形土器の坏部が半球状のもの、及び口唇部に内崩しが認められること等から、古墳時代前期の中葉でも古い段階に位置付けられるものと思われる。

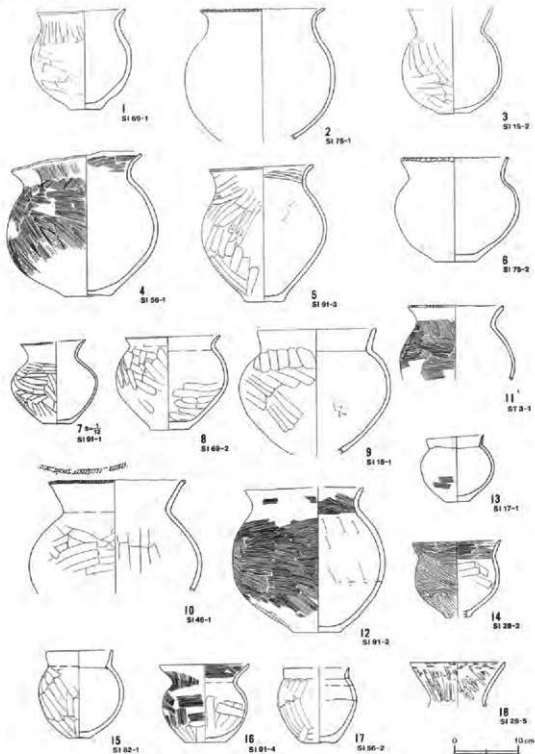
壺形土器は、胴部が球形のもの（1～4・12）、中位よりやや上の張りが強いもの（5～9）があり、口縁部は頸部から「く」の字状に外傾または外反して開くものである。口唇部には、古

い様相である刻目を有するもの(2・7・10・11)や内・外面からの押圧により小波状を呈するもの(6)が存在している。器外面は、篋ナデ整形を施すものが主体であるが、ハケ目整形のもの(4・11・12)もわずかに認められる。小形壺形土器には、胴部が球形状のもの(13~15)、中位よりやや上の張りが強いもの(16・17)がある。口縁部は、頸部から外反または外傾して開くもの他に、内彎して開くもの(15)や直立気味に開くもの(17)がある。器外面は、口縁部がナデ、胴部は篋ナデ整形が施されているものの他に、ハケ目整形のもの(14・16)もみられる。壺形土器(18・19)は、主に口頸部付近が出土し、いずれも半口縁で頸部から外反または外傾して開くものである。脚付壺形土器(20)は、球形の胴部に「く」の字状に上位で角度をかえて外傾する口縁部が付き、脚台部は「ハ」の字状に開くものである。器外面は、篋ナデ整形後に赤彩が施されている。台付壺形土器は、脚台部が欠損しているために壺形全体を窺うことはできないが、胴部が球形状のもの(21)と中位よりやや上の張りが強いもの(22~24)がある。口縁部は、頸部から外傾または外反して開くものであるが、(21)は口縁部に輪積痕を残す古い様相の残るものである。器外面には、口縁がナデ、胴部は篋ナデ整形のもの(22・24)とハケ目整形のもの(21・23)がみられる。壺形土器(25・26)は、平底の底部から口縁にかけて内彎して開くもので、壺外面は篋ナデ整形が施されている。高壺形土器には、壺部の下位に稜をもち内彎して大きく開くもの(27・28)、稜をもたずに内彎して開く半球状のもの(29・30)と中位から強く外反して開くもの(31)がある。口唇部に内削ぎが認められる(28)や壺部が半球状を呈する(29・30)は、古い様相が残るものである。脚部は、「ハ」の字状に開くもの他に、ラッパ状に大きく開いて裾広がりになる古い様相の残るもの(29)がみられる。器外面は、篋ナデや篋磨きの他に、ハケ目整形のもの(27)もみられる。器台形土器には、器受部が外傾して開くもの(32~34)と内彎気味に開くもの(35・36)がある。脚部は「ハ」の字状に開き、口径と脚部底径の比率は1:1.1~1.3、器受部高との脚部高との比率は1:2.8~4.8で、全体的に脚部高の高いものである。

第2類(第421・422図)

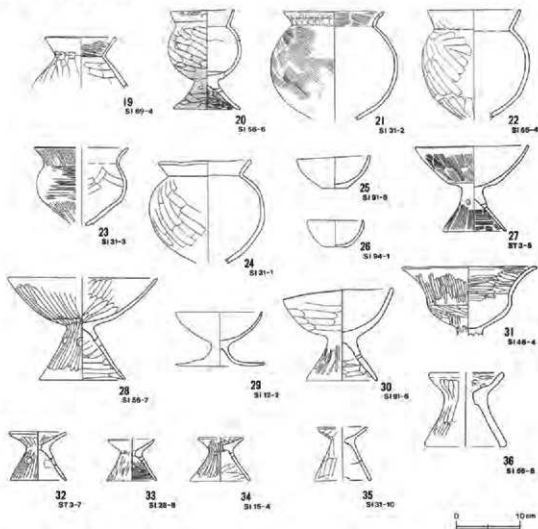
本類は、第16・18・24・33・39・50・85・100・111・123・124号住居跡出土の土器を中心に、第14・21・22・26・27・32・47・72・78・95・103・104・108・118号住居跡出土の土器を補って設定した。器種としては、壺形土器・小形壺形土器・台付壺形土器・壺形土器・小形壺形土器・壺形土器・壺形土器・高壺形土器・器台形土器・炉器台形土器・壺形土器等がある。なお、これらの中には、第1類のものと同伴している例も認められる。本類は、壺形の口唇部に刻目が認められないこと、高壺形土器の脚部が「ハ」の字状を呈していること、壺形土器と器台形土器が存在すること、器種も多種で安定した段階であることなどから、古墳時代前期の中葉でも新しい段階に位置付けられるものと思われる。

第1群土器第1類-1



第419圖 土器分類圖(1)

第1群土器第1類-2



第420図 土器分類図(2)

変形土器は、胴部が球形状で、口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開くものである。器外面は、全体にハケ目整形が施されるもの(37~40)とナデ整形によってハケ目が部分的に消されるもの(41~43)がみられる。(43)は、器外面に赤彩が施されているものである。小形変形土器(44)は、胴部の中位よりやや上の張りが強いもので、口縁部は頸部から「く」の字状に外反して開くものである。器外面は、篋磨き整形が施されている。台付変形土器には、胴部が球形のもの(45・46)と中位よりやや上に最大径をもつもの(47)があり、口縁部は頸部から外反して開き、脚台部は「ハ」の字状に開くものである。器外面は、全体にハケ目整形が施されている。変形土器には、胴部が球形のもの(48・49)とやや下膨れのもの(50・51)がある。口縁部は複

合口縁が主体であり、頸部から「く」の字状に外傾するもの(48)や外反するもの(49)の他に、頸部が垂直気味に立ち上がり口縁部で外傾して開くもの(50~52)がみられる。(53)は、有段口縁を呈するものである。器外面は、主に口縁部がナデ、頸部はナデや寛磨き、胴部は寛ナデ整形が施されている。小形壺形土器には、胴部が扁平な球形のもの(54・55)と球形のもの(56)があり、口縁部は、頸部から「く」の字状に外傾して開くもの(56)と垂直気味に外反して開くもの(54)がある。器外面は、寛ナデ整形が施されている。壺形土器は、いずれも平底の底部を有するもので、口縁部にかけて内彎して開くもの(57・58)、口縁部で外反して開くもの(59)がある。器外面は、寛磨き・寛ナデ整形が施されている。埴形土器は、出上量で器種全体に占める割合の高い器種である。胴部は、扁平な球形のもの(60・61)、胴部の上位が強く張るもの(62)、内彎して立ち上がるもの(63・64)の3種類があり、口縁部は、頸部から内彎して開くものと「く」の字状に外傾して開くものがある。器外面は、主に寛磨き整形が施されている。高坏形土器は、坏部の下位に稜をもち内彎して大きく開くもの(65~67)が主体であるが、稜をもたないもの(68)もある。脚部は「ハ」の字状に開くものが主体であるが、ラップ状に開き裾広がりになる古い様相の残るもの(67)も存在する。器外面は、寛磨き整形が施されている。器台形土器(69~71)は、第1類に比べて脚部底径が広くなり全体的に裾広がりの傾向が強く窺えるものであるが、(72)のように第1類の様相が残るものもみられる。器外面は、寛磨き整形が施されている。炉器台形土器(73)は、上位で強く内彎する器受部に、「ハ」の字状に大きく広がる脚部が付く厚手のものである。器外面は、寛ナデ整形が施されている。甗形土器(74)は、破片であるために器形全体を窺うことはできないが、口縁部は複合口縁を呈するもので、残存部からは直線的につばはまっていき、鉢形を呈するものと推定される。器外面は、口縁部がナデ、胴部は寛ナデ整形が施されている。

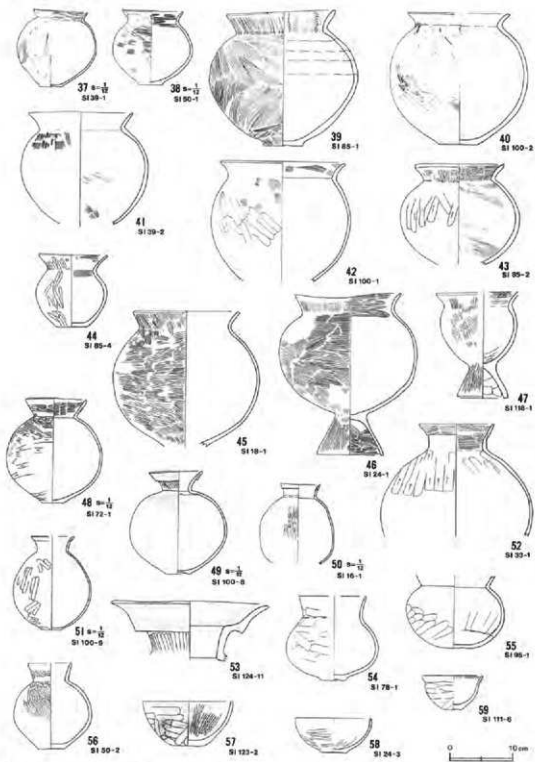
第2群土器(第423・424図)

第2群土器は、古墳時代中期の和泉期に比定される土器群である。本群に属する土器は、16軒の竈穴住居跡内から出土したものであるが、前期に比べて遺物の出土量は少ない。ここでは、器形や整形技法、器種の構成等から、2類に分けて解説する。

第1類(第423図)

本類は、第48・51・71・105・114号住居跡出土の土器を中心に、第77・88・112号住居跡出土の土器を補って設定した。器種としては、甗形土器・壺形土器・小形壺形土器・埴形土器・壺形土器・高坏形土器・甗形土器がある。本類は、後述する第2類の土器群よりも甗形土器の口縁部形態に古い様相を残していること、高坏形土器・埴形土器の器種全体に占める割合がこれまでより多いこと等から、中期の前半に位置付けられるものと思われる。

第1群土器第2類-1



第421圖 土器分類圖(3)

第1群第2類-2

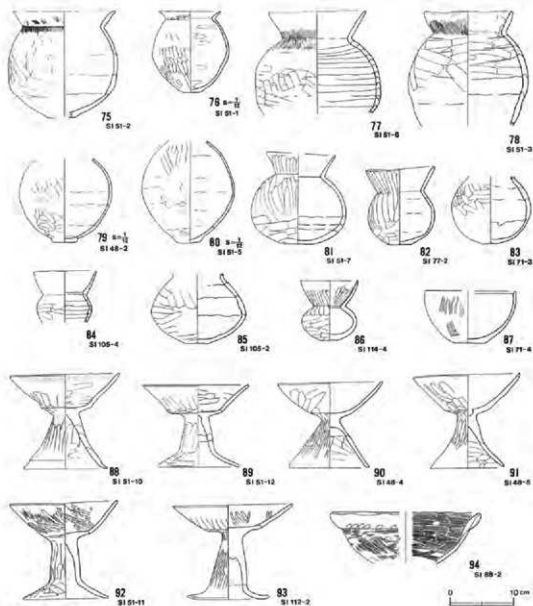


第422図 土器分類図(4)

甕形土器には、胴部が下膨れのもの(75)、やや長胴化するもの(76)、扁平な球形のもの(77)等がみられる。口縁部は、頸部から「く」の字状に外傾して開くものが主体であるが、(78)のように内彎して開くものもある。器外面は、口縁部が横ナデ、胴部は寛ナデ整形が主に施されている。壺形土器は、口縁部を欠損しているため器形全体を窺うことはできないが、胴部が球形のもの(79)と長胴化するもの(80)が認められる。底部は突出した平底で、整形は甕形土器と同じである。小形壺形土器には、胴部が扁平な球形のもの(81)と球形のもの(82)があり、口縁部は頸部から「く」の字状に外傾して開くものである。器外面は、寛ナデ整形が施されている。埴形土器は、前述したように器種全体に占める割合が多い土器であり、胴部が球形のもの(83)、胴部上位が強く張るもの(84)、珠算玉のように扁平な球形のもの(85・86)等がみられる。口縁部は、頸部から「く」の字状に内彎して開くものである。埴形土器(87)は、平底の底部から内彎して立ち上がり、口縁部がわずかにつまみ上げられて直立するものである。器外面は、口縁部が横ナデ、体部は磨き整形が施されている。高埴形土器は、埴形土器と同じく器種全体に占める割合が多い土器であり、坏部下に稜を持つのが一般的であるが、膨みを持つもの(88)も

みられる。坏部は外傾して開くものが一般的であるが、(89)のように外反気味に開くもの、(90)のように内彎して開くものもある。脚部の形態については、「ハ」の字状に開くもの(90)、ラッパ状を呈し裾部が緩やかに広がるもの(88・91)、筒状を呈し裾部で外傾して開くもの(89・92)と外反して開くもの(93)等が存在する。器外面は、坏部が寛ナデ、脚部は寛削り整形が施されている。本類における高坏形土器は、形態に相違が認められるものであり、これらが同一の住居

第2群土器第1類



第423図 土器分類図(5)

跡から混在して出土している。甕形土器(94)は、破片であるために器形全体を窺うことはできないが、口縁部は下端に指頭丘痕が残る複合口縁を呈するもので、残存部からは内彎してすばまるものと推定される。器外面には、ハケ目整形が施されている。

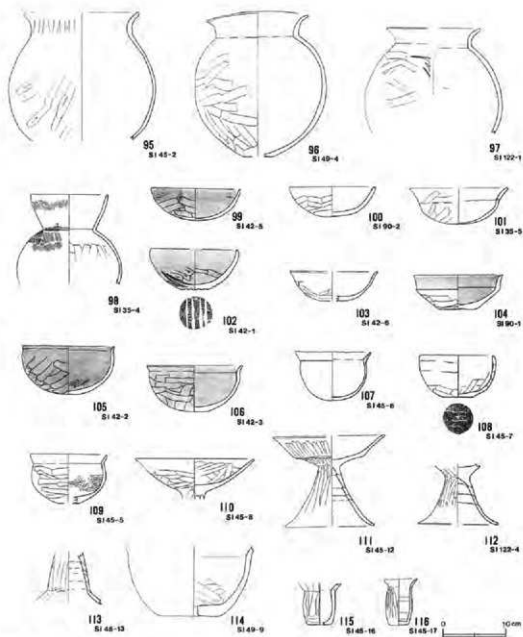
第2類(第424図)

本類は、第42・45・49・90号住居跡出土の土器を中心に、第35・122号住居跡出土の土器を補って設定した。器種としては、甕形土器・小形甕形土器・坏形土器・埴形土器・高坏形土器・甕形土器・ミニチュア土器がある。本類は、第1類の土器群の様相を残しているなかで、鬼高期の器形や手法を窺わせるような土器が認められることから、第1類に後続するものであり中期の後半に位置付けられるものと思われる。須恵器は出土していない。

甕形土器は、胴部が球形状で、口縁部は第1類のように「く」の字状に開くものもみられるが、(95~97)のように直立気味の頸部と外反する口縁部を持ち、全体として「コ」の字状を呈するものが主体である。整形技法は第1類と同じである。小形甕形土器(98)は、胴部が球形状で、口縁部は頸部から「く」の字状に内彎して開くものである。器外面は、ナデ整形であるがハケ目痕がわずかに残るものである。坏形土器は、出土量の増加する器種であり、底部の形態に丸底と平底の両方が認められる。丸底を呈する坏形土器には、体部が大きく内彎しそのまま口縁部に開くもの(99・100)と口縁部で外反して開くもの(101)がある。平底を呈する坏形土器には、体部が内彎して立ち上がるもの他に、(104)のように外傾して立ち上がるものがある。口縁部は、強く内彎するもの(102)、わずかに外反して開くもの(103)の他に、体部との境に明瞭な稜をもち直立気味に外反して開くもの(104)の3種類がある。器外面には、篋削りや篋ナデ整形が施されている。本類における坏形土器は、形態に相違が認められるものであり、これらが同一の住居跡内から混在して出土している。埴形土器も、坏形土器と同じく出土量の増加する器種であり、底部の形態に丸底と平底の両方が認められる。丸底を呈する埴形土器には、体部が内彎して立ち上がり口縁部が短く外傾して開くもの(105・106)と複合口縁を呈するもの(107)がみられる。平底を呈する埴形土器には、体部が内彎して立ち上がり、口縁部で強く内彎するもの(108)や、内面に稜を持ち外傾して開くもの(109)がみられる。器外面は、口縁部が横ナデ、体部は篋削り整形が主で、内・外面に赤彩が施されているものが多く認められる。高坏形土器は、第1類に比べて器形に大きな変化は認められないが、出土量は減少する傾向が窺える。坏部は下位に稜を持ち外傾して開くもの(110・111)で、胴部にはラッパ状を呈し裾部が緩やかに開くもの(111・112)と円筒状のもの(113)がみられる。器外面は、坏部が横ナデ、胴部は篋削り整形である。甕形土器(114)は、第49号住居跡から出土したものである。破片であるために器形全体を窺うことはできないが、残存部から鉢形の器形が推定されるものであり、底部には直径2.8cmほどの孔が確認さ

れている。ミニチュア土器 (115・116) は、鉢形を呈するものと思われる。(115) は底部に直径 1.1cmの孔が穿たれていることから、甔形土器を模倣したものと考えられる。

第 2 群第 2 類



第424図 土器分類図 (6)

参考文献

- 茨城県教育財団 「木田遺跡・善長寺遺跡・小田林遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告第51集 平成元年
- 茨城県教育財団 「南三島遺跡3・4区(II)」 茨城県教育財団文化財調査報告第49集 平成元年
- 茨城県教育財団 「南三島遺跡5区」 茨城県教育財団文化財調査報告第32集 昭和61年
- 勝山市教育委員会 「三反田遺跡(一・二次)」 昭和53年
- 栃木県文化振興事業団 「赤羽根」 栃木県埋蔵文化財調査報告第57集 1984
- 栃木県文化振興事業団 「伯仲遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第58集 1984
- 栃木県文化振興事業団 「烏森遺跡」 栃木県埋蔵文化財調査報告第80集 昭和61年
- 埼玉県埋蔵文化財事業団 「研究紀要4」 1987
- 八王子市栢田遺跡調査会 「神谷原Ⅲ」 1982
- 日本考古学研究所 「日本考古学研究所集報Ⅴ」 昭和58年

2 集落について

本項では、前項の土器分類に基づき、古墳時代前期・中期における集落の特徴と変遷について全体をⅠ～Ⅳ期に分け、若干の考察を加え記述した。当遺跡では、古墳時代前期に属する住居跡51軒と竪穴遺構1軒、中期に属する住居跡16軒の他に、弥生時代の住居跡51軒、時期不明の住居跡2軒と竪穴遺構3軒が検出されている。しかし、古墳時代前期に属する住居跡間における遺物量の格差は大きく、なかには皆無に近い状態のものもあり、各期に分類するのが困難な住居跡が多い。従って、特に前期の集落については全体像を理解するのが難しく、現段階で得られた若干の事実をもとに概略を述べることにする。

1期 古墳時代前期(Ⅰ) 第425図

該期は、第1群第1類土器が出土した住居跡群で、第12・13・15・17・28・31・36・46・56・69・75・82・91・94号住居跡と第3号竪穴遺構から構成される。

本期の住居跡群は、宿二ノ谷を挟んだ台地の東側と西側の2つの集落に分かれ、各集落とも7軒の住居跡から構成されている。

東側の集落は、第46・56・69・75・82・91・94号住居跡の7軒と第3号竪穴遺構から成り、平面形は隅丸方形が主体である。規模からみた集落構成は、残存状態の悪い第94号住居跡を除き、床面積41㎡の大型住居跡1軒(第91号)、20㎡ほどの中型住居跡1軒(第69号)、12～13㎡の小型住居跡4軒(第46・56・75・82号)、6㎡ほどの極小型の第3号竪穴遺構1軒である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的であるが、第46・56・75号住居跡のように1本も検出されない

例も認められる。主軸方向は、不明の第94号住居跡を除く5軒がN-3°~60°-Wの範囲で、第91号住居跡はN-22°-Eである。炉の位置が床面の北西側寄りである第46・56・69号住居跡は、その対面に入口部を想定するならば南東向きに建てられていたと考えられる。しかし、炉が北部や中央部に位置する第75・82・91号住居跡は、南向きの可能性が推測される。分布図からみると、当集落は台地の北部に営まれたものであり、大型住居跡を中心にそれぞれが南・南東方向を向いて、全体的に南西方向に開口する半環状に並ぶ集落を形成していたものと考えられる。

西側の集落は、第12・13・15・17・28・31・36号住居跡の7軒から成り、平面形は隅丸方形または隅丸長方形が主体である。規模からみた集落構成は、床面積47㎡の大型住居跡1軒(第36号)、25㎡ほどのやや大き目の住居跡1軒(第15号)、16~22㎡の中型住居跡3軒(第12・13・17号)、10~11㎡の小型住居跡2軒(第28・31号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的であるが、第17・31号住居跡のように1本も検出されない例の他に、第13号住居跡のように補助柱穴とみられる柱穴を有する例も認められる。主軸方向は、5軒がN-28°~58°-Wの範囲であり、炉の位置が床面の北側・北西側であることから南東向きに建てられていた可能性が高いものである。しかし、第13・31号住居跡は、主軸方向がN-78°・35°-Eを指し、本期の住居跡では異例のものである。炉の位置から判断すると、第13号住居跡は床面の東側寄り、第31号住居跡は床面の北東側寄りであることから、2軒とも南西向きの可能性が推測される。分布図からみると、当集落は台地の北部に営まれたものであり、大型住居跡を中心にそれぞれが南西・南東方向を向いて、全体的に南西方向に開口する半環状に並ぶ集落を形成していたものと考えられる。

該期の集落は、古墳時代における初期の集落であり、後述するII期に比べて住居跡数は少ない。谷を挟んだ東西の台地に営まれた2つの集落は、集落を構成する住居跡の規模や数において大きな相違はなく、大型住居跡を中心に南西方向の半環状に住居跡が並ぶという類似した形態をもつものである。

II期 古墳時代前期(2) 第425図

該期は、第1群第2類の土器が出土した住居跡群で、第14・16・18・21・22・24・26・27・32・33・39・47・50・72・78・85・95・100・103・104・108・111・118・123・124号住居跡から構成される。

本期の住居跡群は、宿二ノ谷を挟んだ台地の東側と西側の集落に分かれる。

東側の集落は、第47・50・72・78・85・95・100・103・104・108・111・118・123・124号住居跡の14軒であり、さらに北部と中央部の小集落にグルーピングすれば、各小集落とも7軒の住居跡から構成される。

北部の小集落は、第47・50・72・78・85・95・100号住居跡の7軒から成り、平面形は、残存状態が悪く形状・規模等が明確でない第78号住居跡を除くと、方形または隅丸方形である。規模が

ら集落構成をみると、床面積29㎡のやや大き目の住居跡1軒(第85号)、23~24㎡の中型住居跡2軒(第50・100号)、11~12㎡の小型住居跡2軒(第47・72号)、不明のもの2軒(第78・95号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的であるが、第47号住居跡のように5本検出されたものや、第72号住居跡のように1本も検出されない例も認められる。主軸方向は、不明の第78号住居跡を除くと5軒がN-11°~60°-Wの範囲であり、炉の位置が床面の北西側寄りである第50・72・95号住居跡、第85号住居跡は南東向きと考えられ、炉が北側寄りの第47号住居跡は南向きの可能性が推測される。しかし、第100号住居跡は主軸方向がN-67°-Eを指し、炉が床面の北東側寄りであることから南西向きの可能性が高い。分布図からみると、当集落は台地の北部に営まれたものであり、やや大きめの住居跡を中心にそれぞれがほぼ南西・南東・南方向を向いて、全体的に南西方向に大きく開口する半環状に並ぶ集落を形成していたものと考えられる。

中央部の小集落は、第103・104・108・111・118・123・124号住居跡の7軒から成り、平面形は、残存状態が悪く形状・規模等が明確でない第104号住居跡を除くと、方形または隅丸方形である。規模から集落構成をみると、床面積81㎡の極めて大型の住居跡1軒(第124号)、25㎡ほどのやや大き目の住居跡1軒(第103号)、17㎡ほどの中型住居跡1軒(第123号)、13~14㎡の小型住居跡3軒(第108・111・118号)、不明の1軒(第104号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的であるが、第103・108・118号住居跡のように1本も検出されないものや、第124号住居跡のように7本検出された例も認められる。主軸方向は、不明の第103・104号住居跡を除いた4軒はN-11°~87°-Wの範囲であるが、炉の位置が床面の北側寄りの第108・123号・第118号住居跡は南向きに、西側寄りの第124号住居跡は東向きに建てられていたものと考えられる。しかし、第111号住居跡は主軸方向がN-4°-Eを指す異例のものであり、炉が床面の北側寄りに位置することから南向きの可能性が推測される。分布図からみると、当集落は極めて大型の住居跡を中心に、南西方向に開口する半環状に並ぶ集落を形成していたものと考えられる。

西側の集落は、第14・16・18・21・22・24・26・27・32・33・39号住居跡の11軒から成り、平面形は方形または隅丸方形が主体である。規模からみた集落構成は、床面積35~36㎡の大型住居跡2軒(第16・39号)、24~26㎡のやや大き目の住居跡3軒(第22・32・33号)、18~21㎡の中型住居跡2軒(第18・21号)、10~13㎡の小型住居跡3軒(第14・24・26号)、7㎡ほどの極小型の住居跡1軒(第27号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的であるが、第14・32号住居跡のように補助柱穴とみられる柱穴を有するもの、第22号住居跡のように主柱穴と判断される柱穴が見られない例も認められる。主軸方向は、9軒ともN-17°~58°-Wの範囲であるが、炉の位置が床面の北側・北西側・西側寄り等と不規則である。しかし、炉の対面に入口部を想定するならばこれらの住居跡は南東向きに建てられていたと考えられる。また、第21・22号住居跡は主軸方向がN-15°32'-Eを指すもので、炉が床面の北東側寄りに位置していることから南西

向きの可能性が推測される。分布図からみると、当集落は人型住居跡を中心にそれぞれが南西・南東方向を向いて、全体的に南東方向に開口する半環状に並ぶ集落を形成していたものと考えられる。

該期の集落は、I期に後続する集落で谷を挟んだ東西の台地に営まれている。住居跡数はI期の集落に比べて飛躍的に増加し、当遺跡の古墳時代を通して最も営みが活発な時期であったと言える。しかし、大型住居跡を中心に半環状に集落を構成する点においてはI期との変化は認められず、さらに、集落の開口方向が宿ノ谷に向いている点で谷と集落が何らかの深いかわりをもっていたものと推定される。

III期 古墳時代中期 (1) 第425団

該期は、第2群第1類の上層が出土した住居跡群で、第48・51・71・77・88・105・112・114号と第99・117号住居跡から構成される。

本団の住居跡群は、宿ノ谷を挟んだ台地の東側に集落を形成している。この集落は、北部と中央部の小集落にグルーピングすれば、各小集落とも5軒の住居跡から構成される。

北部の小集落は、第48・51・71・77・88号住居跡の5軒から成り、平面形は、残存状態が悪く形状・規模等が明確でない第77号住居跡を除くと、方形または隅丸方形である。規模からみた集落構成は、床面積28㎡のやや大き目の住居跡2軒(第48・88号)、20㎡ほどの中型住居跡2軒(第51・71号)、不明の住居跡1軒(第77号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的であるが、第48号住居跡のように補助柱穴とみられる柱穴を有する例も認められる。主軸方向は、不明の1軒を除いた4軒ともN-35°~78°-Wの範囲にあり、炉の位置が床面の北西側や西側寄りであることから、その対面に入口部を想定するならば南東向きに建てられていたと考えられる。分布図からみると、当集落は、南西方向に開口した半環状に並ぶ4軒と北西側にやや離れて位置する1軒から成る小集落を形成していたものと考えられる。

中央部の小集落は、第99・105・112・114・117号住居跡の5軒から成り、平面形は、残存状態が悪く形状・規模等の明確でない第99号住居跡を除くと、方形または隅丸方形である。規模からみた集落構成は、床面積64㎡の大型住居跡1軒(第117号)、25~33㎡のやや大き目の住居跡2軒(105・114号)、20㎡ほどの中型住居跡(第112号)、不明の住居跡1軒(第99号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的である。主軸方向は、不明の1軒を除いた4軒ともN-45°~83°-Wの範囲にあるが、炉の位置が床面の北西側寄りの第114号住居跡や貯蔵穴を有する壁の対面の壁寄りに炉の存在が想定される第99・105号住居跡は南東向きに、炉の位置が床面の南西側寄りの第112号住居跡は東向きに建てられていたものと推測される。分布図からみると、当集落は、南西方向に開口した半環状に並ぶ4軒とやや離れて位置する1軒から成る小集落を形成していたものと考えられる。

該期の集落は、東側の台地の北部と中央部に形成される2つの小集落から成る。2つの小集落を構成する住居跡の規模や数に大きな相違はみられず、大型もしくはやや大き目の住居跡を中心に南西方向に開口する半環状に並ぶ類似した集落形態を成すもので、前期と比較して規格的に集落が形成されている。

Ⅳ期 古墳時代中期 (2) 第425図

該期は、第2群第2類の土器が出土した住居跡群で、第35・42・45・49・90・122号住居跡から構成される。

本期の住居跡群は、宿二ノ谷を挟んだ台地の東側と西側の2つの集落に分かれ、各集落とも3軒の住居跡から構成されている。

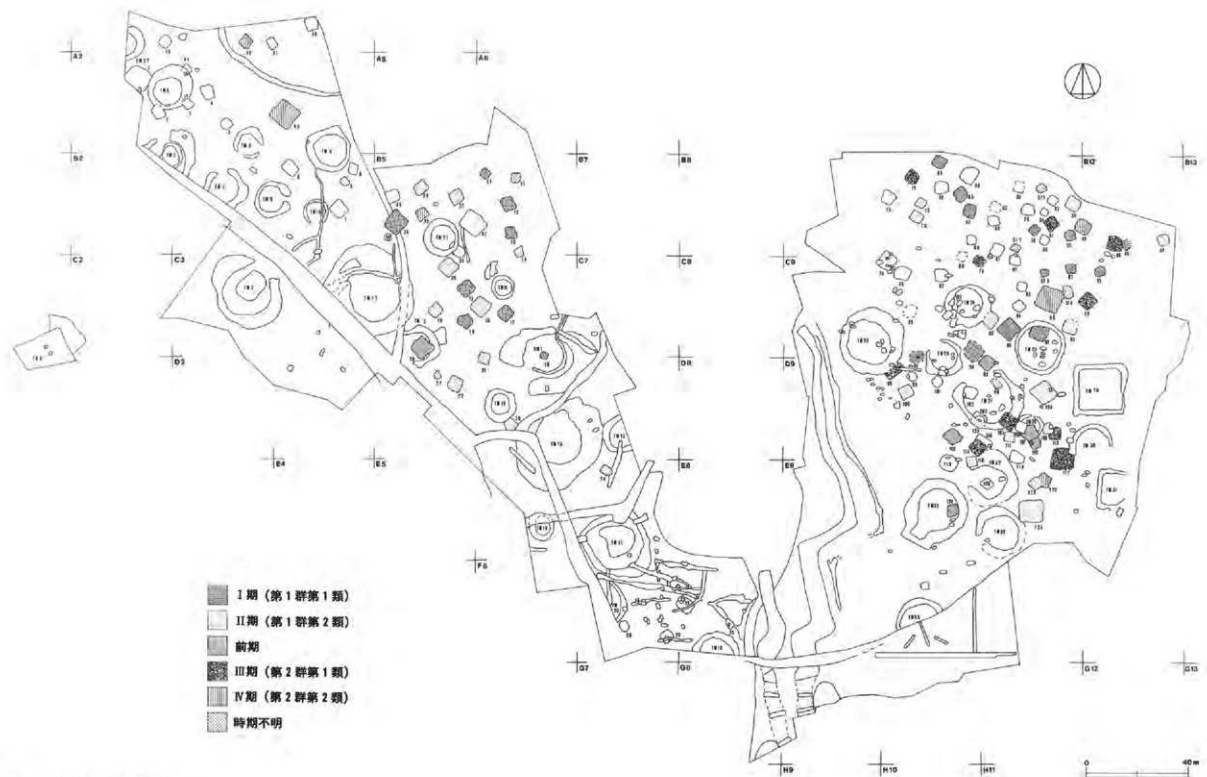
東側の集落は、第49・90・122号住居跡の3軒から成り、平面形は方形または隅丸方形である。規模からみた集落構成は、床面積73㎡の大型住居跡1軒(第90号)、21~26㎡の中型住居跡2軒(第49・122号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的であるが、第49号住居跡のように6本の主柱穴の他に補助柱穴とみられる柱穴が検出された例も認められる。主軸方向は、3軒ともN-44°~66° Wの範囲にあり、炉が床面の北西側や西側寄りであることから南東向きに建てられていた可能性が高い。分布図からみると、当集落は宿二ノ谷に面した台地の東縁付近に、1軒の大型住居跡を中心にそれぞれが南東方向を向いて南北に1列に整然と並ぶ集落を形成していたものと考えられる。

西側の集落は、第35・42・45号住居跡の3軒から成り、平面形は方形または隅丸方形である。規模からみた集落構成は、床面積76㎡の大型住居跡1軒(第45号)、18~20㎡の中型住居跡2軒(第35・42号)である。柱穴は、主柱穴が4本検出されるのが基本的である。主軸方向についてみると、第35・45号住居跡はN-27°・49° Wを指し、炉が床面の西側・北西側寄りであることから、南東向きに建てられていたと考えられる。また、第42号住居跡については炉が検出されなかったが南西壁際に貯蔵穴をもつものであり、本期の住居跡における炉の位置が貯蔵穴をもつ壁の反対側の壁寄りであることから判断すると、主軸方向はN-44°-Eで南西向きと推測される。分布図からみると、当集落は宿二ノ谷に面した台地の東縁付近に、1軒の大型住居跡を中心に北西から南東方向にかけて1列に並ぶ集落を形成していたものと考えられる。

該期の集落は、当遺跡においては終末と考えられるもので、Ⅲ期に比べて住居跡数は明らかに減少している。2つの集落を構成する住居跡の規模や数は同一であり、各々が谷に面した台地の東縁付近に直線的に1列に並ぶという共通した形態がみられる。しかも住居跡間の間隔はかなり広くとられており、各々が広い敷地を所有していたことを推定させるものがある。

以上、長峰遺跡から検出された古墳時代の住居跡を中心に、集落の変遷について概要を述べてきたが、遺跡全体のもつ膨大な情報量から考えると、必ずしも充分な解説や考察がなされたとは

言い難い。むしろ、解決しなければならない種々の問題点が浮び上がってきたと言うべきであろう。



第425図 古墳時代住居跡分布図

第3節 古墳と出土遺物

昭和61・62年度の調査で得られた成果については、第3章に記載したとおりである。本節では、これらの成果に基づき、古墳と周溝及び出土遺物について若干の考察を加え、その問題点と課題をまとめておきたい。

1 古墳の形態と分布

当遺跡において調査した古墳は、円墳29基・方墳2基・前方後円墳4基の合計35基である。これらの古墳は、宿二ノ谷の東側台地に円墳10基・方墳2基・前方後円墳1基の計13基、宿二ノ谷の西側台地に円墳19基・前方後円墳2基の合計21基、宿台地の西側に前方後円墳1基の合計35基である。

また、古墳の分布をその位置から観察すると、古墳どうしの重複関係は見られないものの、周溝の外側部がほぼ接しているものが見られる。第12・13号古墳、第15・16号古墳、第17・20号古墳、第27・28号古墳、第32・33号古墳である。いずれにしても、前方後円墳を中心として大小の古墳が関連的に造られている様子がうかがえる。

このように数多くの古墳が宿二ノ谷を挟む東西の台地に造られたという事実は、この台地が集落としての役目を果たしていることになる。では、古墳の主人はどこに居住して生業を営んでいたのだろうか。5～6世紀の住居跡を付近の遺跡に求めてみると、当遺跡の台地続きの北西側1.1km程の尾坪台遺跡からは、古墳時代中期の住居跡を13軒、当遺跡から谷津を挟んで西側1.5km程の外八代遺跡からは、古墳時代後期の住居跡を35軒、外八代遺跡の西側で当遺跡から2km程の屋代B遺跡からは、古墳時代後期の住居跡22軒、屋代A遺跡からは、古墳時代中期の住居跡7軒、後期の住居跡14軒が検出されている。これらの遺跡の住居跡と当遺跡の古墳群とは、時間的に近い関係にあると思われる。

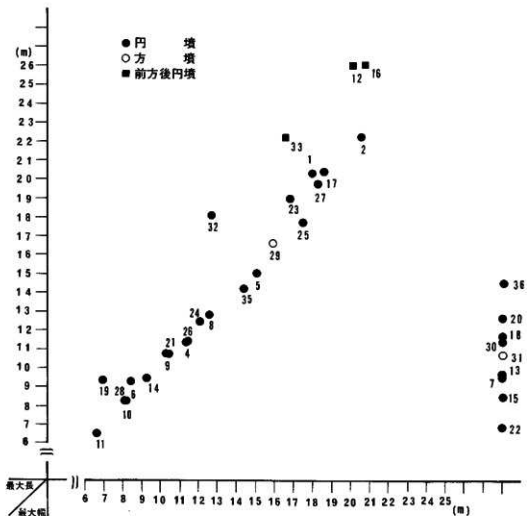
2 墳丘と規模

墳丘規模については周溝の内側で計測したものである。第426図は縦軸に最大長、横軸に最大長と直交する長さ、前方後円墳は最大長と直交する後円部の長さ（最大幅）を計測して、規模の分布を示したものである。また、推定で計測したものは、右側へ最大長だけで表わした。これによると、円墳は原点からほぼ斜上方へと6m台から22m台まで10数基がほぼ一直線上に並ぶ。前方後円墳は円墳の斜上方より左側に出てやや規模の違いを示して並ぶ。方墳は10数基の円墳のライン上に並ぶ。埋葬施設をもつ第25・27・29号古墳は右下りのラインの上方にまとまって位置しており、比較的大規模な古墳から検出されたことがわかる。なお、当古墳群の台地は著しく削平が進んでいるため、周溝の底面近くが検出されており、墳丘の規模は実測値より幾分小さくなるもの

と思われる。

3 周溝・ブリッジ

周溝は断面形がU字状やゆるやかに外傾しているものが大部分である。逆台形状を呈するものは円墳の第11・17・20号古墳の3基、方墳の第29・31号古墳の2基である。また、各古墳の周溝で、一部分が掘り残されてブリッジ状になっているものと全周しているものがある。しかし、台地全体が旧表土層下まで削平されてしまっているため、古墳によっては、ほとんど周溝底だけが残っているものも見られる。そのため、ブリッジとしたものの中には、周溝底の浅い部分であったという可能性も否定できない。いずれにしてもブリッジを残していたものは、第1・5・6・7・9・10・26・27・28・32・35号古墳の11基と、ブリッジ状に周溝底の一部を掘り残している



第426図 古墳の規模別分布図

第11・16号古墳である。これらのブリッジの方向は、北側のものが第5・7・28号古墳、東側のものが第6・9・35号古墳とブリッジ状にしていた11・16号古墳、南側のものが第10号古墳、西側のものが第1・32号古墳、北西側のものが第26号古墳、北北西側のものが第27号古墳である。

4 埋葬施設

埋葬施設を検出した古墳は、第25・27・29号の3古墳である。これらの4基埋葬施設の共通性は、いずれも封上下の旧表土層とその下側に張り込んだものである。また、埋葬施設は土坑を掘ってから雲母片岩で造っている。その埋葬施設の底部は、雲母片岩の小石を敷きつめている。側石と妻石は一枚石を使用したと思われる痕跡が残っていたが、天井と天井石については不明である。埋葬施設の底部には、小石を敷きつめるなど共通した点が見られる。なお、埋葬施設の長軸方向は前章でも触れておいたが、ほぼ東～西方向を向いているものは、第25・29号古墳のものと第27号古墳の第2埋葬施設である。第27号の第1埋葬施設だけが北東～南西方向を向いている。さらに、埋葬施設の位置は第25・27号古墳が周溝寄りの南側に、第29号古墳は周溝寄りの東側に位置している。このように箱式石棺が使用された当遺跡の古墳は、その埋葬施設が片寄った位置にあることを考えれば、6世紀末頃に東南海地方に見られる変則的古墳の範疇でとらえられるものと思われる。

5 出土遺物と築造時期について

古墳から出土した遺物は埴輪片と土師器、須恵器片、古銭等である。埴輪で円筒埴輪片だけを出土した古墳は、第3・5・33号古墳の3基である。円筒埴輪と形象埴輪を出土した古墳は、第1・12・17号古墳の3基である。埴輪を出土した古墳で前方後円墳は第3・12・33号古墳、円墳は第1・5・17号古墳で、方墳からの出土はない。また、埴輪を出土した古墳とその規模を見てみると、第5号古墳が15m台であるが、その他は20m以上の規模をもつ古墳である。このことから、当古墳群の特徴は、前方後円墳には埴輪が伴うこと(第16号古墳は伴わない)、規模の大きい円墳にも埴輪が伴うこと(第5号古墳は小さい)といえそうである。

土師器の坏を出土した古墳は、第22・26号古墳、鉢を出土した古墳は第32・35・36号古墳である。壺あるいは甕を出土した古墳は、第2・16・17号古墳である。埴を出土したのは、第33・35号古墳である。その他の古墳からも少量の土師器片が出土しているが、住居跡と重複していることから古墳に伴うものかどうか不明で、時期を明確にする資料としては使用できない。須恵器は高環形のもの第31号古墳から出土した。その他、青銅器片や古銭等の遺物は、古墳と直接の結びつきはないものと思われる。以上の遺物で比較的時期の明確なものは、古墳時代後期の坏・鉢・壺・甕・埴であり、また、同時期と思われる須恵器の高環形の破片である。これらを出土した古墳は、第1・2・16・17・22・26・32・33・35・36号古墳の10基である。また、埴輪を出土した古墳は、第1・3・5・12・17・33号古墳の6基である。しかし上記の土師器、須恵器と埴輪が

伴っているのは第1・17・33号古墳である。以上のことから考えると、6世紀前半の土師器等を伴う古墳と形象埴輪を伴う円墳・前方後円墳が6世紀前半頃から造られ、順次その他の円墳等が7世紀初頭にかけて築造されたものと思われる。

6 埴輪と工人達

円筒埴輪は、前述したように6基の古墳から出土している。器高や成形等については一覧表で述べているので、特徴と思われる点を整理する。

凸帯の数は、どの古墳から出土した円筒埴輪も3本である。それ以外のものはない。凸帯の断面形は台形状が多く、また、その稜線が不明確なもの（一覧表ではA'となっている。）が圧倒的に多い。

透孔の数と位置は、(実測できた埴輪で上半部あるいは下半部を欠損していて不明のものもあるが、凸帯数を3本と推定したものも含めて数えると)以下のものである。第1号古墳の埴輪の透孔は、下から1本目と2本目の凸帯間（以下2段目と呼ぶ）に1対あるものが2個体、2本目と3本目の凸帯間に（以下3段目と呼ぶ）1対あるものが2個体、1本目と2本目、2本目と3本目の間にそれぞれ1対ずつあるものが3個体ある。第3号古墳の埴輪の透孔は2段目に1対あるものが6個体、3段目にあるものが1個体、2段目と3段目にそれぞれ1対あるものが7個体である。第12号古墳の埴輪の透孔は2段目にあるものが2個体、3段目にあるものが2個体である。第17号古墳のそれは2段目にあるものが3個体、3段目にあるものが1個体である。第33号古墳の埴輪の透孔は2段目にあるものが10個体、3段目にあるものが1個体、2段目・3段目にそれぞれ1対ずつあるものが17個体である。なお、第1号古墳出土の朝顔形円筒埴輪(DP119)の外側で3段目と、第3号古墳出土の円筒埴輪(DP130)の内側上部にそれぞれ左巡りの工人の印と思われる○印がヘラ状工具で描かれている。

朝顔形円筒埴輪は、上部のくびれ部付近のものがほとんどで、第1・3・33号古墳から出土している。また、円筒形でも底径に比べて口径が著しく大きく開いたいわゆる朝顔形と普通の円筒形の中間的形をした朝顔形状の埴輪も出土し、これらの大部分は2・3段目にそれぞれ1対の透孔がある。2段目、3段目だけという箇所だけのものは少ない。以上の透孔については、欠損しているものも推定できる範囲で記録した。2段目・3段目にそれぞれ1対の透孔を穿孔している埴輪と朝顔形円筒埴輪を出土した古墳は第1・3・33号古墳であり、第12・17号古墳からは出土していない。また、2段目、3段目だけに透孔をもつ埴輪は、数に多少の差はあるものの第5号古墳を除く5基の全てから出土している。

形象埴輪は、第1・3・12・17・33号古墳から出土している。第1号古墳からは、鶏の頭部1点が出土した。第3号古墳からは、武人像か農夫像へ着いていたと思われる刀か鎌の一部と思われるもの1点と、動物像の耳の一部と思われるもの1点、その他、形象埴輪の台部と思われるも

の数点が出土した。第12号古墳からは、人物の頭部1点、鶏の頭部1点、猪の鼻部1部、人物の胸部1点や美豆良・腕の接合部などが出土した。第17号古墳からは、女性と思われる人物像の胴部からスカート部までが3点、台部1点、美豆良・腕の接合部がそれぞれ3点出土した。第33号古墳からは、人物埴輪の腕の接合部1点、馬形埴輪の鞍の一部1点が出土した。また、表面採集したものに猪の頭部がある。この猪の頭部は第12号古墳の約50m北方の畑から採集したものである。

以上の事柄から考察してみると、凸帯数は3本という1種類だけであり、埴輪工人達は少なくとも一つの系統の工人達であり、6基の古墳築造の期間中埴輪の製作に当たっていたものと思われる。透孔の位置的、数的変化から考えられる事は、工人達の個人の特徴あるいは、時間的差異を示しているのではないだろうか。また、円筒埴輪はもちろん、形象埴輪と朝顔形円筒埴輪とともに出土した古墳は、第1・3・33号古墳で、第12・17号古墳からの出土は円筒埴輪だけである。形象埴輪としては、人物・鶏・馬・猪が出土し、器財埴輪は出土しなかった。いずれにしても古墳時代後期に同一集団の工人達によって製作されたものと思われる。

以上のように古墳の形態・分布・遺物等について概観してみたが、簡明に整理してみると、宿二ノ谷をはさむ両台地に見られる4基の前方後円墳は、それぞれ地域の小首長墓であり、その周囲に位置する大・小の円墳は、首長墓に準ずる古墳であるといえる。また、4基の前方後円墳と周囲の古墳という視点でとらえるならば、4集落の地縁、血縁の人達の古墳群といえるのではないだろうか。また、古墳の築造時期については、遺物の項でも述べたように古墳時代後期、6世紀前半頃から7世紀初頭にかけて造られたものと思われる。なお、須臾器を出土している第31号古墳が、当古墳群では初期のものと考えられる。その後埴輪や土師器を出土した古墳と遺物を出土しなかった比較的小規模な古墳が順次造られて、終末期に方墳である第29号古墳が作られたものと思われる。

第4節 中世城郭遺構について

長峰遺跡は、古墳群及び集落跡として調査が開始されたが、調査の進展に伴って堀が検出されるなど、古記録にもない中世の城郭跡でもあったことが確認された。このことにより、当遺跡の東側に隣接してする長峰城跡の城域は、従来考えられていた範囲よりもさらに西側に広がっていることが判明した。調査の概要、遺構・遺物等については、第3章第8節に記述したとおりであり、本節においては調査によって確認された事実関係を中心に述べることにする。

長峰城跡は、竜ヶ崎市街の北部に広がる台地から南東方向に延びてくる、舌状台地の東端部に構築された中世の城郭である。城域は、舌状台地を北からくびるように入る宿ノ谷の東側の部分で、西側の台地を除く三方は急斜面で大然の要害となっている。今回の調査によって検出された城郭に関係する遺構は、堀7条・溝1条・塚2基であり、土塁や建物跡等は検出されなかった。これらの堀は、谷を結んで舌状台地を掘り切っている可能性が強く窺えるもので、堀によって区画された3か所の平地は郭と考えられるものである。従来考えられていた長峰城跡を城の主郭と仮定するならば、当遺跡から検出された3か所の郭は外郭として城域の一部を構成するものであり、以下、3か所の郭を主郭に近い東側から外郭Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（第427図）と仮称して記述することにする。

外郭Ⅰ

本郭は、主郭の西側に位置し、郭の規模は東西150m、南北200mほどで、標高は24～27mを測る。平面形は台形状で、外郭部では最大の面積を有する郭である。本郭は、北から入る宿ノ谷と南側の急崖間に構築された2条の堀の東側の部分で、三方は急斜面を呈する大然の要害となっている。しかし、西側は台地続きであることから堀・土塁等の防禦施設が必要であり、この部分には堀2条・溝1条・塚1基が検出されたが、土塁の痕跡は確認されなかった。第1・2号堀は、東へ延びている舌状台地と本郭を区画する堀で、舌状台地がくびれる部分に南北方向に平行に構築されている二重堀であり、本郭においては第2号堀をさらに谷の東側中央部付近まで延ばして防備を厳重にしている。2条の堀を防禦機能の点から考えると、いずれも「折り」が施されており、横矢（側面攻撃）を掛けることが可能である。特に、第2号堀は、この「折り」の部分から北側5mほどの地点に本郭の虎口（出入口）とみられる土橋・木橋の痕跡が検出されている。また、第2号堀については、谷の東側に相当する部分を薬研堀とする他、屈曲部の底面に「段差」を付けたり「竅穴」を掘るなど、堀底における敵兵の移動・散開を妨げる工夫が施されている。また、第34号溝は、第2号堀の東側に検出された溝で、堀と平行に構築されているものである。この溝と郭との関係は、溝が郭と堀の中段の平地（犬走り）に位置し、溝の底面や東壁31本の柱穴が南北方向に配列されていることから、この溝は排水路や防禦施設としての種別及び乱杭跡の可能

性が推測されるもので、本郭と密接な関係をもって構築されたものと考えられる。第1号塚は、本郭の南西端に位置する土銀頭状の塚で、これに類似するものは主郭内の曲輪の端、虎口の脇といった城の要所に見出されている。「龍ヶ崎の中世郭跡」の中では、これらについて「これらの土盛り（土塁と呼ぶべきか）を起点として曲輪のへりに柵を廻らせていたのではあるまいか」とあり、防禦施設としての可能性を示唆している。この塚については、土塁の残存部とも考えられるが、堀の内側に位置し北から西にかけてを見通せることから、櫓台として物見に利用されていた可能性も考えられる。

本郭は、主郭の西側に近接して構築された郭であり、その位置的な重要性から判断すると主郭に続いて構築されたものと推測される。

外郭Ⅱ

本郭は、外郭Ⅰの西側に位置する郭である。郭は、南西部が墓地造成に伴って、大きく削平されているうえに全体の2分の1ほどが調査区域外であること等から、構築時本来の形状や規模は明確ではない。しかし、調査をした部分や地形図等から判断すると、平面形は東西80m、南北130mほどの規模の長方形を呈するものと推定され、標高は26m前後を測る。本郭は、東側の宿二ノ谷と西側のオノ谷の間に構築された4条の堀から南側の部分で、三方は急斜面を呈する天然の要害となっている。しかし、北側は台地続きであることから堀・土塁等の防禦施設が必要であり、この部分からは堀4条が検出されたが、土塁の痕跡は断絶されなかった。この他には、郭の南東端に塚1基が検出されている。4条の堀は、南東方向に延びてくる舌状台地と本郭を区画するもので、古墳時代後期に比定される第17号古墳を塚として利用し、北側に第3・4号堀、東側に5号堀、西側に第6号堀が配置されている。これらの堀は、本来独自のものとして構築されたと考えられるが、第3・4号堀は接続することによって、第5・6号堀は塚（古墳）を間に挟むことによって、一体の堀としての機能をもつものであり、小規模ではあるが二重堀とすることで防備を嚴重にしている。本郭の構築は、基本的に外郭Ⅰと同一の考え方がなされており、外郭Ⅰにおいては2条の堀が南北方向であるのに対し、本郭においては4条の堀が東西方向であるのは、台地の方向性の相違から理解される。郭内の第17号古墳は、墳丘を留めるもので、堀との位置関係から推測すると物見の機能と防禦的な機能を兼ね備えた櫓台として利用されていた可能性の窺えるものであり、また、南東端に位置する第2号塚についても同様の機能が推測される。本郭は、南東方向に延びてきた舌状台地が東に向きを変える地形上の要所に構築された郭であり、外郭Ⅰに比べて小規模ではあるが、外郭Ⅰを防護する機能を有する郭として築かれたものと推測される。

外郭Ⅲ

本郭は、外郭Ⅱの北側に位置し、最外郭を構成する郭である。郭は、西側が調査区域外であることから、構築時本来の形状・規模は明確ではない。しかし、調査をした分や地形図等から判断

すると、平面形は東西100m、南北50mほどの規模の長方形を呈するものと推測され、標高は26m前後を測る。本郭は、東側の宿ノ谷と西側の才の谷の間に構築された1条の堀から南側の部分で、東西は急斜面を呈する要害となっている。しかし、北側は台地続きであることから他の外郭と同じく堀・上塁等の防禦施設が必要であり、この部分からは堀1条が検出されたが、土塁の痕跡は確認されなかった。第7号堀は、南東方向に延びてくる舌状台地と本郭を区画する堀で、台地の方向に直交するように北東から南西方向にかけて構築されているが、調査区域外まで延びているため全容を明確にすることはできなかった。しかし、方向から判断するとE5区に現状保存されている前方後円墳を郭内に含む可能性が高く、古墳を橋台として物見に利用していたものと推測される。前述したように、本郭は最外郭を構成する郭であり、外郭IIを防備する機能を有する郭として築かれたものと推測される。

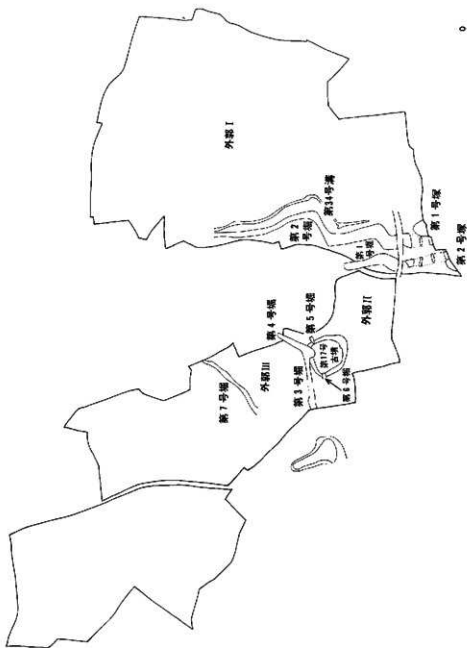
以上、外郭I～IIIの構造について述べてきたが、長峰城跡は前述したように舌状台地の先端部に主郭を構築したと推定される城郭であり、台地続きである西側を除く三方が天然の要害となっていることから、西側にいかに堅固な防禦施設を構築するかが大きな課題であったと考えられる。従って、長峰城跡は、城の最重要部である主郭を守るために、地形の制約上から西側に外郭を順次構築していくことによって城域の拡張・強化を図ったものと考えられる。

次に、堀の構築に関わる問題について述べてみたい。外郭Iと舌状台地を区画する第1・2号堀についてであるが、これらの構築順をどのように理解したらよいのか。第1は、これら2条の堀を時期的に違った堀とみることである。つまり、外側にまず第1号堀を掘り、その後で内側に第2号堀を掘ることであるが、この逆の場合も考えられる。第2は、同時期に掘った堀とみることであるが、この場合も2つの考え方ができることになる。1つには、第1・2号堀を平行に掘ることによって二重堀とし、間に生じた平坦地を障害として活用することであり、2つには別個の堀を掘ったのではなく、最初から大きな1条の堀を掘るつもりであったとすることである。後者の見方に関すれば、堀の規模は、主郭における最大規模の上幅15mをはるかに凌ぐ25mほどになるのであるが、幅に比べて深さがなく堀そのものも未完成ということになってしまう。長峰城跡については、立証する古記録がなく推定の域を出ることはできないが、本郭においては、第1の考え方が妥当であるように思われ、1条の堀だけでは防禦施設として不安が残るため、さらにもう1条の堀を掘ったものと推測される。外郭IIにおける4条の堀についても、構築順については外郭Iと同じ考え方が可能であるが、本郭における堀は外郭Iにおける2条の堀に比べて小規模なものである点から、同一時期に掘られた可能性もある。これらのことから、外郭I・IIにおいては、立地条件から攻撃の予想される外郭Iの西側や外郭IIの北側に二重堀を構築することによって防衛体制の充実を図ったものと考えられる。しかし、最外郭を構成する外郭IIIについては、1条の小規模な堀が検出されただけであり、上塁の痕跡も確認されていないことなどから判断す

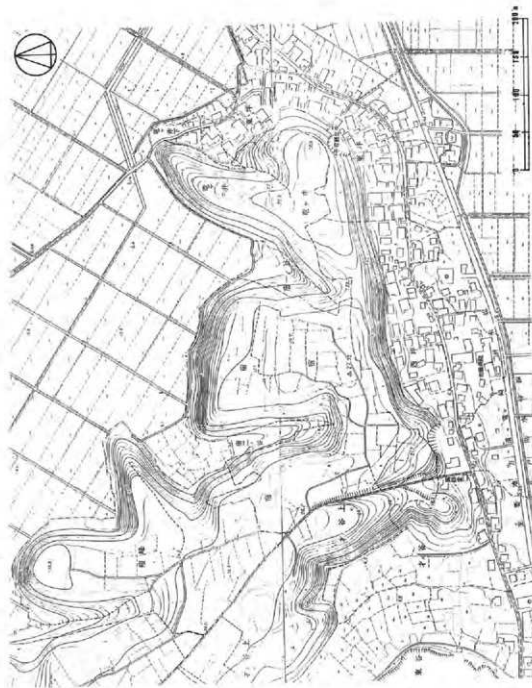
ると、防禦施設としてはやや不十分なものと思われる。

続いて、長峰城跡及び当遠跡に残されている、地名と城郭との関連について述べることにする。(第428図)長峰城跡は、竜ヶ崎市街の北部、長峰町字竜ヶ井に所在する中世の城郭として位置付けられている。現在までに市内に確認されている16の城館跡のほとんどが、中世の城郭に広くみられる台地縁辺部に構築されており、立地条件からみた長峰城跡もその例外ではない。主郭の位置する舌状台地の東端部の字名は「竜ヶ井」で、これは要害の謫つたもので地勢險しく敵を防ぐのによい場所を意味している。周辺地形を概観すると、西側を除く三方は、急斜面を城壁とする天然の要害であり、北から台地を大きくくびるように入る宿一ノ谷と南側の急崖に挟まれた台地の最狭部より東側を郭とするなど、まさに竜ヶ井(要害)であると言える。また、今回の調査によって長峰城跡の外郭と判断された部分の字名は「宿」であり、宿については「龍ヶ崎市中世城郭跡」で「中世の東国においては、町場のことを「宿」と呼びならわしていた。」⁽²⁾とあり、城と密接に関係を持つ交通や経済の場としての可能性について示唆している。当遠跡の「宿」も、主郭の西側に宿一ノ谷を挟んで隣接していることから城と不可分の地名であり、町場とも考えられるが、今回の調査からはこれを立証するような遺構・遺物等は検出されなかった。しかし、流通経済の場とするほどの存在ではなかったとしても、城主の家臣達の集住地であった可能性は考えられる。この他に、城郭に関係する字名としては、竜ヶ井下、宿一ノ谷、宿二ノ谷等が残されている。

最後に、長峰城の存続期間及び築城者との問題について触れてみたい。現在のところ、長峰城に関係する文献は極めて少なく、「諸岡武男家文書」⁽³⁾や「東国關戦私記」⁽⁴⁾等において散見されるに過ぎず、土岐氏家臣の中に長峯(峰)民部の名が見出されているだけである。土岐氏の勢力が、16世紀の半ば頃までに信太荘はもとより東条荘の全城、河内郡南部の竜ヶ崎・駒馬一帯もその支配下に納めるまでに拡大していたとすれば、長峰城が土岐氏系の城郭であった可能性が推測される。しかし、当城に関する確かな資料はなく、後世の伝承・物語等からかすかにその歴史を知ることができるのみであり、土岐氏あるいはその家臣によって築城されたものか、それとも既に先住の在地武士の手によるものかは明確でない。しかし、大正18年(1890)の「小田原の陣」による後北条氏の滅亡により、竜ヶ崎地方の要地に所在する各城(竜ヶ崎・江戸崎・牛久・土浦・布川)は、すべて豊原秀吉に掌握され、その没収所領は配下に属した大名領主に分割された。土岐氏の領地の大半は佐竹義宣の弟である芦名義広に与えられ、江戸崎城は芦名氏の本城となり、竜ヶ崎城はその支城となった。このように、常陸南部の地は、豊臣方の大名・領主の領地として分割・再編成され、その支配拠点となる中心的な城郭は整備の手が加えられて存続したが、この過程の中で長峰城跡を含むその他の中小城郭群は破壊されていったものと推定される。



第427图 城郭遺構全体图



注・参考文献

- (1)～(4) 竜ヶ崎市教育委員会 『龍ヶ崎の中世城郭跡』龍ヶ崎市史別編Ⅱ 昭和62年
○新人物往來社 『日本城郭大系 4 茨城・栃木・群馬』 昭和54年
○茨城県教育財団 『外八代遺跡、茨城県教育財団文化財調査報告Ⅱ』 昭和55年
○茨城県教育財団 『八代B遺跡Ⅲ』 茨城県教育財団文化財調査報告第45集 昭和63年

第5節 土坑と溝について

1 土坑

土坑は、宿ヶ谷の西側の台地に61基、東側の台地に117基が検出された。それらの土坑は単独のもの、住居跡・占墳・塚・溝や土坑どうして重複しているものもみられる。また、土坑の平面形・長軸方向・大きさも様々である。なお、土坑に伴なうと思われる遺物を明確にとらえることが不可能であった。

本項では、粘土貼り土坑と武面に埋溝のあった土坑について検討する。

(1) 粘土貼り土坑 (第377・378・379図)

土坑の内側に粘土を貼った、いわゆる粘土貼り土坑が21基検出された。掘り方の平面形は、上部が比較的残っていると思われる第18・21・84・109・115・167号土坑等から見ると、隅丸長方形状を呈している。また、複乱や削平等が進んでその形さえ不明確な第170・174・182・183号土坑等も見られるが、ほとんどが隅丸長方形を呈していたものと思われる。断面形はやや深く残っているものを見ると、ほとんどが逆台形状を呈している。坑底はほぼ平坦かやや凹む浅い皿状を呈している。まとめると、平面形は隅丸長方形に、断面形は逆台形状に、坑底はほぼ平坦に掘った土坑である。その内側へ粘土を10～20cm程坑底や壁に沿ってしっかりと貼り付けているのである。

遺物は、表8の備考欄にあるとおり、内耳土器片を出土した土坑が3基、陶器片を出土したものが2基、石(礫)を出土したものが4基である。遺物から土坑の時期を特定するとすれば、内耳土器片の使われた14世紀末頃であろうかと思われる。なお、この土坑の性格は、宿ヶ谷の全体に散らばって所在していることから墓墳的なものではないと思われる。また、逆台形状に掘っていて、上部が開いて下部の方に負荷が少なくなるような思慮が働いていたものと思われる。すなわち、この土坑内は空洞ではなく液体等が貯蔵されていたものと思われる。この液体と内耳土器片の関係は、内耳土器に液体を入れるか、内耳土器を洗浄する等に係って破損したものと考えるのは怪率であろうか。なお、これらの土坑内外を精査したが上部構造物が存在した様子はなかった。

(2) 底面に壁溝のある土坑 (第381・382・383図)

坑底の壁際に溝をもつ、いわゆる壁溝のある土坑を12基検出した。これらの平面形は、第91号土坑が方形状を呈するものの、他の11基はその大小はあるがいずれも長方形を呈している。壁はいずれもほぼ垂直に近い状態である。深さは17～65cmである。坑底もほぼ平坦で、やや締まりを帯びている。坑底と壁の間にはH字状をした壁溝が全周している。この溝は排水溝的な役割を担っていたのではないだろうか。覆土は、いずれも多量のローム粒子・ロームブロックを含む褐色土系の埋土を主体とし、一部に暗褐色土が混じっていて締まりは弱く、人為的に埋戻している様子がうかがえる。これらの時期を決定できる遺物の出土はなかったが、住居跡や古墳を切って掘っており、切り合い関係等から考察して古墳時代よりは新しいものである。

性格を考えれば、深さや面積から考えて墓塚的なものではなく、竪穴式の住居の一部、もしくは作業場的なものと仮定した場合、坑底には住居跡のようなかたさがなかった。また、第44号土坑はオノ谷上110番地に、第91号土坑は宿580番地に、第99・100・107・108・111・121号土坑は宿596番地に、第141～143号土坑は宿597番地に、第178号土坑は宿644番地に有って、いずれも表土除去する以前の農道の近くに位置しており、近・現代に掘られた土坑と考えられる。なお、上部構造物については、土坑内・外に柱穴跡等は検出できずに不明である。

2 溝

溝は、宿2ノ谷の西側台地から大部分が検出された。溝の方向や深さ、長さ、また、調査区外へ延びているものなど様々である。そこで、本項では地境に視点を当てて検討してみた。

住居・都市整備公園による「龍ヶ岡地区街区確定現況地審調整重ね図」と調査した溝について地境等を重ね合わせて検討すると、地境や道路界、傾斜部と崖等の間に掘られたと思われる溝が多い。

この溝が先行して「地審調整図」なるものが作られたのか、またはその逆なのか、個々の溝と図面を検討して行くに疑問になるものがある。第398図は溝と地境の関係図である。この図から言えることは、畑と畑の境界溝は第3・4・6・7・8・18・25・26号溝、畑と道路境界溝は第9・12・14・23・24号溝、その他、篠等の侵入を防ぐために畑境に掘ったと思われる根切り溝は第2・5・21・28号溝等である。

以上の事から、その性格が不明なものもあるが、多くの溝は境界に係っているものが多いといえる。

終章 む す び

昭和61年7月に着手した長峰遺跡(45,473㎡)の発掘調査は、住居跡(竪穴遺構を含む)124軒、古墳35基、堀7条を含む多数の遺構・遺物を検出し、1年9カ月を費して昭和63年3月末日に終了した。本書は、その調査結果をまとめたものである。

この調査を通して、長峰遺跡は縄文時代から中世にかけての長期間にわたり、連続的あるいは断続的に生活が営まれた複合遺跡であることが明らかになった。弥生時代・古墳時代の集落については、本報告書で述べたように、遺跡のほぼ中央部に北から大きく入る宿二ノ谷を挟んだ台地の東側・西側に分布しており、検出された住居跡についても各時期ごとに特色ある形態を示している。弥生時代の住居跡の検出は、この時期から当地域に人々が移り住み生活が営まれたことを実証するものであり、51軒もの住居跡が検出されたのは県内においても希少なものである。

古墳時代については、前期において住居跡の数が急増するのに対し、中期には減少の傾向がみられ、ついに後期に至っては集落形成がなされなくなる。これらの住居跡は、各時期の集落を研究するにあたり、貴重な資料になるものと思われる。後期になると、当遺跡内には古墳が築造されるようになり、従来の生活の場から一変し、墓域としての性格をもつ聖域として活用されたものと考えられる。しかし、当遺跡内には古墳築造の時期に比定される集落が検出されていないことから、周辺地域にこれらと関わりをもつ集団の存在を考えなければならず、他に事例を求めつつ今後解明を進めていかなければならない事項と思われる。

中世の城郭遺構として検出された7条の堀は、長峰城跡として従来考えられていた城域の範囲がさらに西側に広がることを明らかにしたものである。しかし、当城については確実な資料はなく築城者や存続期間等について不明確な点が多いが、現在、竜ヶ崎市内に残されている他の中世城郭との比較・検討を進める中で検討を図っていきたいと考えている。

遺物としては、弥生式土器・土師器・埴輪等を主に、土師質土器・内耳土器・陶器・土製品・石製品・金属製品が多量に検出された。

長峰遺跡の整理を担当し、幾らかでも当遺跡の解明に努めたいと微力を尽くしてきたが、遺跡のもつ情報量に圧倒され、土器の分類も大まかなものとなり、検討の余地が多く残る不十分な結果になってしまった。今後、引き続き資料の分析・検討を行い、長峰遺跡とその周辺一帯の解明がより進展するよう努力していきたい。

最後に、本報告書をまとめるにあたり、竜ヶ崎市教育委員会をはじめ、関係各位の御指導・御協力に対し、文末ではあるが深く感謝の意を表す次第である。

写 真 图 版



昭和61年度調査遺跡全景



昭和62年度調査遺跡全景



第1号住居跡



第2号住居跡



第3号住居跡

PL4



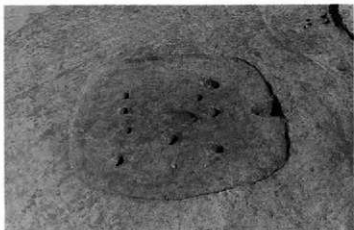
第4号住居跡
遺物出土状況



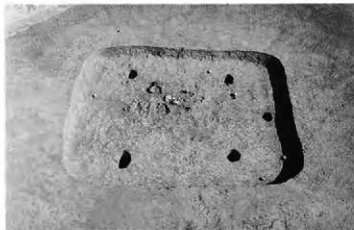
第4号住居跡



第5号住居跡
遺物出土状況



第5号住居跡

第6号住居跡
遺物出土状況

第6号住居跡

PL6



第7号住居跡
遺物出土状況



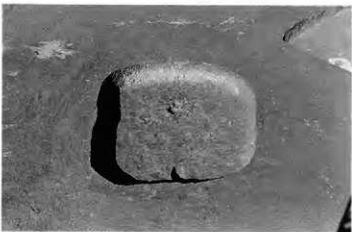
第7号住居跡



第8号住居跡



第9号住居跡
遺物出土状況



第9号住居跡



第10号住居跡
遺物出土状況

PL8



第10号住居跡



第11号住居跡



第12号住居跡
遺物出土状況



第12号住居跡

第13号住居跡
遺物出土状況

第13号住居跡

PL10



第14号住居跡
遺物出土状況



第14号住居跡



第15号住居跡
遺物出土状況



第15号住居跡



第16号住居跡
遺物出土状況



第16号住居跡

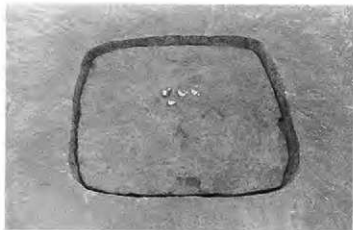
PL12



第17号住居跡
遺物出土状況



第17号住居跡



第18号住居跡
遺物出土状況



第18号住居跡



第18号住居跡
遺物出土状況



第19号住居跡

PL14



第20号住居跡



第21号住居跡



第22号住居跡



第23号住居跡



第24号住居跡
遺物出土状況



第24号住居跡

PL16



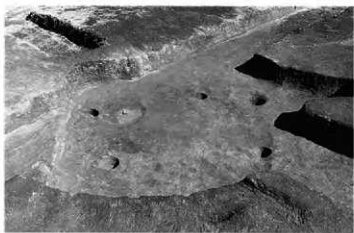
第25号住居跡



第26号住居跡



第27号住居跡



第26号住居跡



第29号住居跡



第30号住居跡
遺物出土状況

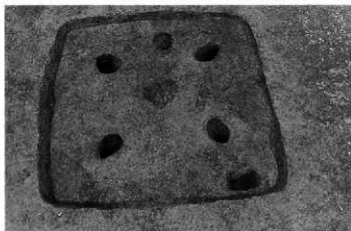
PL18



第30号住居跡



第31号住居跡
遺物出土状況

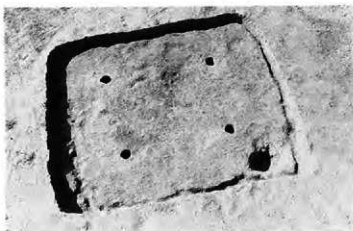


第32号住居跡

第33号住居跡
遺物出土状況



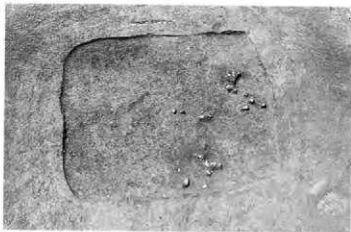
第33号住居跡



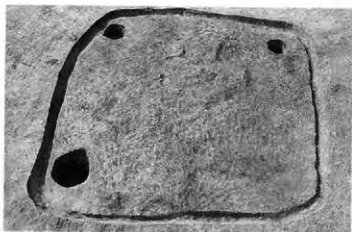
第34号住居跡
遺物出土状況



PL20



第35号住居跡
遺物出土状況



第35号住居跡



第36号住居跡
遺物出土状況



第36号住居跡

第37号住居跡
遺物出土状況

第37号住居跡

PL22



第38号住居跡



第39号住居跡
遺物出土状況



第39号住居跡



第40号住居跡
遺物出土状況



第40号住居跡
遺物出土状況

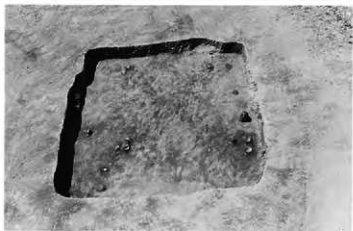


第40号住居跡

PL24



第41号住居跡



第42号住居跡
遺物出土状況



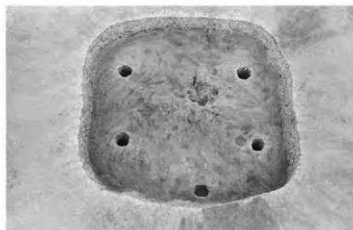
第42号住居跡
遺物出土状況



第42号住居跡



第43号住居跡
遺物出土状況



第43号住居跡

PL26



第44号住居跡



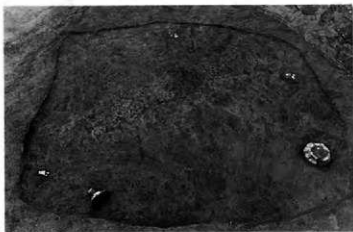
第45号住居跡
遺物出土状況



第45号住居跡
遺物出土状況



第45号住居跡



第46号住居跡
遺物出土状況



第46号住居跡
遺物出土状況

PL28



第46号住居跡
遺物出土状況



第46号住居跡



第47号住居跡



第48号住居跡
遺物出土状況



第48号住居跡



第49号住居跡
遺物出土状況

PL30



第49号住居跡



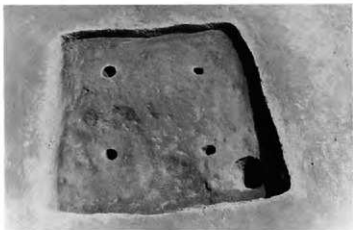
第50号住居跡



第51号住居跡
遺物出土状況



第51号住居跡
遺物出土状況



第51号住居跡



第52号住居跡

PL32



第53号住居跡



第54号住居跡



第55号住居跡

第56号住居跡
遺物出土状況



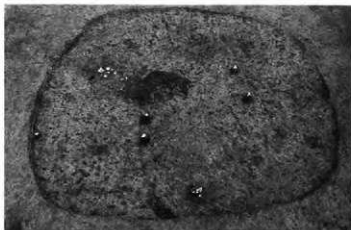
第56号住居跡
遺物出土状況



第56号住居跡



PL34



第58号住居跡
遺物出土状況



第58号住居跡



第59号住居跡
遺物出土状況



第59号住居跡

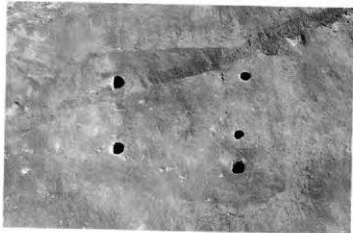


第61号住居跡



第62号住居跡

PL36



第63号住居跡



第64号住居跡



第65号住居跡



第66号住居跡



第67号住居跡



第68号住居跡
遺物出土状況

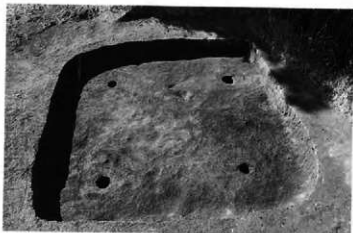
PL38



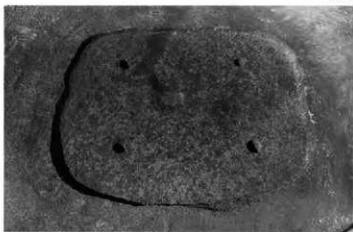
第68号住居跡



第69号住居跡
遺物出土状況



第69号住居跡



第70号住居跡

第71号住居跡
遺物出土状況

第71号住居跡

PL40



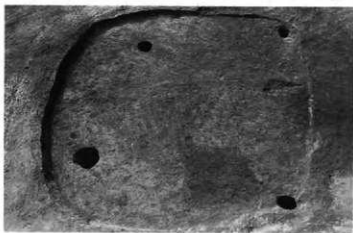
第72号住居跡
遺物出土状況



第72号住居跡



第73号住居跡
遺物出土状況



第73号住居跡



第74号住居跡



第75号住居跡
遺物出土状況

PL.42



第75号住居跡



第76号住居跡
遺物出土状況



第76号住居跡
遺物出土状況



第76号住居跡

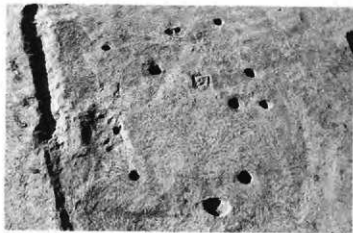


第77号住居跡
貯藏穴内遺物出土状況



第77号住居跡

PL44



第78号住居跡



第79号住居跡



第80号住居跡
遺物出土状況



第80号住居跡



第81号住居跡

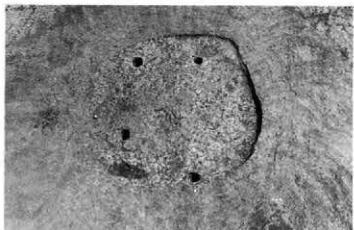


第82号住居跡
遺物出土状況

PL46



第02号住居跡



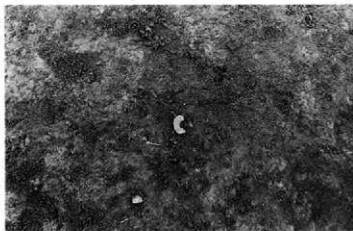
第03号住居跡



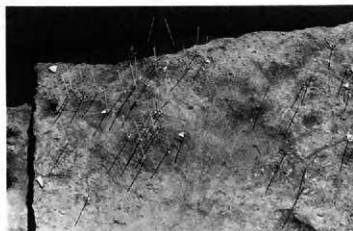
第04号住居跡



第85号住居跡
遺物出土状況



第85号住居跡
遺物出土状況



第85号住居跡
遺物出土状況

PL48



第85号住居跡
遺物出土状況

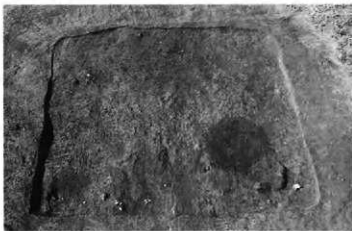


第86号住居跡
遺物出土状況（炭化材）

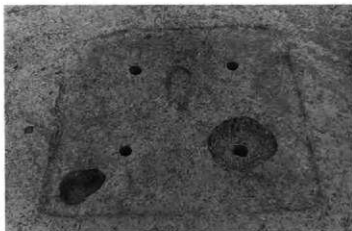


第86号住居跡

第88号住居跡
遺物出土状況



第88号住居跡



第89号住居跡



PL50



第90号住居跡
遺物出土状況



第90号住居跡



第91号住居跡
遺物出土状況



第91号住居跡
遺物出土状況(炭化材)

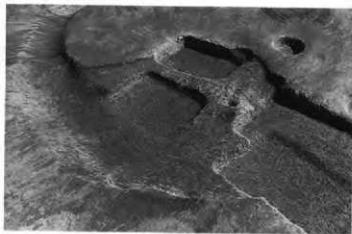


第91号住居跡



第92号住居跡
遺物出土状況

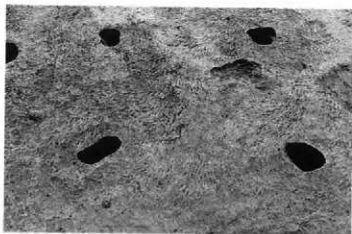
PL52



第92号住居跡



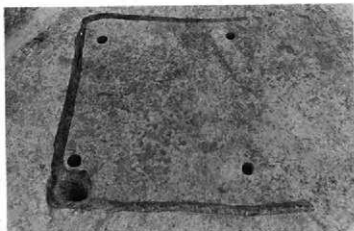
第93号住居跡



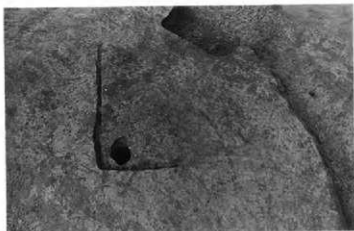
第94号住居跡



第85号住居跡
貯藏穴内遺物出土状況



第95号住居跡



第96号住居跡

PL54



第97号住居跡
炉内遺物出土状況



第97号住居跡



第98号住居跡



第99号住居跡



第100号住居跡
遺物出土状況



第100号住居跡
ピット内遺物出土状況

PL56



第100号住居跡



第101号住居跡
遺物出土状況



第101号住居跡

第102号住居跡
遺物出土状況



第102号住居跡
遺物出土状況



第102号住居跡



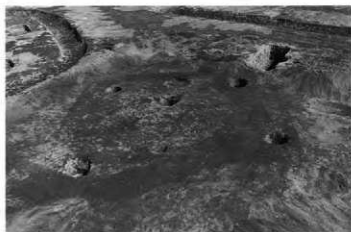
PL58



第103・125号住居跡



第104号住居跡
遺物出土状況



第104号住居跡



第105号住居跡
貯蔵穴内遺物出土状況



第105号住居跡
貯蔵穴内遺物出土状況



第105号住居跡

PL60



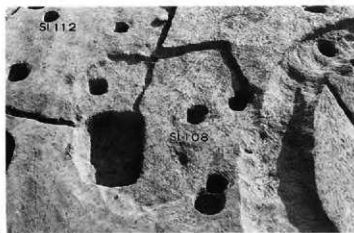
第106号住居跡



第107号住居跡



第108号住居跡
遺物出土状況（炭化材）



第108号住居跡



第110号住居跡

第111号住居跡
遺物出土状況

PL62



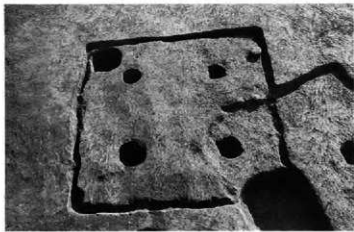
第111号住居跡
遺物出土状況



第111号住居跡



第112号住居跡
貯蔵穴内遺物出土状況



第112号住居跡

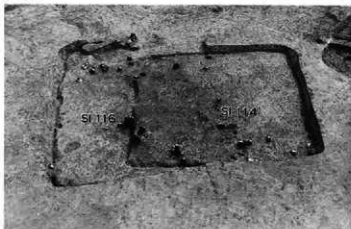


第113号住居跡
遺物出土状況



第113号住居跡

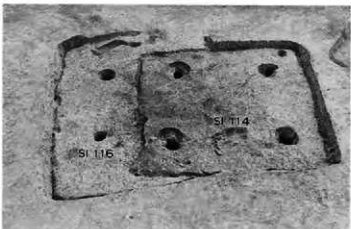
PL64



第114号住居跡
遺物出土状況



第114号住居跡
遺物出土状況



第114号住居跡



第115号住居跡



第116号住居跡
遺物出土状況

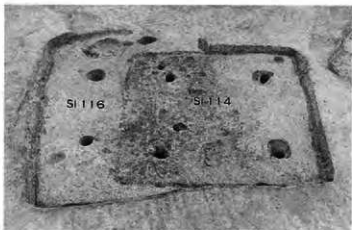


第116号住居跡
遺物出土状況

PL66



第116号住居跡
遺物出土状況

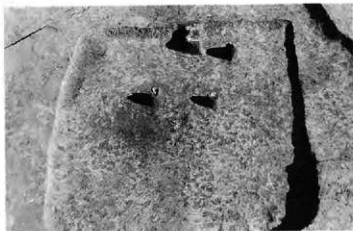


第116号住居跡



第117号住居跡

第118号住居跡
遺物出土状況



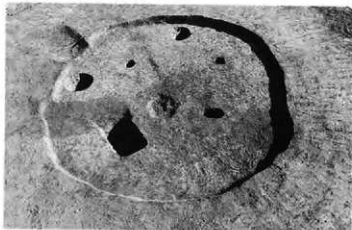
第118号住居跡



第119号住居跡
遺物出土状況



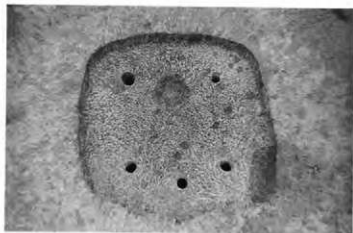
PL68



第118号住居跡



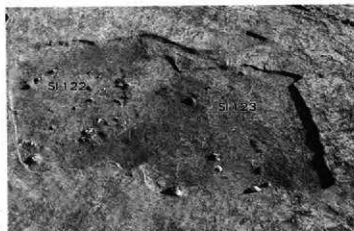
第120号住居跡
遺物出土状況



第120号住居跡



第121号住居跡

第122号住居跡
遺物出土状況第122号住居跡
遺物出土状況

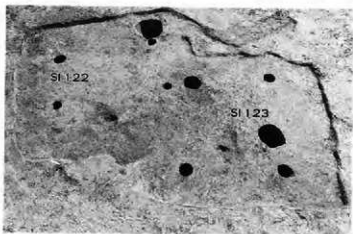
PL70



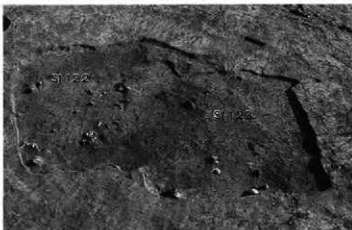
第122号住居跡
遺物出土状況



第122号住居跡
遺物出土状況



第122号住居跡



第123号住居跡
遺物出土状況



第123号住居跡
遺物出土状況

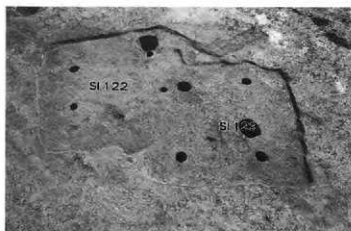


第123号住居跡
遺物出土状況

PL72



第123号住居跡
遺物出土状況



第123号住居跡



第124号住居跡
遺物出土状況

第124号住居跡
遺物出土状況



第124号住居跡
遺物出土状況



第124号住居跡



PL74



第1号古墳



第1号古墳



第1号古墳



第1号古墳
遺物出土状況



第1号古墳
遺物出土状況



第1号古墳
遺物出土状況

PL76



第2号古墳



第2号古墳



第2号古墳



第2号古墳



第2号古墳



第2号古墳

PL78



第3号古墳



第3号古墳



第3号古墳



第3号古墳

第3号古墳
遺物出土状況第3号古墳
遺物出土状況

PL80



第3号古墳
遺物出土状況



第3号古墳
遺物出土状況



第3号古墳
遺物出土状況



第3号古墳
遺物出土状況



第4号古墳



第5号古墳
遺物出土状況

PL82



第6号古墳



第7号古墳



第8号古墳



第8号古墳



第9号古墳



第10号古墳

PL84



第12号古墳
遺物出土状況



第12号古墳



第13号古墳



第11号古墳



第12号古墳
遺物出土状況



第12号古墳
遺物出土状況

PL86



第14・16号古墳



第15号古墳



第17号古墳

第17号古墳



第17号古墳



第17号古墳



PL88



第17号古墳



第17号古墳



第17号古墳
遺物出土状況

第17号古墳
遺物出土状況



第18号古墳



第19号古墳



PL90



第20号古墳



第21号古墳



第22号古墳



第23号古墳



第24号古墳



第25号古墳

PL92



第25号古墳
埋葬施設



第25号古墳
埋葬施設



第25号古墳
埋葬施設



第26号古墳



第27号古墳



第27号古墳
第1埋葬施設

PL94



第27号古墳
第2埋葬施設



第27号古墳
第2埋葬施設



第27号古墳



第28号古墳



第29号古墳



第29号古墳
埋葬施設

PL96



第29号古墳
埋葬施設



第29号古墳
埋葬施設



第29号古墳
埋葬施設



第30号古墳



第31号古墳



第32号古墳

PL98



第33号古墳
遺物出土状況



第33号古墳
遺物出土状況



第33号古墳
遺物出土状況



第33号古墳
遺物出土状況



第33号古墳
遺物出土状況



第33号古墳

PL100



第33号古墳
遺物出土状況



第35号古墳



第36号古墳



第2号土坑



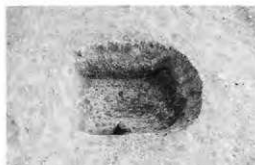
第3号土坑



第4号土坑



第5号土坑



第9号土坑



第11号土坑



第12号土坑



第14号土坑

PL102



第16号土坑



第17号土坑



第24·32号土坑



第25号土坑遗物出土状况



第25号土坑



第26号土坑



第28·29·38号土坑



第33号土坑



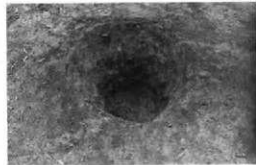
第34・35・36号土坑



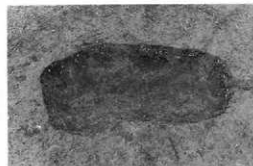
第39号土坑



第40号土坑



第41号土坑



第42号土坑



第44号土坑



第45号土坑



第46・47・48・49号土坑

PL104



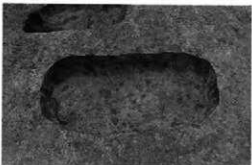
第56号土坑



第60号土坑



第65号土坑



第69号土坑



第70号土坑



第71号土坑



第73号土坑



第74号土坑



第75号土坑



第76·77号土坑



第79号土坑



第80·81号土坑



第82号土坑



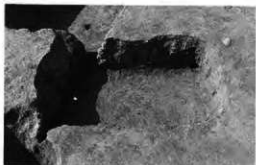
第83号土坑



第85·89号土坑



第86号土坑



第87号土坑



第88号土坑



第89号土坑



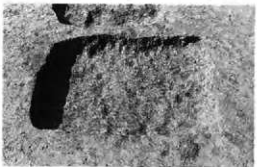
第91号土坑



第92号土坑



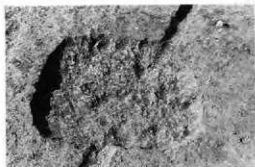
第93号土坑



第94号土坑



第95号土坑



第96号土坑



第97号土坑



第98号土坑



第100号土坑



第102号土坑



第103·135号土坑



第104·105号土坑



第107号土坑

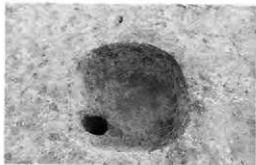
PL108



第111号土坑



第112号土坑



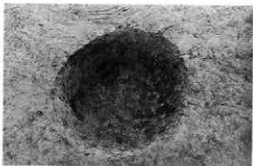
第113号土坑



第117号土坑



第118号土坑



第119号土坑



第120号土坑



第121·122·123号土坑



第125·126·127号土坑



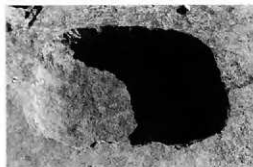
第128号土坑



第129号土坑



第130号土坑



第131号土坑



第133号土坑 (第2号地下式坑)



第133号土坑 (第2号地下式坑)



第136号土坑

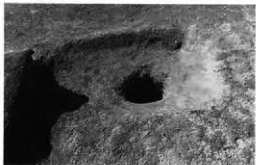
PL110



第138号土坑



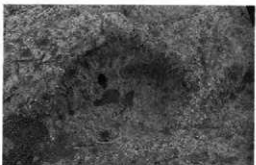
第139号土坑



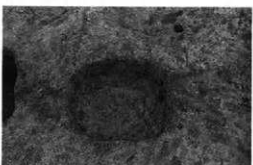
第140号土坑



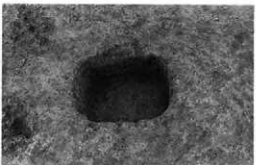
第141·142·143号土坑



第144号土坑



第145号土坑



第146号土坑



第147号土坑



第148·149号土坑



第150号土坑



第153号土坑



第154号土坑



第155号土坑



第156号土坑



第157号土坑

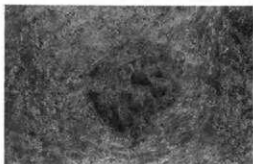


第158号土坑

PL112



第161号土坑



第162号土坑



第163号土坑



第164号土坑



第165号土坑



第166号土坑



第168号土坑



第171号土坑



第173号土坑



第175号土坑



第176号土坑



第177号土坑



第178号土坑



第179号土坑



第180号土坑



第185号土坑

PL114



第6号土坑



第6号土坑



第13号土坑



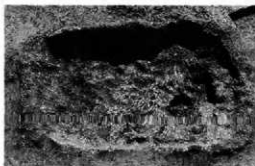
第13号土坑遗物出土状况



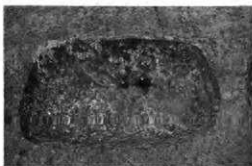
第21号土坑



第72号土坑



第84号土坑



第109号土坑



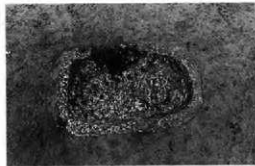
第110号土坑



第114号土坑



第115号土坑



第124号土坑



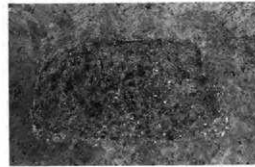
第137号土坑



第151号土坑



第151号土坑



第167号土坑

PL116



第167号土坑



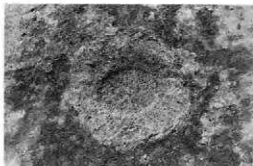
第168号土坑



第168号土坑



第170号土坑



第174号土坑



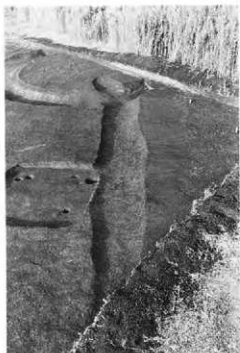
第182号土坑



第183号土坑



第183号土坑



第11号溝



第17号溝



第14号溝

PL118



第19・20号溝



第22号溝



第25・26号溝



第29号溝



第34号溝



第36号溝

PL120



堀 全 景



第1号堀



第1号堀



第1号堀

PL122



第2号堀



第2号堀（土橋・木橋跡）



第2号堀（土橋・木橋跡）



第2号堀



第2号堀 (陥穴)



第2号堀 (陥穴・段差)

PL124



第2号堀



第2号堀



第2号堀



第3号堀



第3号堀



第3号堀

PL126



第4号堀



第4号堀



第5号堀



第3·4·5号坑



第5号坑



第6号坑

PL128



第7号堀



第7号堀



長峰城跡周辺



第1号塚



第1号塚



第1号塚

PL130



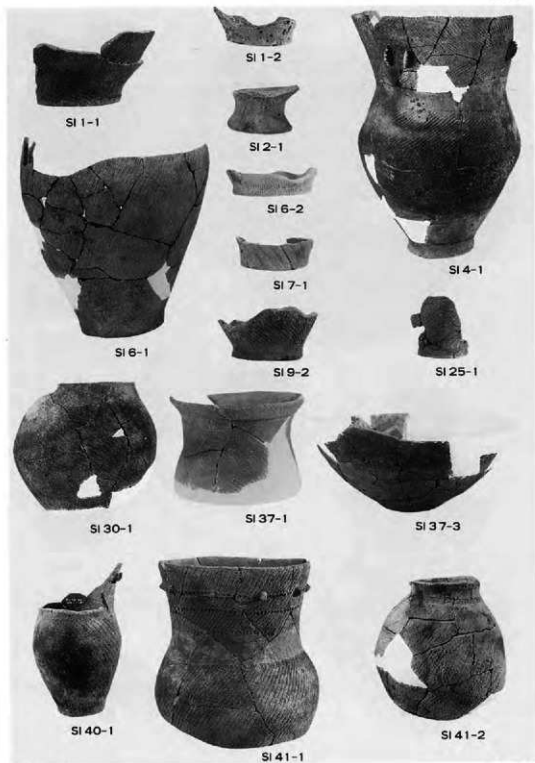
第2号塚

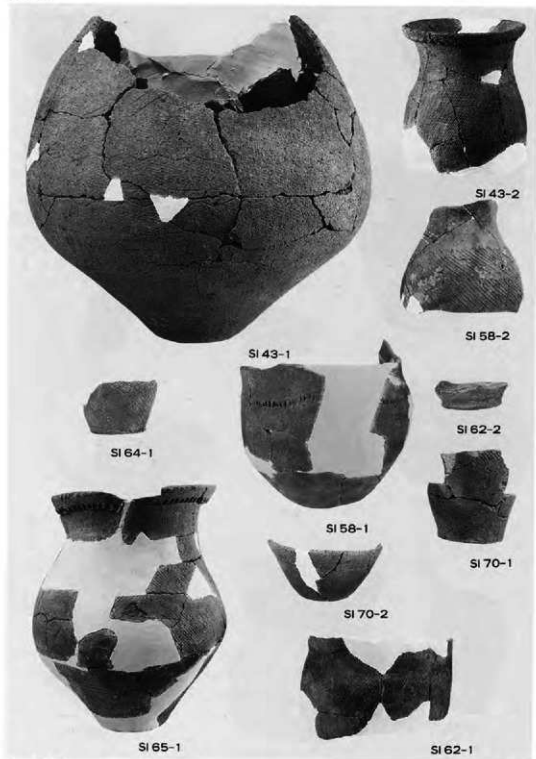


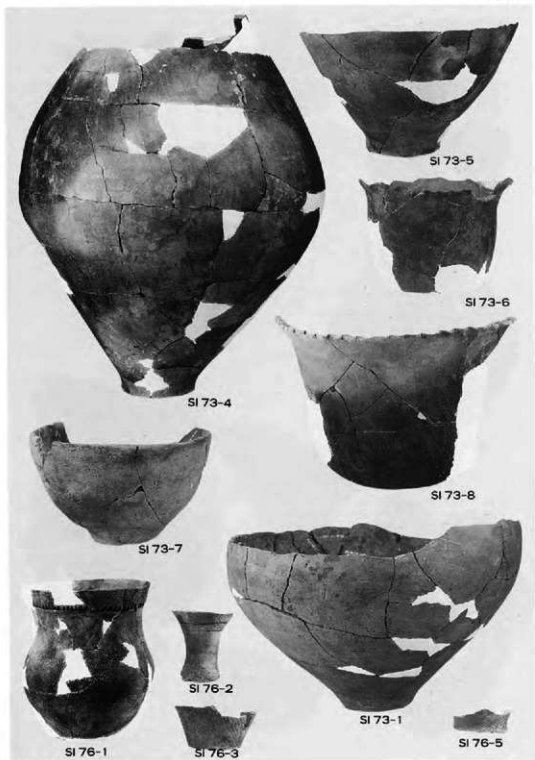
第2号塚

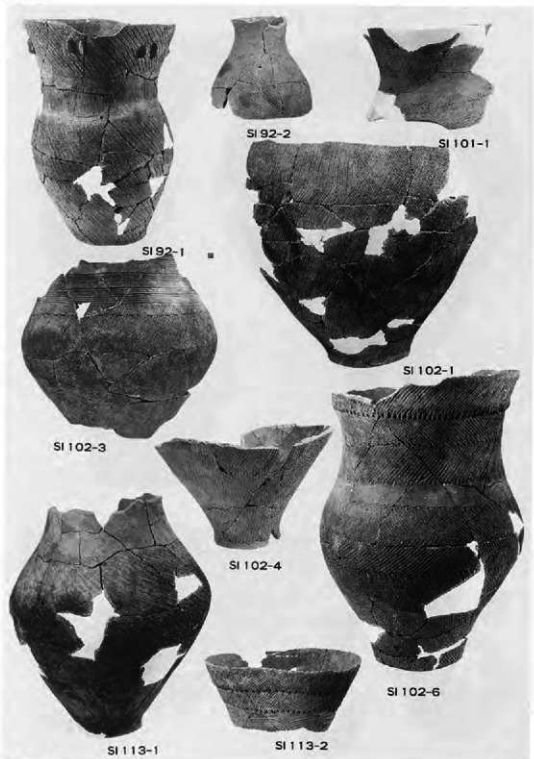


第1号塚掘立柱建物跡

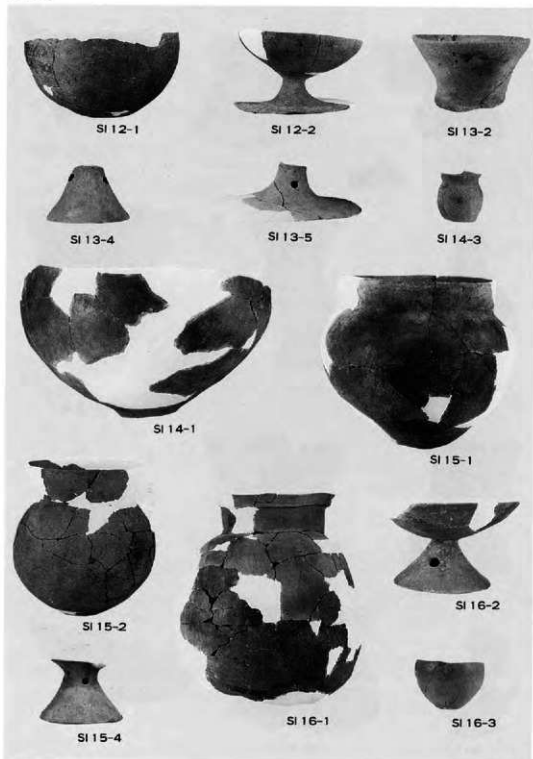


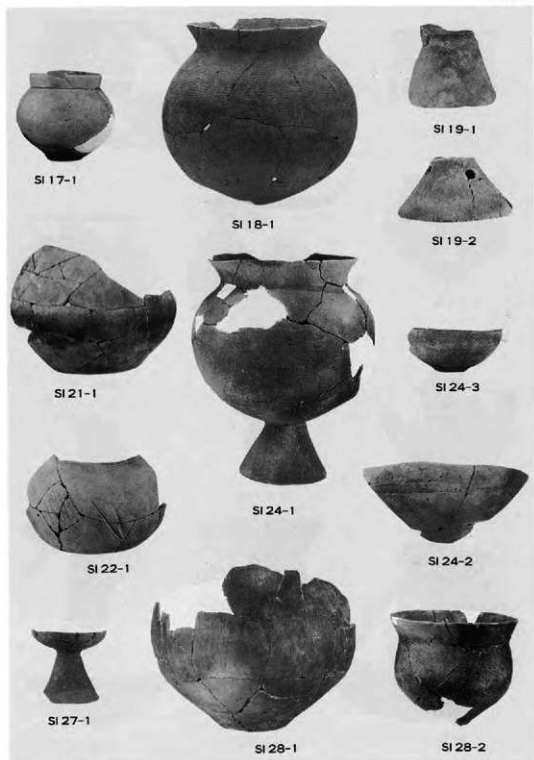






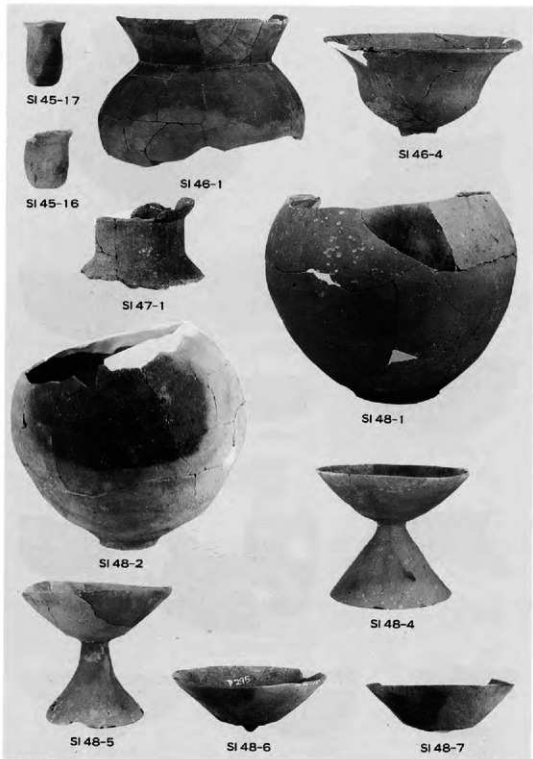


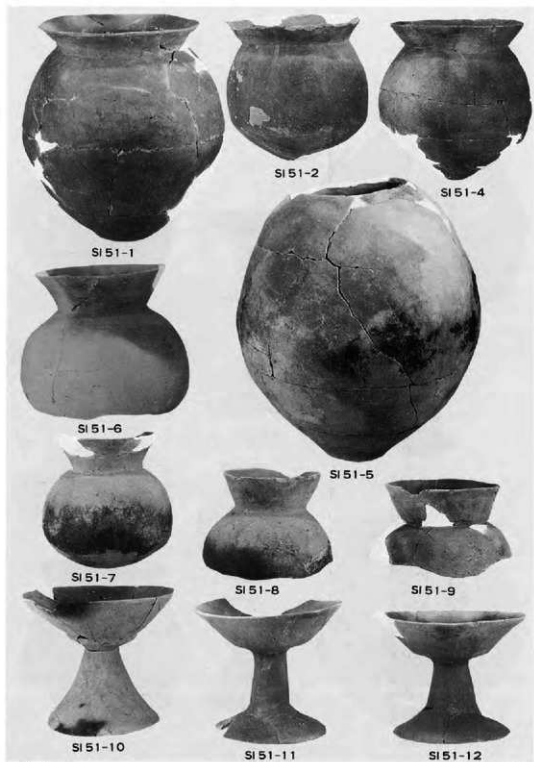


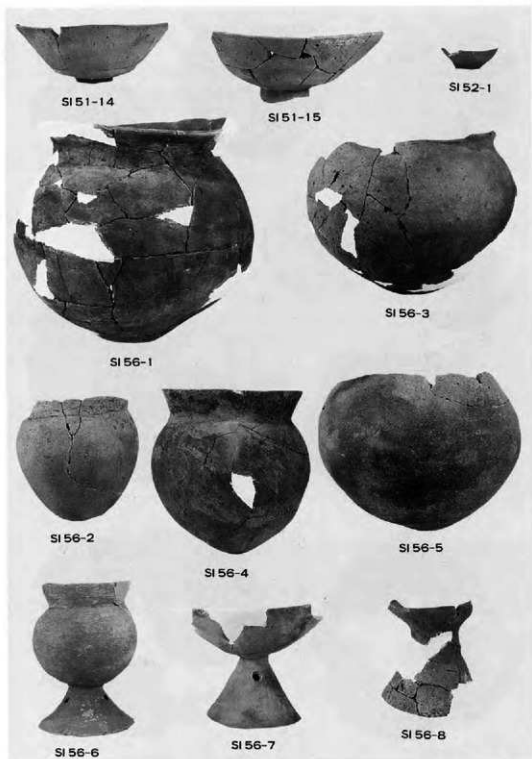


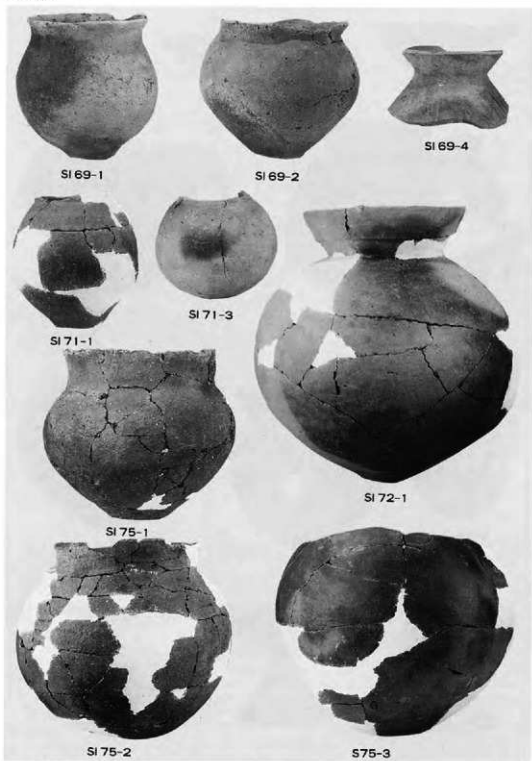


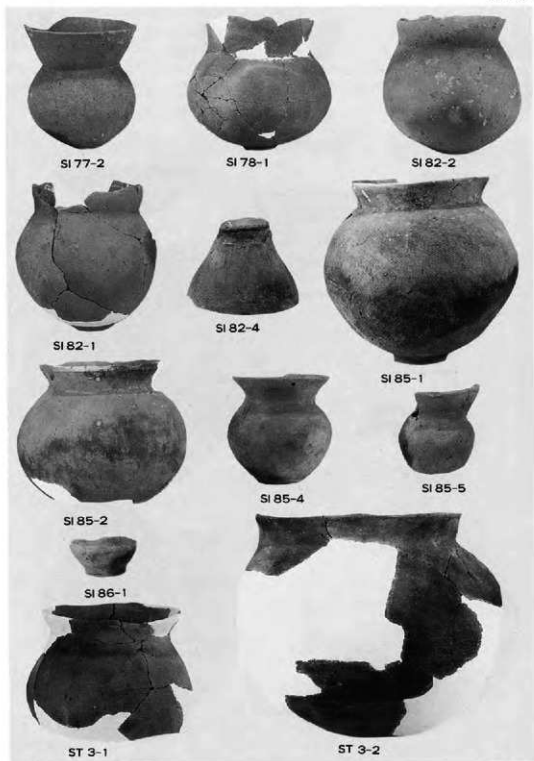


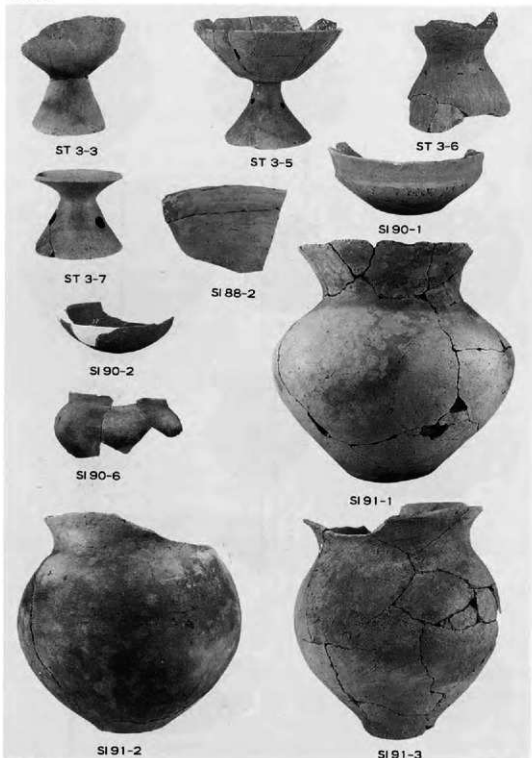
















SI 100-4



SI 100-9



SI 100-8



SI 100-13



SI 105-2



SI 105-4



SI 103-3

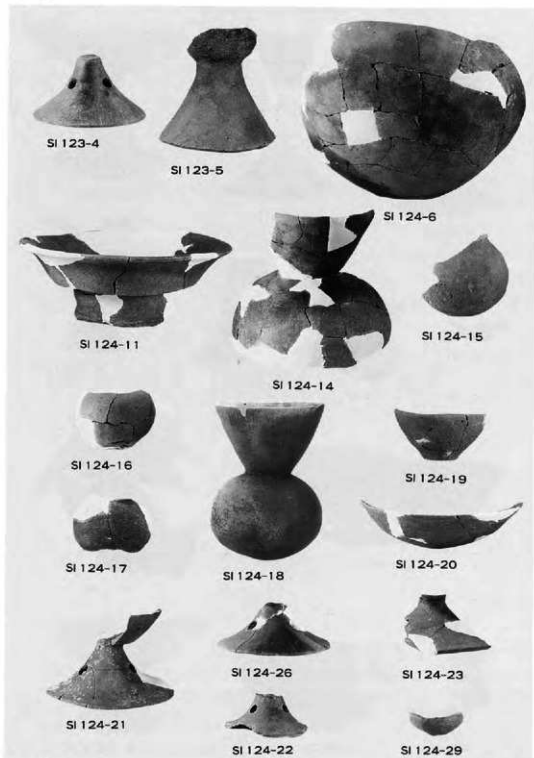


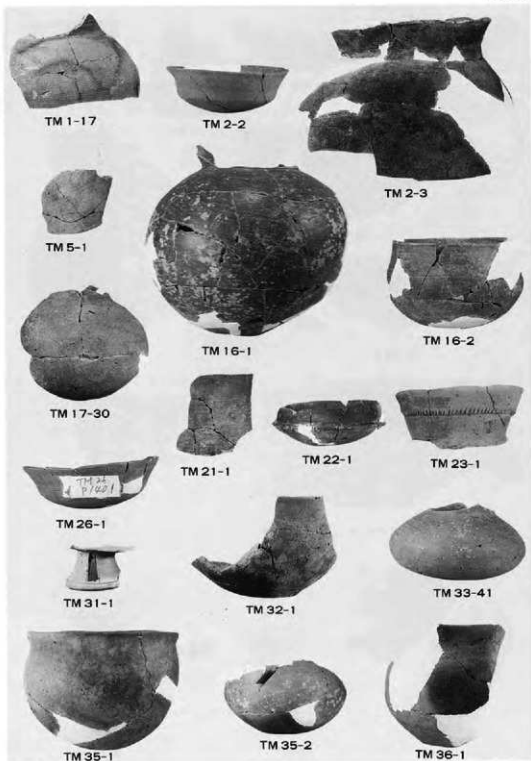
SI 105-5



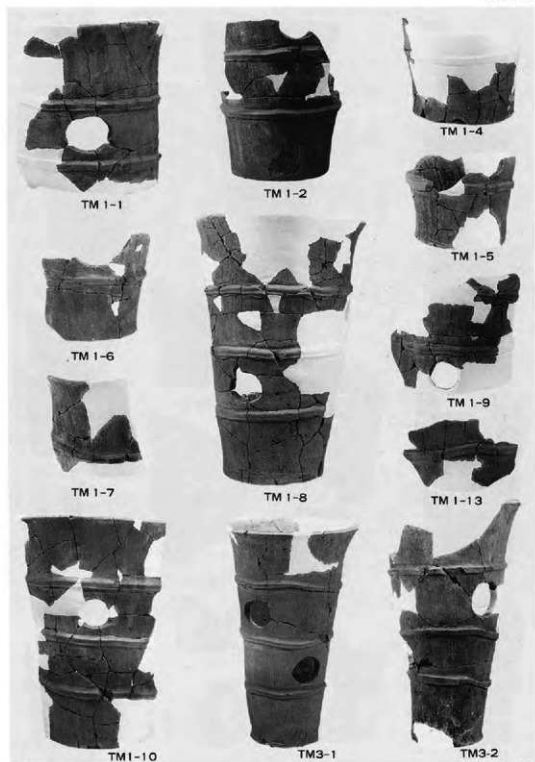
SI 111-5













円筒埴輪 (2)

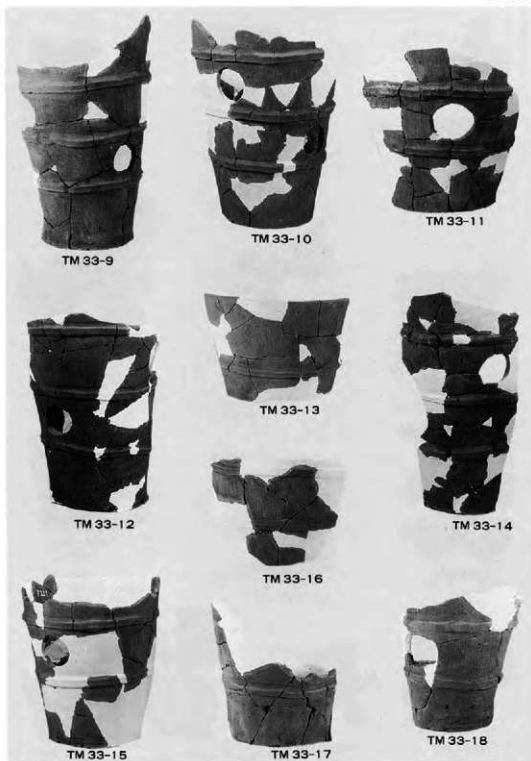
S = 1/3





円筒埴輪 (4)

S = 1/2, 3





TM 33-19



TM 33-20



TM 33-21



TM 33-22



TM 33-23



TM 33-24



TM 33-25



TM 33-26



TM 33-27



TM 33-28



TM 33-29

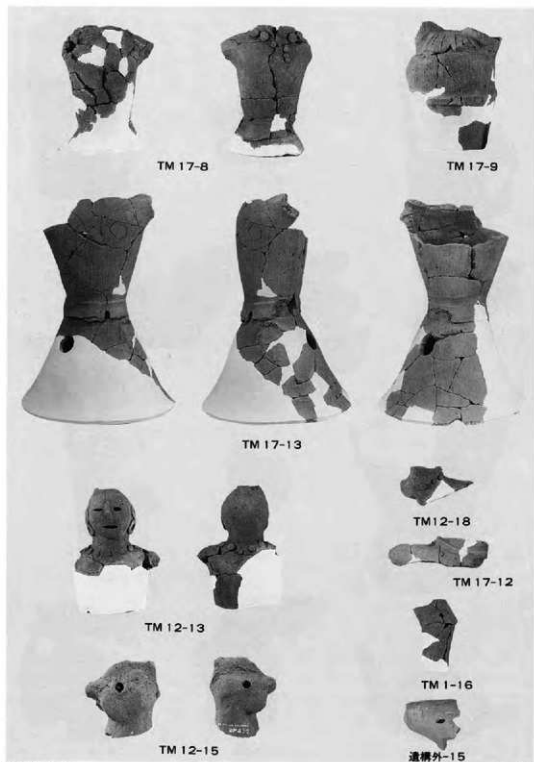


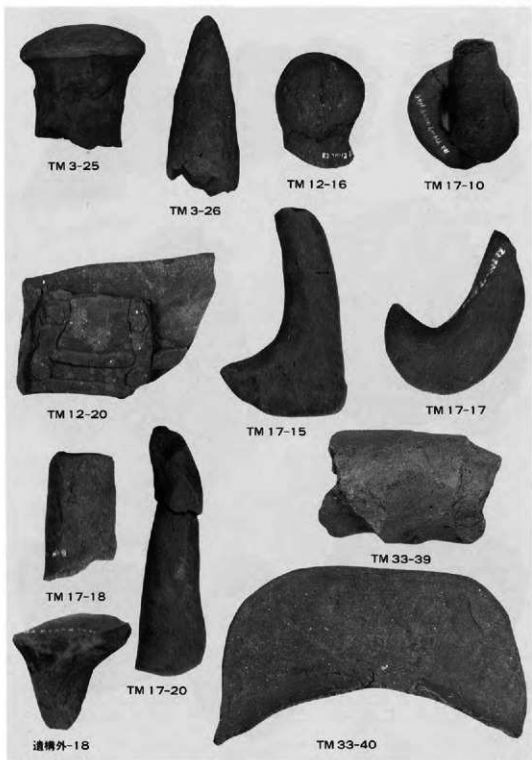
TM 33-30

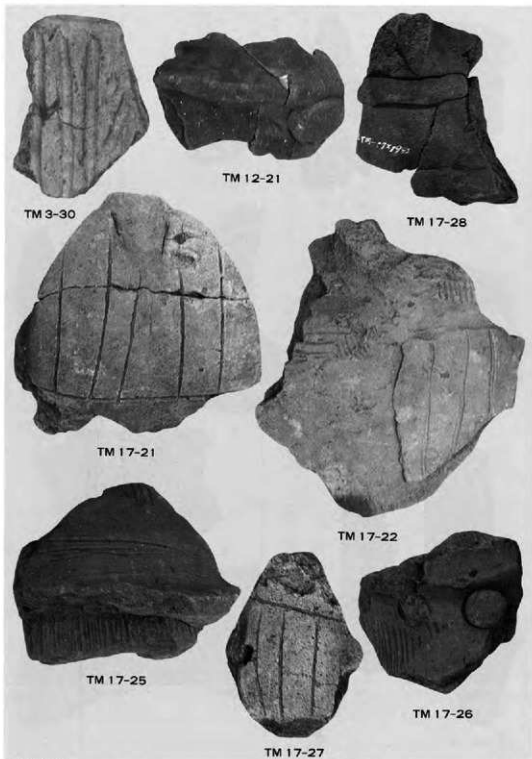


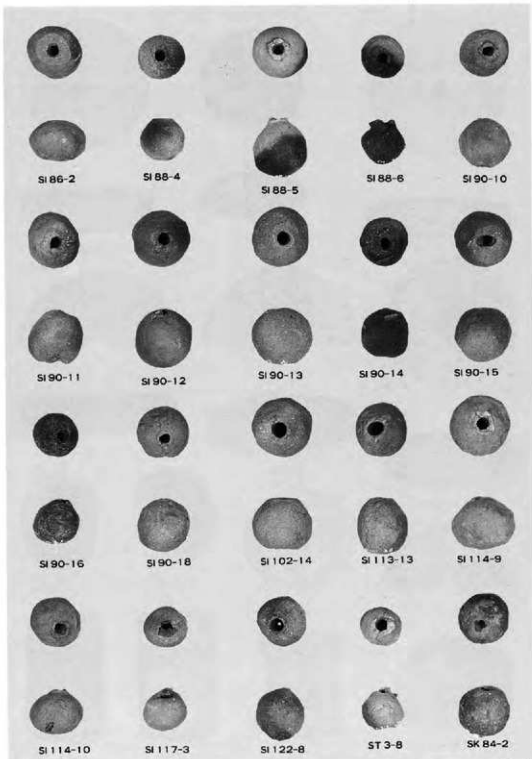
TM 33-31

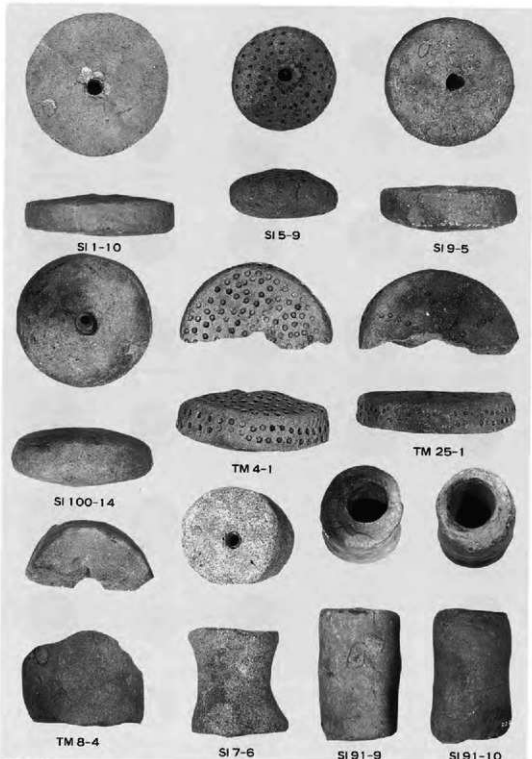


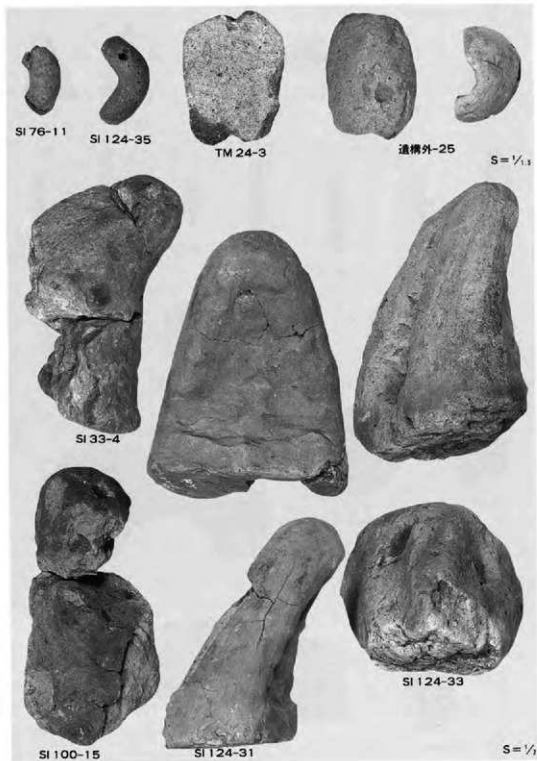


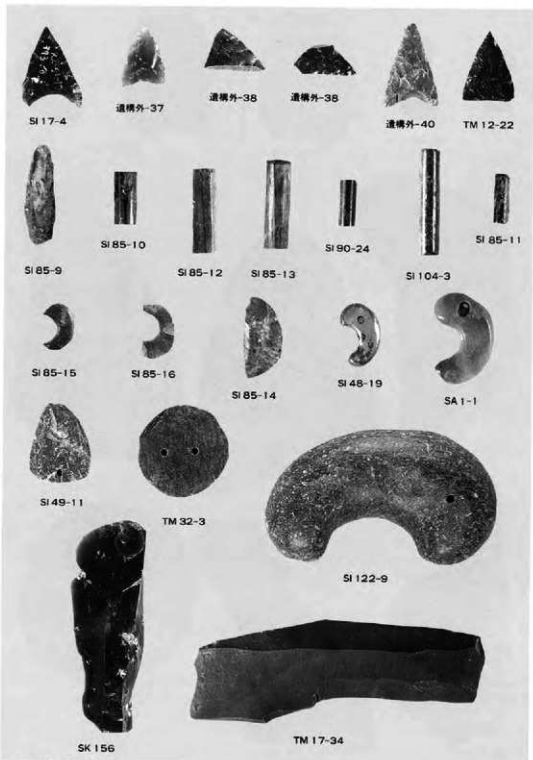














SI 42-7



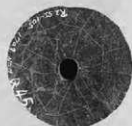
SI 45-18



SI 45-19



SI 90-23



SI 105-7



SI 92-6



SI 31-11



SI 33-5



SI 39-4



SI 69-5



SI 75-7



石製品 (3)



TM 35-4



SK 18



矩 3-7



遺構外-28



遺構外-30



SI 114-11



TM 33-44



SD 19-6



遺構外-36



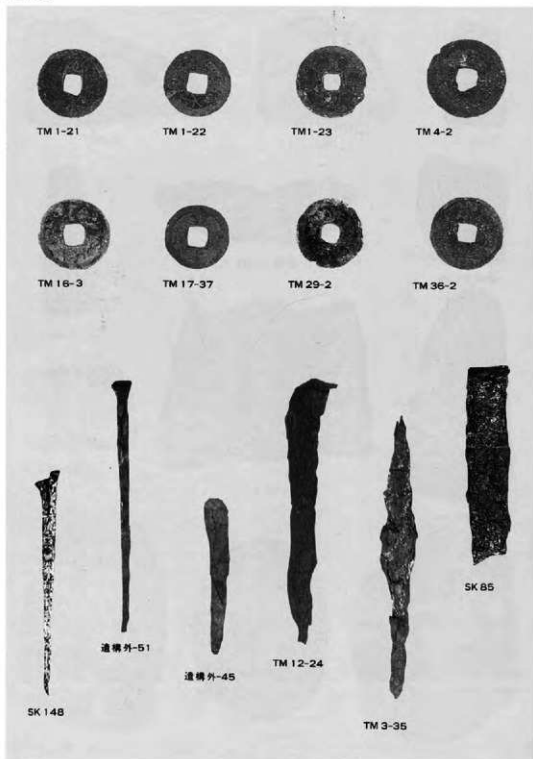
SI 73-10

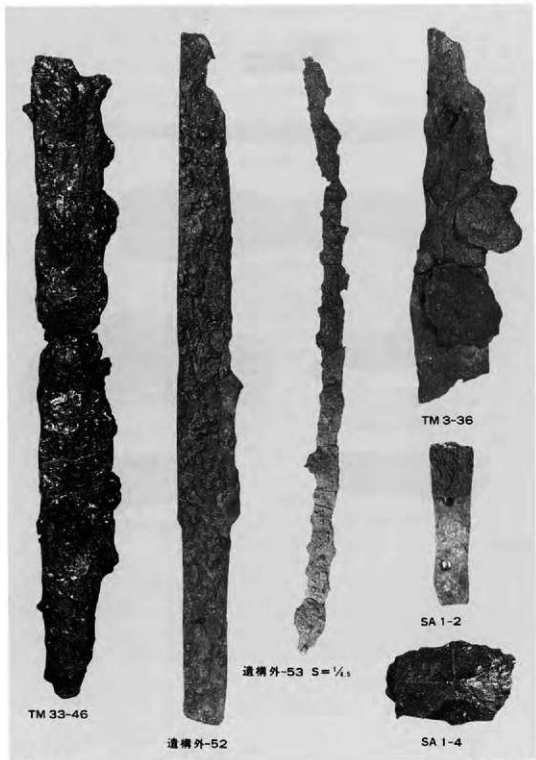


SI 98-4



SI 119-15







遺構外-49



遺構外-47



遺構外-48



遺構外-46



TM 33-45



SK 176-23



遺構外-44

金屬製品 (3)

茨城県教育財団文化財調査報告第58集

竜ヶ崎ニュータウン内埋蔵文化財調査報告書19

長峰遺跡(下)

平成2年3月25日印刷

平成2年3月31日発行

発行 財団法人 茨城県教育財団

水戸市南町3丁目4番57号

印刷 有限会社 川田プリント

水戸市上水戸4丁目6番53号

TEL: 0292 (53) 5551代

